

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第155集

吉野第2遺跡

Yoshino2 Site

一般国道10号延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3

2007

宮崎県埋蔵文化財センター

吉野第2遺跡

Yoshino2 Site

一般国道10号延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3



2007

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県埋蔵文化財センターでは、一般国道10号延岡道路建設事業に伴い、平成12年度から平成13年度、平成15年度と吉野第2遺跡の発掘調査を行いました。

今回の調査では後期旧石器時代の遺構や遺物をはじめ、縄文時代早期の集落跡や古墳時代の集落跡、中世から近世の道路状遺構や墓等、多大な成果を挙げることができました。特に縄文時代早期については平地住居跡や集石遺構、炬穴等といった遺構が確認され、当時の生活を再現する上で貴重な資料を得ることができました。これまで県北地域ではこの時期の集落構成が理解できる調査事例が少なく、集落構造を考える上でも注目される遺跡です。本書はこれらの調査結果をまとめたものです。

こうした先人の歩みを振り返り、郷土の歴史を解明する貴重な資料が得られたことは、大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場など広く一般に活用され、埋蔵文化財の保護と活用に対する認識と理解の一助となることを期待します。

調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、地元の方々に心からの謝意を表します。

平成19年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 清野 勉

例 言

1. 本書は、一般国道10号延岡道路建設事業に伴い実施された、宮崎県延岡市吉野町2120-1他所在の吉野遺跡の発掘調査報告書である。調査は国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所の委託を受けて宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
2. 吉野第2遺跡の調査期間及び調査面積は以下の通りである。
平成12年度：平成12年10月10日～平成13年 3月27日（2,587㎡）
平成13年度：平成13年 4月26日～平成13年 8月24日（ 950㎡）
平成15年度：平成15年11月17日～平成16年 3月 5日（1,500㎡）
なお、平成14年6月11日から同年8月13日の間、「吉野遺跡3次調査」として実施した調査は、遺跡名を今井野第2遺跡と変更した。よってその報告は宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第135集「今井野第2遺跡・天下城山遺跡」に収録している。
3. 現地調査に関する実測および写真撮影は主に、日高広人、田中 光、久保春夫、玉利勇二、松永幸寿、丹 俊河、古屋美樹が担当し、一部を福田泰典、鈴木健二、柳田晴子の協力を得た。
4. 土層断面および土器の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に準拠した。
5. 遺物および図面等の整理については宮崎県埋蔵文化財センターにて行った。そのうち図面作成・遺物実測・トレースについては日高、久保および整理作業員が行い、一部の石器実測と大半の石器トレースについてはアイシン精機株式会社に委託した。
6. 観察表および計測表は久保が作成した。
7. 石器の石材同定の一部については赤崎広志から教示を得た。
8. 近世墓出土の人骨については、松下孝幸氏（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）に鑑定及び玉稿を頂いた。
9. 本書に使用した方位はすべて座標北である。座標は旧国土座標第Ⅱ系に拠る。またレベルは海拔絶対高を用いた。これらの基準点の設置を株式会社エースコンサルタントに委託した。
10. 遺物写真については、日高、久保、今塩屋毅行が撮影した。
11. 本書に使用した位置図は、国土地理院発行の5万分の1図『延岡』を、また周辺地形図は延岡市作成の2千5百分の1図『延岡都市計画基本図30・39』をもとに作成した。
12. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
SA=竪穴住居跡・平地住居跡、SB=掘立柱建物跡、SC=土坑、SD=土壇、
SE=溝状遺構、SG=道路状遺構、SH=ピット、SI=礎群・集石遺構、SP=炉穴
13. 挿図の縮尺は各図に示している。
14. 本書の執筆は第1章・第1節を松林豊樹、第1章・第2節～第Ⅲ章、第Ⅴ章、第Ⅵ章を日高、第Ⅳ章を日高・久保がそれぞれ担当した。編集は日高が行った。
15. 調査の記録類および出土遺物は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第3節	遺跡の位置と環境	2
1.	地理的環境	2
2.	歴史的環境	4
第Ⅱ章	調査の方法と経過	7
第1節	調査の方法	7
第2節	調査の経過	7
第3節	遺跡の層序	12
第Ⅲ章	A地点の調査	15
第1節	旧石器時代	15
1.	第Ⅱ期	15
(1)	遺構	15
(2)	出土石器	15
(3)	石材別資料	30
2.	第Ⅲ期	60
第2節	縄文時代～弥生時代	66
1.	縄文時代早期の遺構と遺物	66
(1)	遺構	66
(2)	土器	82
(3)	石器	92
2.	縄文時代後期～晩期の遺構と遺物	114
(1)	遺構	114
(2)	土器	114
(3)	石器	116
第3節	古墳時代	118
1.	古墳時代の遺構と遺物	118
第4節	古代以降	128
1.	古代以降の遺構と遺物	128
(1)	掘立柱建物跡	128
(2)	道路状遺構	128
(3)	溝状遺構	129
(4)	古代～近世の遺物	130
2.	時期不明の遺構	131

(1) 溝状遺構	131
(2) 土坑	131
第IV章 B・C地点の調査	134
第1節 旧石器時代	134
1. 第I期	134
(1) 石器	134
2. 第II期	134
(1) 石器	134
第2節 縄文時代	137
1. 縄文時代早期の遺構と遺物	137
(1) 遺構	137
(2) 土器	143
(3) 石器	144
2. 縄文時代晩期の遺構と遺物	146
3. 縄文時代の石器	148
第3節 弥生以降	150
1. 弥生時代～中世の遺物	150
(1) 弥生時代～古代の遺物	150
(2) 中世の遺物	150
(3) 石製品	152
2. 近世以降の遺構と遺物	152
(1) 掘立柱建物跡	152
(2) 近世墓	153
(3) 土坑	154
(4) 近世の遺物	156
3. 時期不明の遺構	156
(1) 掘立柱建物跡	156
第V章 自然科学分析	160
第VI章 まとめ	164

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3	第7図 A地点旧石器時代第II期遺構及び遺物分布図	14
第2図 周辺地形図	6	第8図 A地点礫群(S1)実測図	16
第3図 確認トレンチ及び調査区配置図	9	第9図 A地点旧石器時代第II期遺物分布図1	17
第4図 年度別調査範囲	10	第10図 A地点旧石器時代第II期石器実測図1	19
第5図 基本層序図	12		
第6図 各地点の土層柱状図	13		

第 11 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 2	20	第 33 图	A 地点旧石器时代第 II 期遗物分布图 7	43
第 12 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 3	21	第 34 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 19	44
第 13 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 4	22	第 35 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 20	45
第 14 图	A 地点旧石器时代第 II 期遗物分布图 2	23	第 36 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 21	46
第 15 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 5	24	第 37 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 22	47
第 16 图	A 地点旧石器时代第 II 期遗物分布图 3	25	第 38 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 23	48
第 17 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 6	26	第 39 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 24	49
第 18 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 7	27	第 40 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 25	50
第 19 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 8	28	第 41 图	A 地点旧石器时代第 II 期遗物分布图 8	51
第 20 图	A 地点旧石器时代第 II 期遗物分布图 4	29	第 42 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 26	52
第 21 图	A 地点旧石器时代第 II 期遗物分布图 5	31	第 43 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 27	53
第 22 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 9	32	第 44 图	A 地点旧石器时代第 II 期遗物分布图 9	54
第 23 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 10	33	第 45 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 28	55
第 24 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 11	34	第 46 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 29	56
第 25 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 12	35	第 47 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 30	57
第 26 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 13	36	第 48 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 31	58
第 27 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 14	37	第 49 图	A 地点旧石器时代第 II 期遗物分布图 10	59
第 28 图	A 地点旧石器时代第 II 期遗物分布图 6	38	第 50 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 32	60
第 29 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 15	39	第 51 图	A 地点旧石器时代第 III 期遗物分布图 · 石器 实测图	61
第 30 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 16	40	第 52 图	A 地点绳文时代早期遗物分布图 ..	65
第 31 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 17	41	第 53 图	A 地点平地住居跡 (S A 4) 实测图	66
第 32 图	A 地点旧石器时代第 II 期石器实测图 18	42	第 54 图	A 地点散碟分布图	67
			第 55 图	A 地点集石遺構 (S 1) 实测图 1 ·	68
			第 56 图	A 地点集石遺構 (S 1) 实测图 2 ·	69

第 57 图	A 地点集石遺構 (S 1) 実測図 3	70	第 84 图	A 地点磨石・敲石・台石・裝飾品分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	108
第 58 图	A 地点集石遺構 (S 1) 実測図 4	71	第 85 图	A 地点縄文時代早期石器実測図 10 ・・・・・・・・・・・・・・・・	109
第 59 图	A 地点集石遺構 (S 1) 実測図 5	72	第 86 图	A 地点縄文時代晩期～中世遺構分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	113
第 60 图	A 地点竈穴 (S P) 実測図 1	75	第 87 图	A 地点焼土及び出土遺物実測図	114
第 61 图	A 地点竈穴 (S P) 実測図 2	76	第 88 图	A 地点縄文時代晩期～晩期土器実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	115
第 62 图	A 地点土坑 (S C) 実測図 1	77	第 89 图	A 地点縄文時代晩期～晩期石器実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	116
第 63 图	A 地点土坑 (S C) 実測図 2	78	第 90 图	A 地点 弥生時代土器実測図	116
第 64 图	A 地点遺構内遺物実測図	79	第 91 图	A 地点 1 号竈穴住居跡 (S A 1) 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	118
第 65 图	A 地点遺物分布図	80	第 92 图	A 地点 1 号竈穴住居跡 (S A 1) 出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	119
第 66 图	A 地点土器分布図	81	第 93 图	A 地点 2 号竈穴住居跡 (S A 2) 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	120
第 67 图	A 地点縄文時代早期土器実測図 1 ・・・・・・・・・・・・・・・・	83	第 94 图	A 地点 2 号竈穴住居跡 (S A 2) 出土遺物実測図 1 ・・・・・・・・・・・・・・・・	121
第 68 图	A 地点縄文時代早期土器実測図 2 ・・・・・・・・・・・・・・・・	84	第 95 图	A 地点 2 号竈穴住居跡 (S A 2) 出土遺物実測図 2 ・・・・・・・・・・・・・・・・	122
第 69 图	A 地点縄文時代早期土器実測図 3 ・・・・・・・・・・・・・・・・	85	第 96 图	A 地点 2 号竈穴住居跡 (S A 2) 出土遺物実測図 3 ・・・・・・・・・・・・・・・・	123
第 70 图	A 地点縄文時代早期土器実測図 4 ・・・・・・・・・・・・・・・・	86	第 97 图	A 地点 3 号竈穴住居跡 (S A 3) 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	124
第 71 图	A 地点縄文時代早期土器実測図 5 ・・・・・・・・・・・・・・・・	87	第 98 图	A 地点 3 号竈穴住居跡 (S A 3) 出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	124
第 72 图	A 地点打製石鏃・尖頭状石器・局部磨製尖頭器分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	93	第 99 图	A 地点 1 号獨立柱建物跡 (S B 1) 実測図 ・出土遺物実測図	128
第 72 图	A 地点縄文時代早期石器実測図 1	94	第 100 图	A 地点 1 号道路状遺構 (S G 1) 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	129
第 73 图	A 地点スクレイパー・石鏃・楔形石器分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	95	第 101 图	A 地点 1 号道路状遺構 (S G 1) 出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	129
第 74 图	A 地点縄文時代早期石器実測図 2 ・・・・・・・・・・・・・・・・	96	第 102 图	A 地点 1 号溝状遺構 (S E 1) 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	130
第 75 图	A 地点縄文時代早期石器実測図 3 ・・・・・・・・・・・・・・・・	97	第 103 图	A 地点古代～近世遺物実測図	130
第 76 图	A 地点剥片類・石核分布図	98	第 104 图	A 地点 2 号溝状遺構 (S E 2) 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	131
第 77 图	A 地点縄文時代早期石器実測図 4 ・・・・・・・・・・・・・・・・	99	第 105 图	A 地点土坑 (S C) 実測図	131
第 78 图	A 地点縄文時代早期石器実測図 5 ・・・・・・・・・・・・・・・・	100	第 106 图	B・C 地点旧石器時代遺物分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	133
第 79 图	A 地点局部磨製石斧・打製石斧・礫器分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	102	第 107 图	B・C 地点旧石器時代第 1 期石器実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	134
第 80 图	A 地点縄文時代早期石器実測図 6 ・・・・・・・・・・・・・・・・	103			
第 81 图	A 地点縄文時代早期石器実測図 7 ・・・・・・・・・・・・・・・・	104			
第 82 图	A 地点縄文時代早期石器実測図 8 ・・・・・・・・・・・・・・・・	105			
第 83 图	A 地点縄文時代早期石器実測図 9 ・・・・・・・・・・・・・・・・	106			

第108図	B・C地点旧石器時代第II期石器実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	135
第109図	B・C地点縄文時代早期遺構分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	136
第110図	B・C地点炉穴（SP）実測図1 ・・・・・・・・・・・・・・・・	137
第111図	B・C地点炉穴（SP）実測図2 ・・・・・・・・・・・・・・・・	138
第112図	B・C地点炉穴（SP）実測図3 ・・・・・・・・・・・・・・・・	139
第113図	B・C地点炉穴（SP）実測図4 ・・・・・・・・・・・・・・・・	140
第114図	B・C地点 炉穴内出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	140
第115図	B地点26号土坑（SC26）実測図及び 出土遺物実測図・・・・・・・・	141
第116図	B・C地点縄文時代早期遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	142
第117図	B・C地点縄文時代早期石器実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・	143
第118図	B・C地点縄文時代晩期～近世以降遺構 分布図・・・・・・・・	145

第120図	B・C地点27号土坑（SC27）出土実 測図・・・・・・・・	146
第121図	B・C地点縄文時代石器実測図1 ・・・・・・・・	147
第122図	B・C地点縄文時代石器実測図2 ・・・・・・・・	148
第123図	B・C地点弥生時代～古代遺物実測図 ・・・・・・・・	150
第124図	B・C地点中世遺物実測図・・・・	151
第125図	B・C地点石製品実測図・・・・	152
第126図	B地点2号掘立柱建物跡（SB2）実測 図及び出土遺物実測図・・・・	153
第127図	B地点1号近世墓（SD1）及び出土遺 物実測図・・・・・・・・	153
第128図	B地点28号土坑（SC28）実測図 ・・・・・・・・	155
第129図	B地点28号土坑（SC28）出土遺物実 測図・・・・・・・・	155
第130図	B地点近世遺物実測図・・・・	157
第131図	B地点掘立柱建物跡（SB）実測図 ・・・・・・・・	157
第132図	遺跡の位置・・・・・・・・	161
第133図	人骨の残存図・・・・・・・・	163

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧・・・・・・・・	11
第2表	A地点礫群（S1）一覧表・・・・	16
第3表	主要石材分類一覧・・・・・・・・	62
第4表	A地点旧石器時代石器計測表1・・	62
第5表	A地点旧石器時代石器計測表2・・	63
第6表	A地点旧石器時代石器計測表3・・	64
第7表	A地点集石遺構一覧表・・・・	73
第8表	A地点炉穴一覧表・・・・・・・・	76
第9表	A地点土坑一覧表・・・・・・・・	78
第10表	A地点縄文時代早期土器観察表1・・	89
第11表	A地点縄文時代早期土器観察表2・・	90
第12表	A地点縄文時代早期土器観察表3・・	91
第13表	A地点縄文時代早期石器計測表1・・	110
第14表	A地点縄文時代早期石器計測表2・・	111
第15表	A地点縄文時代早期石器計測表3・・	112
第16表	A地点縄文時代後晩期土器観察表・・	117
第17表	A地点縄文時代後晩期石器計測表・・	117
第18表	A地点弥生時代土器観察表・・・・	118

第19表	A地点竪穴住居跡出土土器観察表1 ・・・・・・・・	125
第20表	A地点竪穴住居跡出土土器観察表2 ・・・・・・・・	126
第21表	A地点竪穴住居跡出土土器観察表3 ・・・・・・・・	127
第22表	A地点竪穴住居跡出土石器計測表・・	127
第23表	A地点竪穴住居跡出土鉄器計測表・・	127
第24表	A地点古代～近世土器観察表・・・・	132
第25表	A地点土錘計測表・・・・・・・・	132
第26表	A地点煙管計測表・・・・・・・・	132
第27表	B・C地点旧石器遺物計測表・・・・	135
第28表	B・C地点炉穴一覧表・・・・・・・・	141
第29表	B・C地点縄文時代早期土器観察表 ・・・・・・・・	144
第30表	B・C地点縄文時代早期石器計測表 ・・・・・・・・	144

第31表	B・C地点縄文時代晩期土器観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・	149
第32表	B・C地点縄文時代石器計測表	149
第33表	B・C地点土器観察表	158
第34表	B・C地点土鍾計測表	159

第35表	B・C地点瓦観察表	159
第36表	B・C地点石器計測表	159
第37表	B・C地点金属製品計測表	159
第38表	B・C地点銭貨計測表	159
第39表	年齢区分	160

図版目次

図版1	・・・・・・・・・・・・・・・・	167
	吉野第2遺跡遠景(西より)	
	調査区全景(平成12年度調査)	
図版2	・・・・・・・・・・・・・・・・	168
	A地点調査区(平成15年度、東より)	
	A地点S I 3(東西より)	
	A地点S A 4(東より)	
	A地点 散礫(北より)	
	A地点S I 10～12(東より)	
	A地点S I 10～12配石(東より)	
	A地点S P 14(東より)	
図版3	・・・・・・・・・・・・・・・・	169
	A地点S A 1(北より)	
	A地点S A 2(北より)	
	B地点調査区	
	B地点S P 20(東より)	
	B地点S B 2(西より)	
	B地点S B 3・4(北西より)	
	B地点S B 3柱穴埋土状況(西より)	
図版4	・・・・・・・・・・・・・・・・	170
	B地点 S D 1(西より)	
	B地点S C 28(南より)	
	C地点調査区	
	C地点 S P 27・28(北東より)	
	C地点S P 38(西より)	
	C地点S P 43～50(西より)	
	C地点S C 27遺物出土状況(南より)	
	C地点S C 27完掘状況(南より)	
図版5	・・・・・・・・・・・・・・・・	171
	A地点 旧石器第Ⅱ期出土石器1、2	
図版6	・・・・・・・・・・・・・・・・	172
	A地点 旧石器第Ⅱ期出土石器3～5	
図版7	・・・・・・・・・・・・・・・・	173
	A地点 旧石器第Ⅱ期出土石器6～11	
図版8	・・・・・・・・・・・・・・・・	174
	A地点 旧石器第Ⅱ期出土石器12～17	

図版9	・・・・・・・・・・・・・・・・	175
	A地点 旧石器第Ⅱ期出土石器18～23	
図版10	・・・・・・・・・・・・・・・・	176
	A地点 旧石器第Ⅱ期出土石器24～28	
	A地点 旧石器第Ⅲ期出土石器	
図版11	・・・・・・・・・・・・・・・・	177
	A地点 縄文時代早期遺構内出土遺物	
	A地点 縄文時代早期石器1～3	
図版12	・・・・・・・・・・・・・・・・	178
	A地点 縄文時代早期石器4～6	
	A地点 縄文時代早期石器1	
図版13	・・・・・・・・・・・・・・・・	179
	A地点 縄文時代早期石器2～5	
図版14	・・・・・・・・・・・・・・・・	180
	A地点 縄文時代早期石器6・7	
	A地点 縄文時代晩期土器	
図版15	・・・・・・・・・・・・・・・・	181
	A地点 縄文時代後晩期土器	
	A地点 S A 1出土遺物	
図版16	・・・・・・・・・・・・・・・・	182
	A地点 S A 2出土遺物1・2	
図版17	・・・・・・・・・・・・・・・・	183
	A地点 S A 2出土遺物3・S A 3出土遺物1	
図版18	・・・・・・・・・・・・・・・・	184
	A地点 S A 2出土遺物4・S A 3出土遺物2	
図版19	・・・・・・・・・・・・・・・・	185
	A地点 中近世の遺物	
	A地点 中世の遺物2	
	B・C地点 旧石器第Ⅰ・Ⅱ期出土石器	
	B・C地点 方穴出土遺物	
	B・C地点 縄文時代早期遺物	
	B・C地点 S C 27出土土器	
図版20	・・・・・・・・・・・・・・・・	186
	B・C地点 縄文時代石器	
	B・C地点 中世遺物	
	B・C地点 近世遺物	
	A～C地点 金属製品	

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

宮崎県は、高速道路等のインフラ整備が遅れている地域で、とりわけ延岡市は「高速道路のインターチェンジから最も遠い 10 万都市」である。高速道路整備にける地域住民の期待が年々高まりをみせていた平成 7 年度末、建設省九州地方建設局延岡工事事務所（現国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所、以下同じ）が平成 8 年度から着手する新規事業として、延岡道路及び北方延岡道路の建設計画が明らかとなった。延岡道路は、東臼杵郡北川町大字長井を起点に、既に自動車専用道路として供用されている延岡南道路に接続する、延長 20.6km の高規格自動車専用道路、北方延岡道路は、延岡市北方町蔵田を起点に同市天下町の延岡ジャンクションで延岡道路に接続する、延長 23.5km の高規格自動車専用道路である。

宮崎県教育庁文化課（現文化財課）は、この事業計画を受けて、計画路線内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、平成 7 年度末より延岡工事事務所と協議を開始した。平成 11 年度の協議において、延岡道路の平成 12 年度以降の事業箇所として、延岡道路Ⅱ工区の最北端に位置する吉野遺跡を含む部分に着手する方針が示された。しかし、この段階で、対象地すべての用地買収が終了していなかったため、平成 11 年度から平成 14 年度に渡り、都合 4 回の確認調査を実施した。確認調査の結果、対象地の大部分で遺跡の存在が確認されたため、計画変更を含めた埋蔵文化財保護の方策について延岡工事事務所と協議を行ったが、工事計画の変更等による現状保存は困難であるとの結論に至り、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、延岡工事事務所の委託を受け、平成 12・13・15 年度に都合 3 度に及び、宮崎県教育委員会が主体となって実施した。各調査期間は、以下のとおりである。

1 次調査：平成 12 年 10 月 10 日～平成 13 年 3 月 27 日

2 次調査：平成 13 年 4 月 26 日～平成 13 年 8 月 24 日

3 次調査：平成 15 年 11 月 17 日～平成 16 年 3 月 5 日

なお、遺跡名を「吉野遺跡」として発掘調査及び整理作業を行ってきたが、付近を延岡市教育委員会がこれまでに 1 次から 7 次にわたり調査を行っており、今後名称等で混乱も予想されることから、同市教育委員会と協議し、「吉野第 2 遺跡」に変更した。

第 2 節 調査の組織

吉野第 2 遺跡の調査組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

平成 12 年度 発掘調査

所 長	矢野 剛
副所長兼総務課長	菊池 茂仁
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課総務係長	亀井 維子
調査第二課調査第四係長	永友 良典
同 主任主事	日高 広人
同 調査員	松永 幸寿

平成 13 年度 発掘調査・遺物整理

所 長	矢野 剛
副所長兼総務課長	菊池 茂仁
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課総務係長	亀井 維子
調査第二課調査第四係長	永友 良典
同 主任主事	田中 光
同 主任主事	日高 広人
同 調査員	丹 俊詞

平成15年度 発掘調査		平成17年度 遺物整理・報告書作成	
所 長	米良 弘康	所 長	宮園 淳一
副所長兼総務課長	大藪 和博	副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫	総務課長	宮越 尊
総務課主幹兼総務係長	石川 恵史	総務課主幹兼総務係長	石川 恵史
調査第二課調査第四係長	近藤 協	調査第二課調査第四係主幹兼係長	近藤 協
同 主 査	久保 春夫	同 主 査	久保 春夫
同 主 査	玉利 勇二	同 主 査	日高 広人
平成16年度 遺物整理		平成18年度 報告書作成	
所 長	宮園 淳一	所 長	清野 勉
副所長兼総務課長	大藪 和博	副所長	加藤 悟郎
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫	副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課主幹兼総務係長	石川 恵史	総務課長	宮越 尊
調査第二課調査第四係主幹兼係長	近藤 協	総務課主幹兼総務担当リーダー	高山 正信
同 主 査	久保 春夫	調査第二課主幹兼第四担当リーダー	近藤 協
同 主任主事	日高 広人	同 主 査	日高 広人

調査指導・協力（敬称略）

松下 孝幸（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）、小野 信彦、山田 聡、尾方 農一、高浦 哲（延岡市教育委員会）、金丸 武司（宮崎市教育委員会）、高橋 益雄

第3節 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

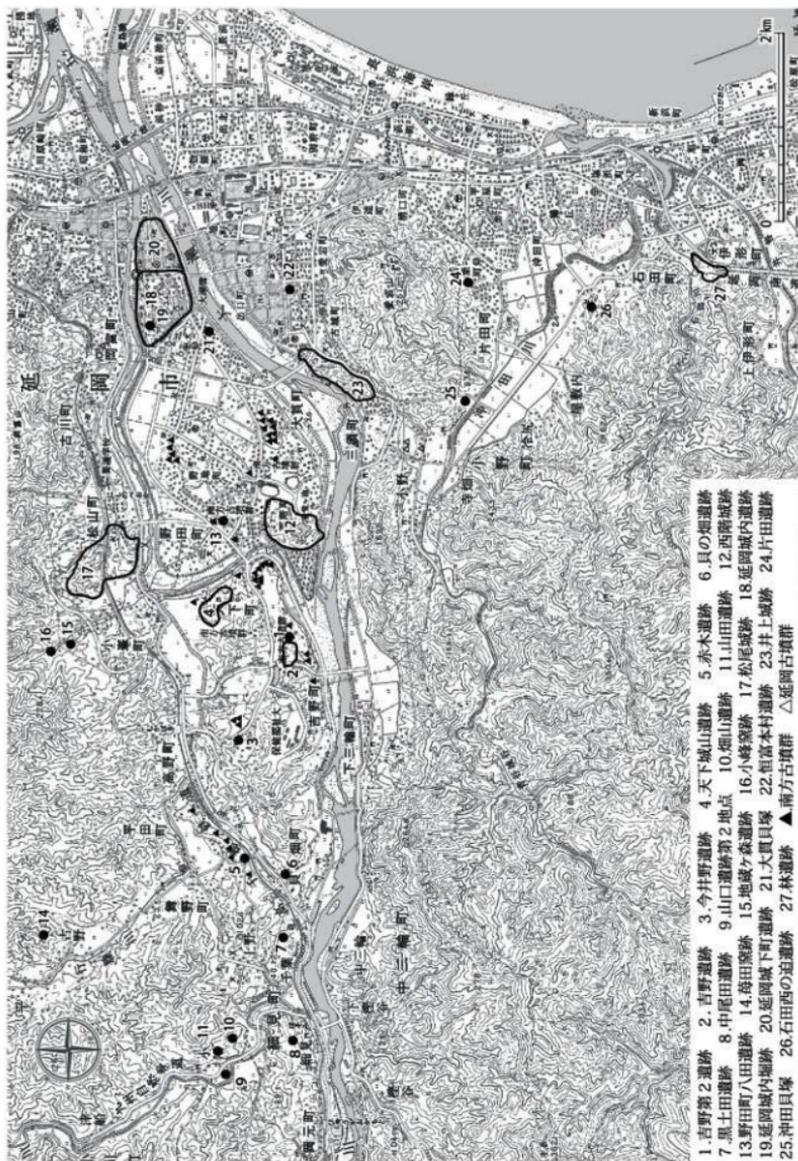
吉野第2遺跡は宮崎県の北東部に位置する延岡市吉野町に所在する。「土地分類基本調査 延岡・島浦」（1988 宮崎県）によれば、延岡市¹⁾は東側を日向灘に接し、北側には榎木峠（1,245 m）を有する日豊山地をはじめ、行藤山（822.9 m）、可愛岳（727.7 m）等から成る環状岩脈や霧子山（461 m）、鏡山（645 m）、岳山（614 m）を有する霧子山山地が続き、霧子山山地の南側から西側にかけて形成されている北郷山地、南側には烏帽子岳（362.1 m）より派生する烏帽子岳山地、日向～門川山地といった四万十累層群からなる山地に三方を囲まれている。

市内南西部から北東部にかけて、北郷山地を横断するように九州山地の向坂山を水源とする五ヶ瀬川が蛇行しながら貫流しており、市内で細見川と合流後、市内中央付近で大瀬川と分岐し、行藤川や祝子川、北川等の支流と合流しながら、日向灘へと注いでいる。それぞれの流域には沖積低地が広がり、特に市中央部から東側にかけて沖積地や三角州が発達し、平野を形成している。また五ヶ瀬川左岸には、起伏の比較的緩やかな山麓地（丘陵地）が広がり、狭小な阿蘇溶結凝灰岩台地や河岸段丘が点在する。

これらに対し、市内南東部では、日向～門川山地が海岸近くまで張り出し、同山地を水源とする沖田川や支流の石田川、井替川といった小規模な河川が河口付近で合流する。また流域周辺に認められる沖積低地は、発達が乏しく、幅狭小な平野を形成している。

本遺跡が立地する吉野町は、延岡市の中央部にあたり、市役所から南西約4 kmの所にある。五ヶ瀬川と大瀬川の分岐点北側に位置する町で、東は天下町、西は貝の畑町、北は平田町・高野町に接し、南は五ヶ瀬川に面している。北郷山地から派生した丘陵は細見川と行藤川に挟まれながら南東に延び、五ヶ瀬川に面したあたりで北東に向きを変え、最終的に五ヶ瀬川と大瀬川との分岐点、行藤川と大瀬川との合流点付近まで張り出している。

町域北西側は比較的起伏に富む丘陵が続くのに対し、遺跡が立地する東側丘陵では比較的緩やかな



第1図 遺跡位置図 (S=1/50,000)

り、畑地が一面に広がる。丘陵の北から東、南の三方を五ヶ瀬川の氾濫起源による幅狭な沖積地に接し、各所に開析谷が発達、裾部には湧水点が認められる。なお、調査地の標高は約 37 m、南に接する五ヶ瀬川とは比高差約 30 m を測る。

2. 歴史的環境

延岡市で確認されている遺跡の大半は地理的な要因もあり、五ヶ瀬川流域やその支流を中心に確認されている。以下、時代別に概観していきたい(第1図)。

旧石器時代では、近年の調査例が増加し、畑山遺跡や赤木遺跡(第7次調査)、吉野遺跡(第7次調査)、今井野遺跡第9次調査等、始良 Tn 火山灰層(以下、A T)下位で石器群の確認例がある。

また A T 上位の石器群としては切出形のナイフ形石器や剥片尖頭器を中心とする一群と細石器を中心とする一群の2つの文化層が確認されている赤木遺跡(第1次調査)や A T 降灰後の中でも比較的古い様相をもつ石器群が確認されている片田遺跡をはじめ、林遺跡や黒土田遺跡、地蔵ヶ森遺跡、吉野遺跡等が挙げられる。

縄文時代では早期の遺跡が数多く確認されており、そのうち今井野遺跡(第1次調査)では押型土器に伴って集石遺構1基が確認されている。また地蔵ヶ森遺跡では押型土器と壺ノ神式土器の時期の集石遺構8基が確認されている。近年、調査された山田遺跡では、集石遺構や炬穴群、陥し穴状遺構、円形配石遺構などが確認され、集落構成が理解できる事例のひとつである。また県内の縄文時代の貝塚確認例は8例と僅少であるが、延岡市では早期の大貫貝塚や後晩期の沖田貝塚など4例が確認されている。

弥生時代～古墳時代のうち、弥生時代前期から中期の様相については不明瞭だが、後期になると遺跡数が増加する。貝の畑遺跡や野田町八田遺跡で後期の竪穴住居跡が確認されている。延岡城内堀跡や差木野遺跡²⁾で後期の水田跡が確認されている。そのうち延岡城内堀跡では水田の一部やそれに伴う土留め用の矢板、県北初の出土となる木製農具が出土している。

また瀬戸内地方の交流を示す資料として、三須町出土の二段羽透かしを有する高坏が有名であり、恒富本村遺跡や差木野遺跡等でも瀬戸内系土器が出土している。

弥生後期後半から古墳時代後期になると中尾原遺跡をはじめ、畑山遺跡、地蔵ヶ森遺跡、山口遺跡第2地点、林遺跡等、集落の確認例が増加する。そのうち山口遺跡第2地点は細見川左岸の微高地上に古墳時代中期～後期の住居が約30軒確認されており、同流域の丘陵上に展開する64軒の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑等、大規模集落が確認されている中尾原遺跡や竪穴住居跡6軒のうち1軒から小銀治跡と考えられる遺構が確認されている畑山遺跡との関連性が注目される。

また市では南方古墳群をはじめ延岡古墳群、檜山古墳群、石田西の追古墳群等など数多くの古墳が確認され、国指定もしくは県指定史跡になっている。当遺跡周辺には南方古墳群吉野支群7基(11号～17号)があり、5世紀中頃から6世紀代にかけて造営されたものとみられている。なかでも市内唯一の舟形石棺が確認された14号墳では、人骨とともに直刀2、鉄剣1、鉄鎌30が副葬されており、同支群内でも突出している。

古代平安期になると、「宮崎県の地名」(平凡社1997)によれば、市域の大部分は白杵郡英多郷(和名抄)に属し、現在の天下町・吉野町・大貫町などの地域が中心であった可能性が高いとされ、郡衙は当郷に所在したとされている。後半になると律令制の崩壊、荘園が発達する時期で、宇佐宮領の荘園が多く認められるようになる。この頃、当地域には白杵庄が成立し(後の縣庄)、同庄内から岡富別符(延岡市岡富町・高千穂通・山下町などを含む一帯といわれている)が立券されている。この時期の遺跡として母田窯跡があり、9世紀から10世紀前半にかけて須恵器が生産されている。

やがて中世に入ると、縣荘を伊東氏、岡富荘を土持氏、大貫・伊富形荘が島津氏のそれぞれが治める

ようになり、やがて三氏による対立・勢力抗争へと発展していく。こうした流れのなかで井上城や西階城、松尾城、天下城（天下城山）等といった山城が次々と築城されることになる。

当該期の他の遺跡としては、十数軒の掘立柱建物跡や土坑が確認されている畑山遺跡や大型掘立柱建物跡群や土城墓、五輪塔等を有する林遺跡等が挙げられる。なお本遺跡に隣接して光福寺跡の推定地があり、土持卒塔婆（凝灰岩製）が確認されている。その正面には土持宣綱、子の全繁、宣綱の妻、全繁の妻の戒名、没年がそれぞれ刻まれており、当地方を治めていた土持氏の数少ない資料のひとつである。

近世に入ると当該期の遺跡は数多く残されており、延岡城（延岡城内遺跡）や城下町（延岡城下町遺跡）、小峰窯跡や上平原窯跡の窯跡等が確認されている。延岡城については、高橋元種が松尾城から中洲内の丘陵地に築城したもので、この時に城下町の整備も着手されている。やがて高橋氏から有馬氏、三浦氏、牧野氏を経て、内藤氏の藩政に至り、安定期を迎えることになる。

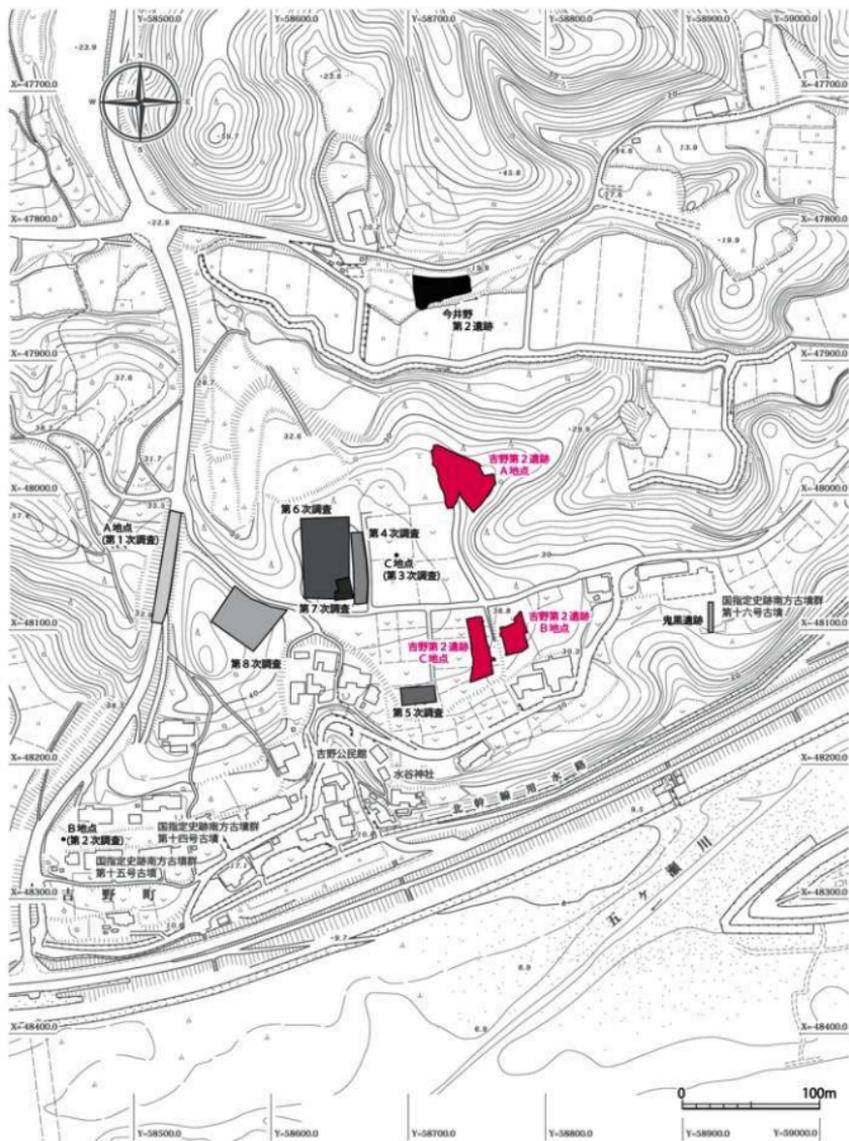
この時代、同町は南方村に属し、「本新田畑高反別盛伐野帳」や「城付村々春免写帳」（ともに明治大学蔵内藤文書）等で「吉野門」という地名がたびたび登場するようになる。

註

- 1) 平成 18 年 2 月 20 日に延岡市、北方町、北浦町が合併し、人口約 13 万 1 千人、面積約 588 km²の新生「延岡市」が誕生している。
- 2) プラントオーバー分析結果より、後期の水田跡の存在が確認されている。

参考文献

- 兵藤健次・日高輝文 1988『東臼杵・延岡地域 土地分類基本調査 延岡・島浦』宮崎県
延岡市教育委員会 1978『野田町八田遺跡』
延岡市教育委員会 1981『南方古墳群第 19 号・石田組合せ石棺』延岡市文化財調査報告書第 1 集
延岡市教育委員会 1987『赤木遺跡・多々羅遺跡』延岡市文化財調査報告書 III
延岡市教育委員会 1990『今井野遺跡』延岡市文化財調査報告書第 4 集
延岡市教育委員会 1990『片田遺跡（概観）』延岡市文化財調査報告書第 5 集
延岡市教育委員会 1991『上南方地区遺跡 中尾原遺跡 山口遺跡』延岡市文化財調査報告書第 6 集
延岡市教育委員会 1992『上南方地区遺跡 中尾原遺跡 畑山遺跡』延岡市文化財調査報告書第 8 集
延岡市教育委員会 1992『差木野遺跡』延岡市文化財調査報告書第 9 集
延岡市教育委員会 1995『黒土田遺跡・赤木第 2 地点・上無田遺跡・平野遺跡・上麦野遺跡・浄土寺山古墳』平成 6 年市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 延岡市文化財調査報告書第 24 集
延岡市教育委員会 2001『吉野遺跡（第 4 次）・吉野遺跡（第 6 次）・延岡古墳群第 16 号墳、多々羅第 1 遺跡・新宮遺跡・吉野遺跡（第 7 次）』平成 12 年市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財調査報告書 延岡市文化財調査報告書第 24 集
延岡市教育委員会 2001『延岡市の文化財』
延岡市教育委員会 2002『上無田遺跡（第 3 次）・赤木遺跡（第 7 次）』平成 13 年市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財調査報告書 延岡市文化財調査報告書第 25 集
延岡市教育委員会 2002『延岡城内遺跡 1』延岡市文化財調査報告書第 26 集
延岡市 2003『延岡市史』市制 70 周年記念 10 年史
宮崎県 1989『宮崎県史』資料編 考古 1
宮崎県 1993『宮崎県史』資料編 考古 2
宮崎県 1997『宮崎県史』通史編 原始・古代 1
宮崎県 1998『宮崎県史』通史編 古代 2
宮崎県 1998『宮崎県史』通史編 中世
宮崎県教育委員会 1987『林遺跡』『宮崎県文化財調査報告書第 30 集』
宮崎県教育委員会 1988『地蔵ヶ森遺跡』『宮崎県文化財調査報告書第 31 集』
宮崎県教育委員会 1990『林遺跡』一般国道 10 号土々呂バイパス建設関係発掘調査報告書
日高広人 2003『吉野遺跡』『遺跡をたずねて～最近の発掘調査の成果から』第 12 回埋蔵文化財講座資料 宮崎県埋蔵文化財センター
赤崎広志 2004『山田遺跡』『遺跡をたずねて～最近の発掘調査の成果から '03』第 12 回埋蔵文化財講座資料 宮崎県埋蔵文化財センター



第2図 周辺地形図 (S = 1/3,500)

第Ⅱ章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

遺跡周辺(第2図、第1表)ではこれまでに、大正年間に調査された南方古墳群14・15号墳をはじめ、延岡市教育委員会が行った吉野遺跡(1次から8次)等があり、主に旧石器時代から古代にかけて遺構や遺物が確認されている。また、遺跡に隣接して土持卒塔婆があり、この一帯が光福寺跡の推定地とされている。これらのことから旧石器時代から中世にかけての時期のものが確認される可能性が想定された。

平成11年度に実施された文化課(現文化財課)の確認調査では、北側(A地点)と中央部(C地点)で遺物の出土が認められたが、調査対象範囲が南北に約250mにもおよぶことや確認範囲が狭いこと、未買収地も数多く残されていたこと等から、遺跡範囲の絞り込みとその内容をおさえる必要があり、本調査に先行して、再度、確認調査(一部、本調査と並行)を行う必要が生じた。(第3図)。

調査に入るにあたり、遺跡範囲が不確定ながら、農道や畑地境界等の関係で分割して調査を行うことが想定できたことから、あらかじめ、旧日本測地系による国土座標(X=47,860、Y=58,710)を起点に、10m×10mグリッドを1単位として調査対象全体を覆うように設定し、南北方向に整数(北より1, 2, 3…)、東西方向にアルファベット(西よりA, B, C…)を付したものを組み合わせて、グリッド番号(例:A1グリッド等)とした。これらは調査区設定後、グリッドに合わせて杭を設置し、包含層の掘り下げや遺物の取り上げ、図面作成等に使用した。さらに地区割については、東西に並行して走る農道のうち、北側農道より北部分をA地点、農道に挟まれた範囲のうち、南北に入る私道より一段低い東側をB地点、その西側をC地点、南側農道よりさらに南側に関してはD地点とした。

確認調査の結果により調査区を設定、表土およびⅡ層まで重機による掘削を行い、その面での遺構検出を行った。またそれより下層の調査については、トレンチによる包含層の有無と広がりを確認しながら、その結果に基づき、土層観察用のベルトを残した状態で、グリッドごとに掘り下げ、もしくはグリッドをさらに4分割して、千鳥掘りを行うことを基本にし、遺構・遺物が確認された時点で周辺に拡張する方法をとった。

検出された遺構については、半裁・埋土状況を确认后、必要に応じて土層図の作成・写真撮影を行いながら掘り下げを行った。遺構実測は基本的には、礫群・集石遺構は縮尺10分の1、土坑・竪穴住居跡等は縮尺20分の1、柱穴・道路状遺構・溝状遺構等は縮尺20分の1、もしくは50分の1での図化を行った。

また包含層出土遺物については、基本的に個々に番号を付け、平成12年度は平板測量(縮尺50分の1)、平成13年度からはトータルステーションによる3次元な測量による遺物分布図の作成・取り上げ及び写真撮影を行った。

第2節 調査の経過

調査は平成12年度から平成15年度の約4カ年(確認調査を含む)にわたり実施した。以下年度ごとに経過を記していきたい。

平成12年度

当初、文化財課の試掘調査で遺物の出土が確認されているA地点とC地点のうち、C地点については中央部に未買収地が残ることから、遺物密度が高いA地点を先に調査する予定で準備を進めていた。しかし北側と南西側が未買収地のために排土置場が確保できないことから、残りの地点で確認調査を実施し、その結果次第で、その部分を排土置き場にすることにした。また合わせてA地点・C地点の包含層

の確認や遺構・遺物の広がりの確認を行った。

平成12年10月11日からA地点で4箇所(T21～T24)、B地点で6箇所(T6～T11)、C地点で4箇所(T4・T5・T14・T15)からD地点で1箇所(T3)、の計15箇所にトレンチ設定して、掘り下げを行い、T3・T8～T11・T14・T15・T21～24で遺構や遺物が確認された。

そのうちT3では、北側でⅡ層やⅢ層(アカホヤ火山灰層)が残り、Ⅶ層まで掘り下げを行ったが、V層で打製石斧1点や礫が数点程度出土したのみであった。

またT8～T11では、T9で一部V層が残るものの、大半はⅥ層～Ⅶ層付近まで削平を受けていたものの、縄文時代早期の炉穴や時期不明の柱穴、またⅨ層やⅩ層で剥片や石核が確認された。

T14・T15では、V層で時期不明の柱穴や焼土(後に炉穴と判明。)を確認し、縄文時代早期の土器片等が出土した。

T21の北側及びT22～T24は、V層で縄文早期の土器や石鏃とともに多量の焼礫が出土し、その下層の確認が困難なため、T21の南側の掘り下げを行ったが遺物等の出土は認められなかった。

これらのことから新たにB地点の北半分に関しては、本調査の必要ありと判断したが、D地点について遺物の密度がかなり薄いため、他の未買収地の結果次第で本調査を行うことにした。

本調査は、A地点より先にB地点の調査を行い、終了後、同地点を排土置き場にして、A地点の調査を行うこととした。

10月26日よりB地点の表土剥ぎを行い、V層～Ⅸ層に於いて、縄文時代早期炉穴や近世墓、近代の土坑、時期不明の掘立柱建物跡、柱穴等を検出した。そのうち炉穴については、当初焼土のみ確認されていたために焼土として取り扱っていたが、次第に足場をもつものが確認されはじめ、それらが底面近くまで削平を受けていたことや分布にある程度のみをもちことから、最終的にこれらを炉穴と認定した。また掘立柱建物跡については、南西部に1軒確認されたほか、北東部端に南北に並ぶ柱痕跡を有する柱穴を4基確認し、北及び東に延びる可能性があることから、11月7日に重機で調査区を拡張した。その結果、北側で新たに1基、中央で東西に並ぶ柱穴1基を確認した。このことから4間×1+α間の掘立柱建物跡(2号)と認定したが、両端に並ぶ柱穴が確認されなかった。また2号掘立柱建物跡に並行して南北に並ぶ柱穴が4基あり、これらは東側に延びる可能性があり、建物跡と想定される。また本調査と並行して、11月7日には買収が完了したA地点中央(T18～T19)の確認調査を行ったが2.5m以上上げて、やっとⅢ層が確認される状況であり、以前には谷がさらに西側に入り込んでいたことが確認され、調査から除外した。

11月後半からは、遺構検出作業と並行して、旧石器包含層の掘り下げを行い、Ⅸ層及び部分的にⅩ層まで掘り下げを行ったが、散発的に石器が確認されるのみであった。

12月21日には空中写真撮影し、残りの掘り下げ作業や図化作業を行い、1月12日に同地点の調査を終了した。

1月16日よりA地点の表土剥ぎを行ったが、以前は杉が植林されていた関係で樹木痕が大量に存在し、掘削にはかなりの時間を要した。残った樹木痕については、チェーンソー等で除去を行った。V層(一部Ⅵ層)上で古墳時代の竪穴住居跡2軒と中世の道路状遺構1条、時期不明の土坑や溝状遺構、柱穴群を検出した。柱穴群については埋土の種類や配置等を検討しながら、掘り下げを行ったが、建物跡と認定できるまでには至らなかった。また古墳時代の竪穴住居跡は2軒とも4m規模の長方形プランを呈し、そのうち2号住居跡からは多量の土師器片が出土し、なかには完形もしくは完形に復元できるものも多数確認されている。これらの遺構の掘り下げ及び図化作業が終了した後、3月5日には空中写真撮影を行い、終了後、縄文時代早期の包含層(V層)掘り下げを開始した。

縄文時代早期の調査では、集石遺構9基に伴って散礫が確認された。散礫は調査区中央から東側にかけて約20mの範囲で展開し、掘り下げにかなりの時間を要した。また一部礫群を除去した面から炉穴



第3図 確認トレンチ及び調査区配置図 (S = 1/1,000)

や土坑も確認された。遺物は政所式土器をはじめ、コブ文土器や無文土器、スクレイパー、石核等が出土した。

3月中旬には、縄文時代早期の調査を終了した調査区北端（A1～B2グリッド西半分）について、その下層の調査を実施し、ナイフ形石器や角錐状石器や石核などとともに礫群2基を確認したが、3月27日に一旦調査を終了した。

平成13年度

4月26日から調査を再開し、引き続き縄文時代早期面の調査を行った。散礫は予想以上に厚みがあり、掘り下げには、かなりの時間を要することになった。さらに調査区の周辺が杉林に囲まれているために、風通しが悪く、特に梅雨時期から夏場にかけて、かなり蒸し暑さと蚊の大発生などの悪条件の中での作業が続いた。

散礫下では新たに集石遺構が14基確認されたほか、平地住居跡1軒、炉穴9基、土坑19基、柱穴群等が検出されている。特に平地住居周辺では、チャート製の石鎌をはじめ、剥片、碎片が約700点出土したほか、無文土器や石斧、磨石等も確認された。また縄文時代早期の調査と並行して、旧石器時代の調査（V層下部からⅧA層）を行い、新たに礫群3基やナイフ形石器や角錐状石器、二次加工剥片、剥片、石核、敲石等が出土した。

Ⅷb層（始良Tn火山灰層：AT）以下の調査については、トレンチを設定し、掘り下げを行った。そのうち調査区北西部のトレンチに於いて、Ⅸ層で剥片等の出土が認められたことからその周辺の掘り下げを行い、ナイフ形石器や二次加工剥片や剥片が確認されたが、AT一次堆積層自体が無く、遺物分布がⅥ層からⅧ層の石器群と重なることや、ナイフ形石器がAT上位の特徴を持つこと。その後の整理において異層間での接合が認められることから、AT上位のものが何らかの理由で落ち込んだものと考えられる。他のトレンチについては遺物の出土が認められないことから8月24日に調査を終了した。

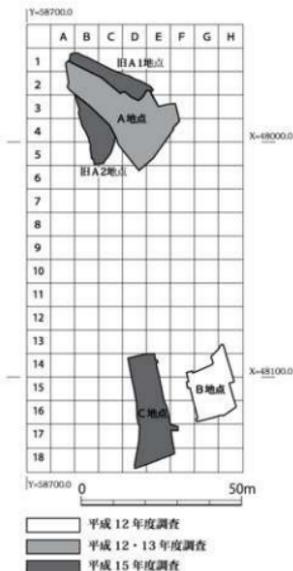
平成14年度

残されていた未買収地のうち、A地点のものを除き、その他の箇所の用地買収が完了したことを受け、8月6日から8日かけて、T1・T2（D地点）および、T12・T13（C地点）、T16・T17（A地点）の確認調査を実施し、T12・T13で縄文時代早期の炉穴や縄文土器片、時期不明の柱穴等が確認された。T1についてはⅧ層まで削平を受け、Ⅸ層で近現代の溝状遺構が確認した。T2についてはⅨ層まで削平を受けおり、Ⅸ層まで掘り下げを行ったが遺物等の出土が認められないことからD地点については本調査から除外し、同じくA地点南側（T16・T17）についてもⅨ層まで削平を受け、遺物等の出土は認められなかったことにより調査から除外した。

なお、本調査については、国土交通省との協議で、残り部分の買収が完了した時点で、A・C地点の調査をまとめて行うことになった。

平成15年度

用地買収がすべて完了したことを受け、発掘調査を平成15年11月17日から開始した。調査は工事の兼ね合いからC地点から調査に入ることにした。調査では、重機による表土掘削を行った後、人力で掘り下げ・精査を行いながらV層上面で揃えた後、遺構検出を行った。検出遺構は縄文時代早期の炉穴群や縄文時代晩期の土坑1基、その他時期不明の柱穴群を確認した。



第4図 年度別調査範囲 (5=1/2,000)

遺構の掘り下げ作業終了後、12月15日に空中写真撮影を実施し、検出された遺構の実測及び写真撮影などを行った。その後、Ⅵ層からⅧA層かけて人力による掘り下げを行ったが、遺物・遺構の確認されないことから、平成16年1月13日にC地点の調査を終了した。

A地点の調査は、全調査区の北側と南西側の2箇所に分断されることから、便宜上A1地点、A2地点(整理段階でA地点に統一)と呼称し、平成16年1月7日から重機による表土掘削を行った。一部でⅢ層が残存するもの、北側でⅦ層近くまで削平を受けていた。このことから北側以外をⅣ層で揃えて、遺構検出を行った。

遺構は縄文時代晩期の焼土や古墳時代の竪穴住居跡、古代の掘立柱建物跡、時期不明の溝状遺構、柱穴群等が確認された。そのうち古墳時代の竪穴住居跡は北側が削平を受け、溝状遺構と切り合っているものの、4m規模の長方形プランを呈すると考えられる。

またB4グリッドからは焼礫がかなりの数が見受けられたことから、縄文時代早期の集石遺構等の存在が想定され、1月21日から、遺構検出と並行して、掘り下げ作業を行った。散礫は10m×7mの範囲で広がり、集石遺構5基、礫群からやや離れた南西部で1基確認されている。同時代の遺物は礫群中より、押型文土器や石鏝、礫器等が出土したが、一部で旧石器時代の遺物も含まれていた。

2月3日からはA1地点の調査を開始したが、変化が著しく、Ⅹ層近くまで深く削平を受けており、特に南側はⅩ層が露出する部分も認められた。調査区の北側および中央、南側の3箇所でトレンチを設定し、掘り下げを行ったが遺構・遺物は確認されなかった。

遺構は調査区南側では、A地点で検出していた中世の道路状遺構の続きを確認した他、縄文時代早期の竪穴を9基が検出された。

2月中旬には、遺構調査の大半を終了したのに伴い、2月18日には、空中写真撮影を実施した。その後は、Ⅵ層以下の掘り下げを行い、Ⅹ層まで調査を行ったが、遺構・遺物は確認されず、3月5日に調査のすべてを終了した。

遺跡名	調査原因	調査期間	調査主体	所在地	時代	主な遺構	主な遺物
南方古墳群14号墳	学術調査	大正14年10月	鳥居龍藏	延岡市吉野町 864-1, 8653外	古墳時代	円墳	舟形石函、人形、灰刀2、鉄剣1、 鉄鏝30
南方古墳群15号墳	学術調査	大正14年10月	鳥居龍藏	延岡市吉野町 1651-2外	古墳時代	円墳	鉄剣1、ガラス製小玉30、鉄鏝22
吉野遺跡A地点 (第1次調査)	市道天下吉野2号 線道路改良	平成3年10月1日 ～12月5日	延岡市 教育委員会	延岡市吉野町 1584	旧石器時代 縄文時代早期 弥生時代 奈良～平安時代	竪穴 集石遺構 石鏝 石器 土塊、溝状遺構 土器類、土鏝	
吉野遺跡B地点 (第2次調査)	倉庫改築	平成4年6月9日 ～6月11日	延岡市 教育委員会	延岡市吉野町 1653	古墳時代	組合せ式石棺墓	なし
吉野遺跡C地点 (第3次調査)	畑地復旧	平成4年10月15日 ～10月16日	延岡市 教育委員会	延岡市吉野町 1532外	なし	なし	なし
吉野遺跡 (第4次調査)	宅地造成	平成12年1月13日	延岡市 教育委員会	延岡市吉野町 1527-1, 1527-2	旧石器時代 縄文時代早期 弥生時代 古墳時代	集石遺構4基	スクレイパー、礫石刃等 押型文土器、石鏝、礫石 貝殻類
		平成12年2月25日 ～4月28日					
吉野遺跡 (第5次調査)	宅地造成	平成12年1月26日 ～2月4日	延岡市 教育委員会	延岡市吉野町 1506	なし	なし	なし
		平成12年2月4日 ～2月4日					
吉野遺跡 (第6次調査)	宅地造成	平成12年2月8日 ～3月7日	延岡市 教育委員会	延岡市吉野町 1526	縄文時代晩期 弥生時代	土坑1基 竪穴住居2軒	安土文土器、紫色磨研土器、石鏝 弥生土器、土鏝器
		平成12年2月8日 ～3月7日					
吉野遺跡 (第7次調査)	家畜診療所兼事務 所建設	平成12年4月25日 ～5月18日	延岡市 教育委員会	延岡市吉野町 1526	旧石器時代(A1下) 旧石器時代(A1上) 縄文時代早期	竪穴1基	ナイフ形石鏝、二次加工銅片、石鏝 ナイフ形石鏝、銅片尖頭鏝、礫石刃等 無文土器、石鏝、スクレイパー、礫器
		平成12年4月25日 ～5月18日					
吉野遺跡 (第8次調査)	延岡市土地改良 区事務所建設	平成18年5月16日 ～6月19日	延岡市 教育委員会	延岡市吉野町 1586-2外	旧石器時代 縄文時代早期 古墳時代 古代	集石遺構 縄文土器 土鏝類 成層等	ナイフ形石鏝、石鏝 縄文土器 土鏝類 成層等
		平成18年5月16日 ～6月19日					
鬼馬遺跡	増肥舎建設	平成14年8月28日 ～9月5日	延岡市 教育委員会	延岡市天下町 1423, 1425-2外	なし	なし	なし
今井野第2遺跡	一般国道10号 延岡道路建設	平成14年6月11日 ～8月13日	宮崎県環境文 化財センター	延岡市天下町 1716他	縄文時代早期 縄文時代晩期	集石遺構35	コブ文、染織文、押型文、石鏝、礫器 など 黒色磨研、灰目安土文

※吉野遺跡(8次調査)については、高瀬利典(延岡市教育委員会)のご教示による。

第1表 周辺の遺跡一覧

第3節 遺跡の層序

本遺跡は、宅地造成や昭和63年に吉野地区土地改良事業による基盤整備等により、改変が著しく、各地点での残存状況が異なる。現在では部分的に畑地の境界に段差が認められるものの、平坦に近く、東方向に緩やかに傾斜している。そのうちT18～T20では2.5m下からⅢ層（アカホヤ火山灰層）が確認され、この周辺では谷がさらに西に入り込んでいたものと考えられる。

本遺跡の層序は、第5図の示すとおりであるが、前述の通り、各地点での残存状況が異なることからT3とA・B地点の堆積状況を組み合わせて作成した。

そのうちⅡ層については、T3及びA地点北西部の一部で認められる。特徴から同一層と見なしたが、A地点ではⅢ層が認められないことや縄文時代晩期以外にも中世から近世などの遺物等も出土していることからさらに新しい時期の層の可能性も高い。

また鍵層となる火山灰はⅢ層にアカホヤ火山灰（約7,300年前¹⁾）、Ⅷ層に始良Tn火山灰（以下：AT、約2,600年～2,900年前¹⁾）がそれぞれ確認されている。そのうちATについては一次堆積が認められず、風成層で構成されている。

遺物包含層は、V層上部～下部近くが縄文時代早期の包含層で集石遺構をはじめとする遺構や押型文土器や石鏃等の遺物が確認されている。V層下部からX層までが旧石器時代の包含層である。礫群をはじめとする遺構やナイフ形石器、角錐状石器等の石器が認められる。以下、層ごとに説明していきたい。

I層：表土。3層に細部され、Ia層は、現表土もしくは耕作土である。またIb層は昭和63年に吉野地区土地改良事業による基盤整備による造成土、Ic層はそれ以前の表土・耕作土である。なおIb層からIc層についてはT18～T20やB・C地点で確認されている。

Ⅱ層：黒色土層。細粒で粘性がある。部分的にⅢ層のⅢ層をブロックで含む部分が認められる。

Ⅲ層：アカホヤ火山灰層で黄褐色を呈する。T3及びT18～T20で確認されている。

Ⅳ層：黒色土層。やや硬質で締まりがある。径0.5mm～1mm前後の白色粒を含む。A地点の一部及びT3で確認されている。

V層：黒褐色土～暗褐色土層。やや粘性で締まりがある。径0.1～2mm前後の白色粒を若干含む。上部～下部近く縄文時代早期の遺構や遺物を包含する。下部からは旧石器時代の遺物包含層。

Ⅵ層：褐色土層。粘性が強く、締まりがある。旧石器時代の包含層で、遺物以外にも層下部で礫群が確認されている。A地点南西部の一部で層自体が途切れる部分も認められる。

Ⅶ層：暗褐色土。硬質で締まりがあり、クラックが発達している。径0.5～1mm前後の白色粒を多量に含む。旧石器時代の包含層である。

Ⅷ層：始良Tn火山灰風成層。硬質で締まりがある。



第5図 基本層序図 (S=1/40)

粒子が粗く、斑状の模様が入る部分も認められる。基本的に層を成すがA地点の東側の一部やB地点の南側でブロック状に堆積する部分も認められる。色調は、多くが褐色を呈するが、さらに風化が進行し、にぶい黄褐色を呈する部分も認められる。一部で旧石器時代の遺物を包含する。

IX層：極暗褐色土。硬質で締まりが強く、クラックが発達している。VII層と比べ、色調がやや暗い。いわゆるブラック・バンド層で径0.5～1mm前後の白色粒を含み、径1mm前後の赤褐色粒や黄褐色粒を含む。B地点で層中位からXb層にかけて旧石器時代の遺物を包含する。

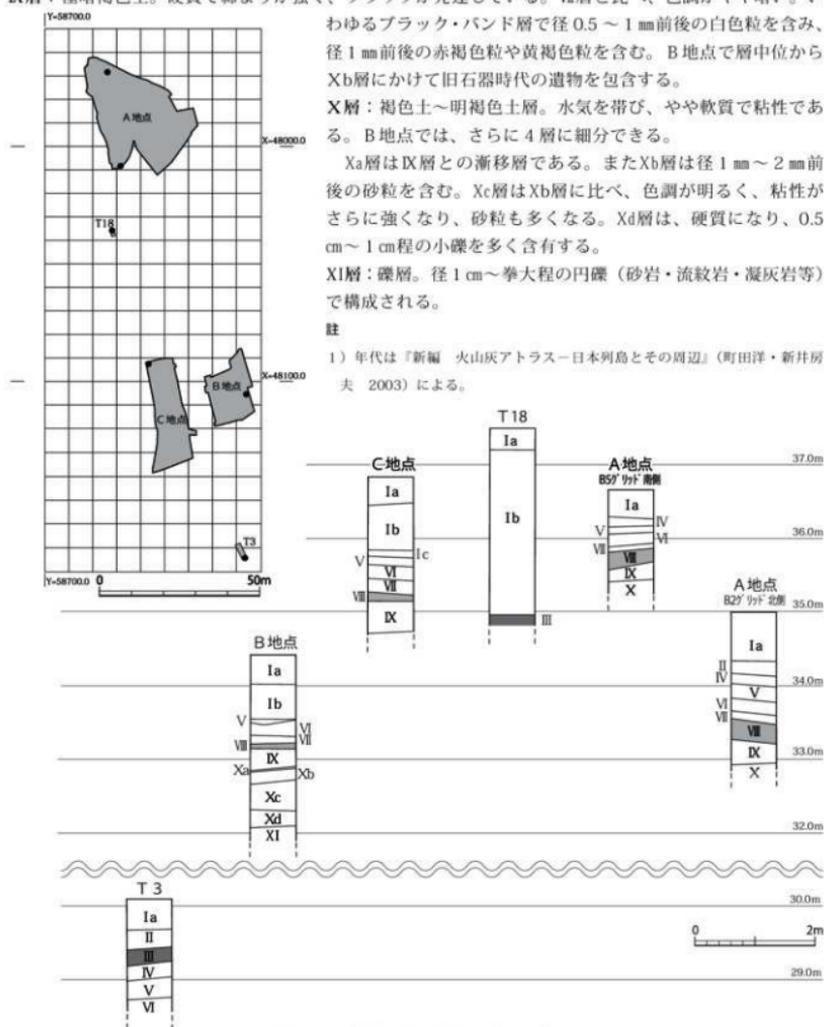
X層：褐色土～明褐色土層。水気を帯び、やや軟質で粘性である。B地点では、さらに4層に細分できる。

Xa層はIX層との漸移層である。またXb層は径1mm～2mm前後の砂粒を含む。Xc層はXb層に比べ、色調が明るく、粘性がさらに強くなり、砂粒も多くなる。Xd層は、硬質になり、0.5cm～1cm程の小礫を多く含有する。

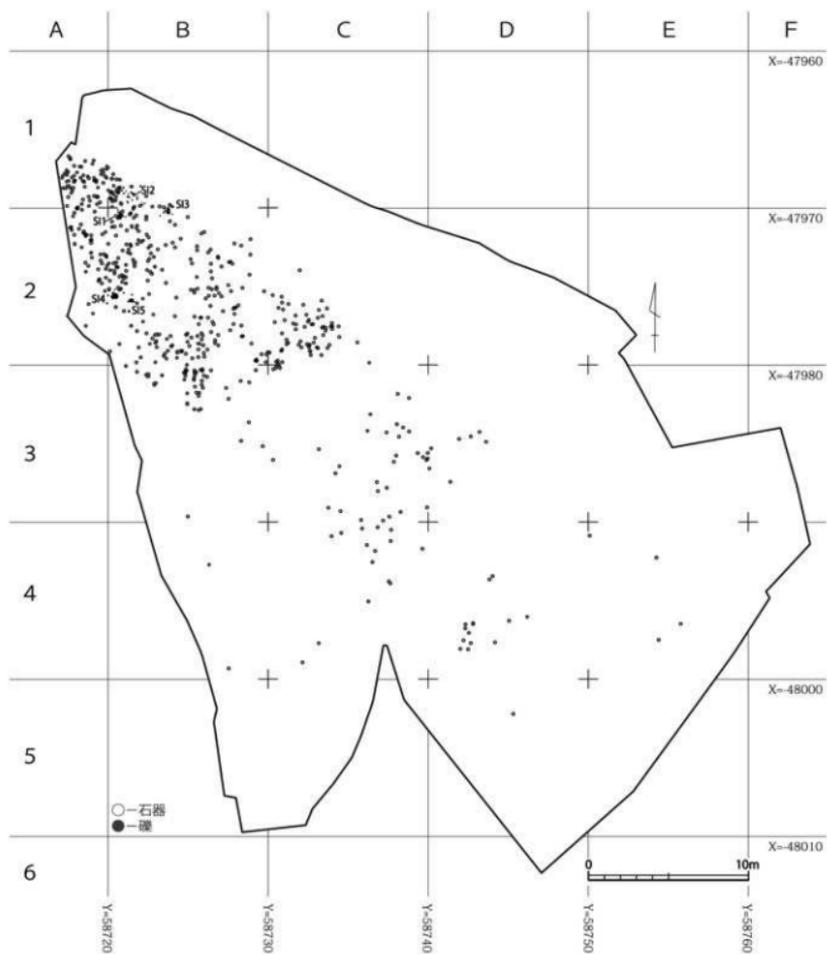
XI層：礫層。径1cm～拳大程の円礫（砂岩・流紋岩・凝灰岩等）で構成される。

註

1) 年代は『新編 火山灰アトラス—日本列島とその周辺』（町田洋・新井房夫 2003）による。



第6図 各地点の土層柱状図 (S=1/80)



第7図 A地点 旧石器時代第II期遺構及び遺物分布図 (S=1/300)

第三章 A地点の調査

第1節 旧石器時代

A地点では、旧石器時代第Ⅱ期の礫群4基、遺物が約500点確認されている。調査はⅧ層まで全面的に掘り下げを行い、調査の都合上、Ⅸ層の一部について調査を行った。石器群は、主にⅤ層下部～Ⅷ層で出土しているが、一部は縄文時代早期の散礫中からも混入している。またⅥ層中からは、縄文時代早期の遺物も僅かながら出土している。

同時代は大きく3期（下位より第Ⅰ期から第Ⅲ期）に分けられ、A地点では第Ⅱ期と第Ⅲ期が、B地点では第Ⅰ期と第Ⅱ期が確認されている。以下、文化層別に説明していきたい。

1. 第Ⅱ期

(1) 遺構（第8図、第2表）

礫群は5基確認し、主に調査区北西側（B1グリッド～B2グリッド）にかけて出土している。礫は12点～34点で構成され、どれも赤化しており、破砕したものが多量。利用石材は砂岩、凝灰岩、泥岩が全てに含まれ、頁岩・チャートがS11・4・5で認められ、溶結凝灰岩がS13・4・5で確認されている。また割合ではS11以外は砂岩の割合が多く、凝灰岩、泥岩等の順で構成されるが、S11では凝灰岩、チャート、砂岩・頁岩の順で構成される。

また北側の礫群（S11～S13）は0.7～1.78mとやや広範囲に及ぶものに対し、南側の2基（S14・S15）では0.5m未満とこぢんまりとしている。遺物はS13で台形石器（24）と剥片が出土している。

(2) 出土石器

ナイフ形石器（第9図、第10図1～15、第11図16～23）

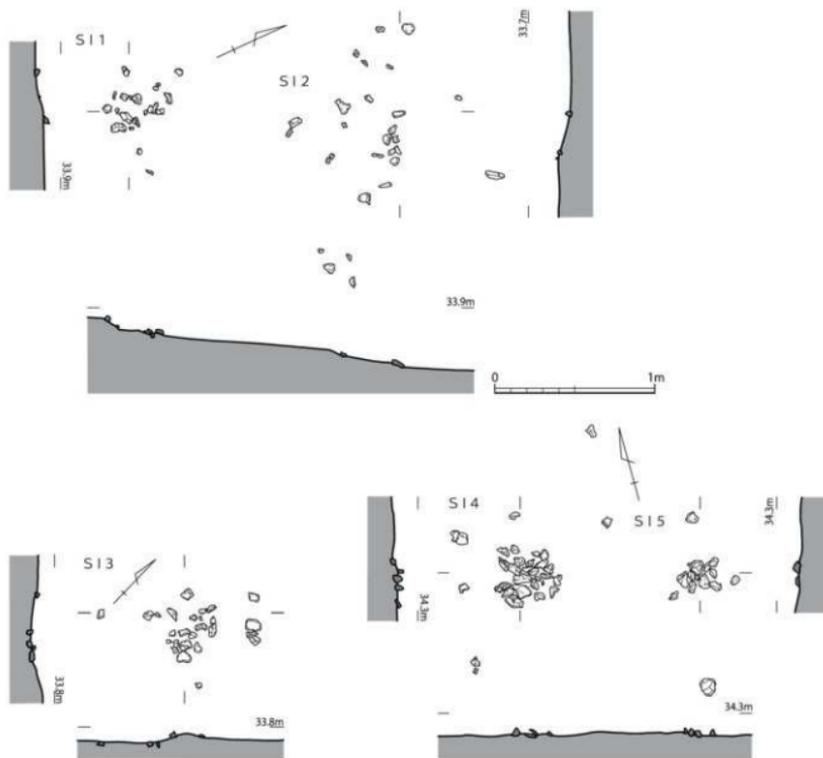
ナイフ形石器は総数23点出土し、そのうち大半がB2グリッド南東部からC2グリッド南西部にかけて確認されている。石材別にみても流紋岩Ia類が13点と約6割を占め、次いで流紋岩If類2点、ホルンフェルスⅡ類が2点、チャートI類が2点、流紋岩Ib・Id・Ie・Ib類が各1点である。以下分類別に説明する。

I類（1～12）は二側縁加工のナイフ形石器である。12の縦長剥片を素材にする以外は、幅広や横長の剥片を素材とし両側縁に加工を施している。素材の置き方には3通りあり、1や4、6、12は打面を先端部側に置き、その部分と対向する側縁に加工が行われている。そのうち6には裏面加工が施されている。また2や11は打面に横位に置き、同様に打面側と対向する側縁に加工を行っている。11は完全に打面を除去されているのに対し、2は打面をそのまま残し、その縁辺部分に細かな剥離が認められる。5、7～10は打面を基部側に置き、両側縁に加工を行うもので、10のように打面を残すものや8や9のように主要剥離面側に平坦剥離を行い、打瘤を除去しているものが認められる。10・11は他のものと比べ、刃部が開きぎみである

Ⅱ類（13～15）は、一側縁加工のナイフ形石器である。I類同様に幅広や横長の剥片を素材とし、一側縁に加工が認められ、打面を13・15は先端側に、14は横位に置き、打面側に加工を行っている。

Ⅲ類（16・17）は、横長剥片を素材にして、打面部を横位に置き、その部分と対向する部分に加工を行っている。そのうち17は表面に平坦剥離を行い、打面を除去している。

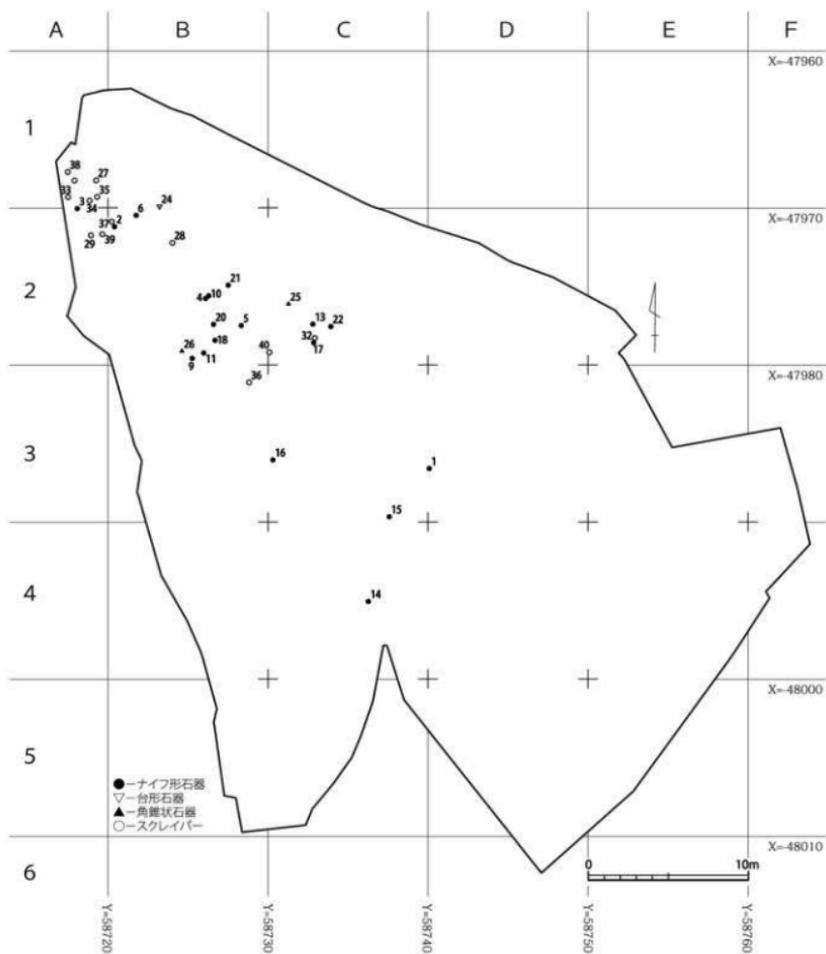
Ⅳ類（18～20）は、横長剥片を素材にして、打面部を横位に置き、その部分に加工を施したものである。いずれも打面を横位に据えて、その部分を主要剥離面から加工を行っている。国府型ナイフに相当する。



第8図 A地点 礫群 (S1) 実測図 (S=1/30)

No	遺構番号	層位	グリッド	出土遺物	礫の範囲 長さ×幅 (m)	礫総個数	礫総重量 (kg)	礫の 密度	炭化物 有 無	備考
1	S11	VI下 ~VII	A B 2	-	0.7 × 0.53	23	1.7	密	×	3点のみ完形。3~10cmの礫で構成されている。全体的に良く赤化している。
2	S12	VI下 ~VII	A B 1	-	1.78 × 1.4	29	4.8	疎	×	3点のみ完形。3~14cmの礫で構成されている。全体的に赤化。
3	S13	VI下	A B 1・B 2	台形石器 剥片	1.03 × 0.48	24	5.7	密	○	4点のみ完形。2~10cmの礫で構成されている。全体的に良く赤化している。炭化物を若干含む。
4	S14	VI	A B 2	-	0.46 × 0.42	34	11.6	密	○	5点が完形礫。全体的に赤化している。炭化物を若干含む。
5	S15	VI	B 2	-	0.4 × 0.3	12		密	○	3点のみ完形礫。中央付近の礫に強い赤化が認められる。炭化物が若干認められる。

第2表 A地点 礫群 (S1) 一覧表



第9図 A地点 旧石器時代第II期遺物分布図1 (S=1/300)

V類(21・22)は、小型で先細りの縦長剥片を素材にして、基部に僅かな加工を施したもので、いわゆる終末期ナイフ形石器である。そのうち23は同一母岩資料がないことから搬入品と考えられる。

VI類(23)は、大型のナイフ形石器で、先端部のみ出土である。

台形石器(第11図24)

B1グリッド南端(SI3内)で出土している。24は流紋岩Ia類製で、幅広い剥片を素材にし、打面を基部側に据えて、両側縁に表面からの二次加工を施している。特に右側縁の加工が顕著である。

角錐状石器(第11図25・26)

2点出土し、25はC2グリッド、26はB2グリッドでそれぞれ出土している。いずれも縦長剥片を素材として二面加工が施され、打面を基部側に据えて、両側縁全体に主要剥離面からの二次加工を行っている。また25は稜上調整が顕著なのに対し、26は中央右側面側には稜上及び、稜上水平調整が認められる。両者とも先端部が欠損している。

スクレイパー(第12図27～36、第13図37～40)

スクレイパーは14点出土し、A1グリッドに中心にまとまって出土している。27～29はエンドスクレイパーである。いずれも下縁を中心に加工が行われ、特に27・29は急角度の加工により刃部を整形している。

30～40はサイドスクレイパーである。そのうち30～34は両側縁に加工を行い、刃部を作り出している。そのうち、30は右側縁側に微細剥離が認められる。また32～35は他のものと比べると比較的微細な加工が施されている。35～39は一側縁のみに刃部が作り出されている。刃部には直線的なもの(35・36・40)や弧状になるもの(37～39)が認められる。

二次加工剥片(第13図41)

二次加工剥片は41をはじめ、6点出土している。分布はB2グリッド北東側やB3グリッド北側、B4グリッドで確認されている。41は末端に厚みのある縦長剥片の左側縁下部に二次加工剥片が認められる。

微細剥離を有する剥片(第13図42、第15図43～48)

微細剥離を有する剥片は18点確認されている。そのうち42は左側縁側、43・46は一側縁から末端にかけて、45は両側縁、47は右側縁から末端、左側縁の一部に剥離痕が認められる。また48は両側縁が折断された剥片の末端部分(図では上)に剥離痕が確認されている。

剥片(第15図49・50)

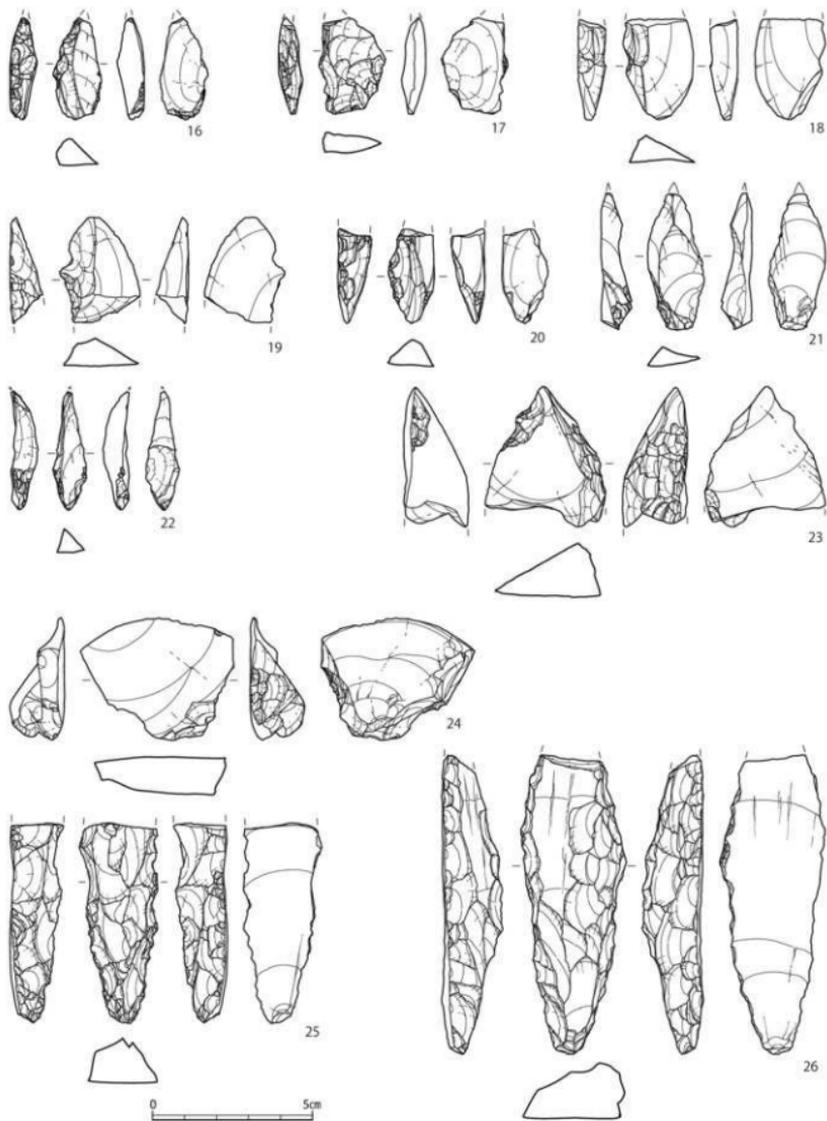
剥片は360点出土している。縦長剥片をはじめ、横長剥片や幅広剥片等出土している。49は縦長剥片で厚みがあり、表面の剥離面より、同一方向から連続的に剥離が行われたものである。50は左側面側が抜けきらず、右側面側のみ下まで抜けて、不整形を呈する。

石核(第17図51～53、第18図54～58、第19図59～61)

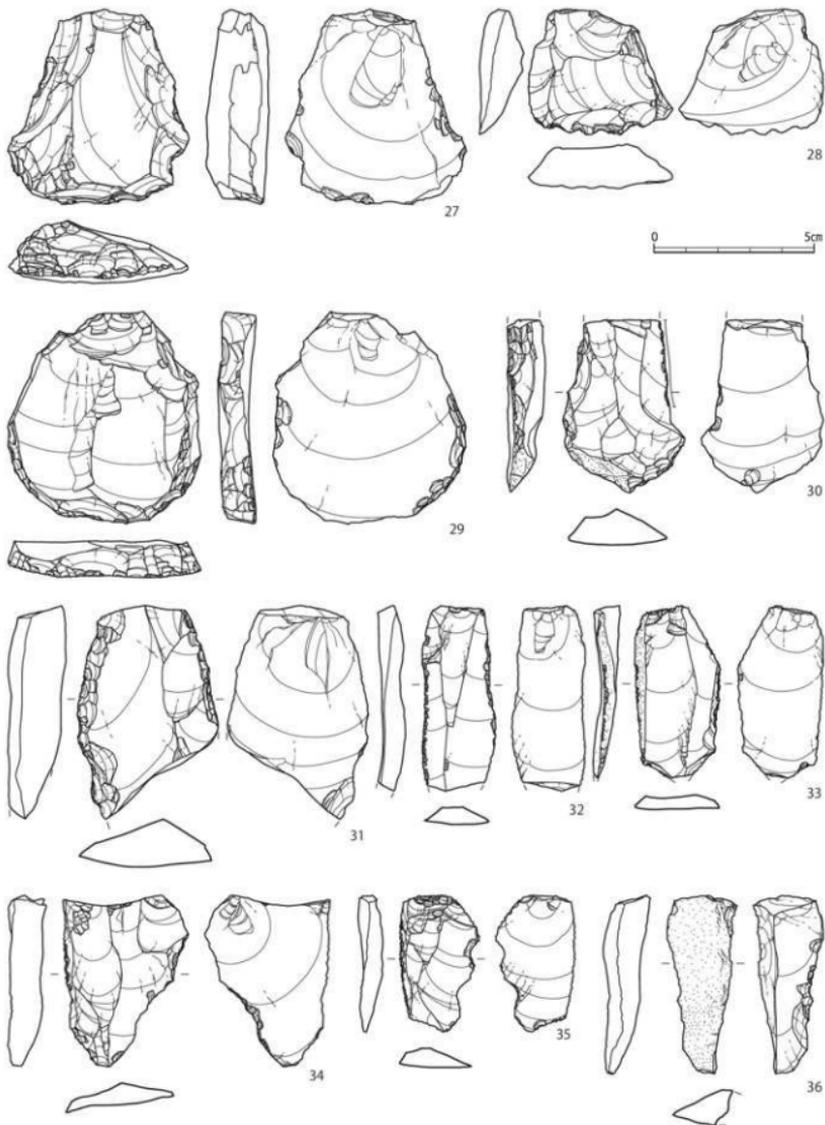
石核は47点出土し、調査区北西側にまとまって出土している。51は礫を分割後、分割面を打面に設定して、おそらく縦長剥片を目的とする剥片剥離作業を行っているが、ヒンジ・フラクチャーが多発し、思ふような剥片が剥離されていない。



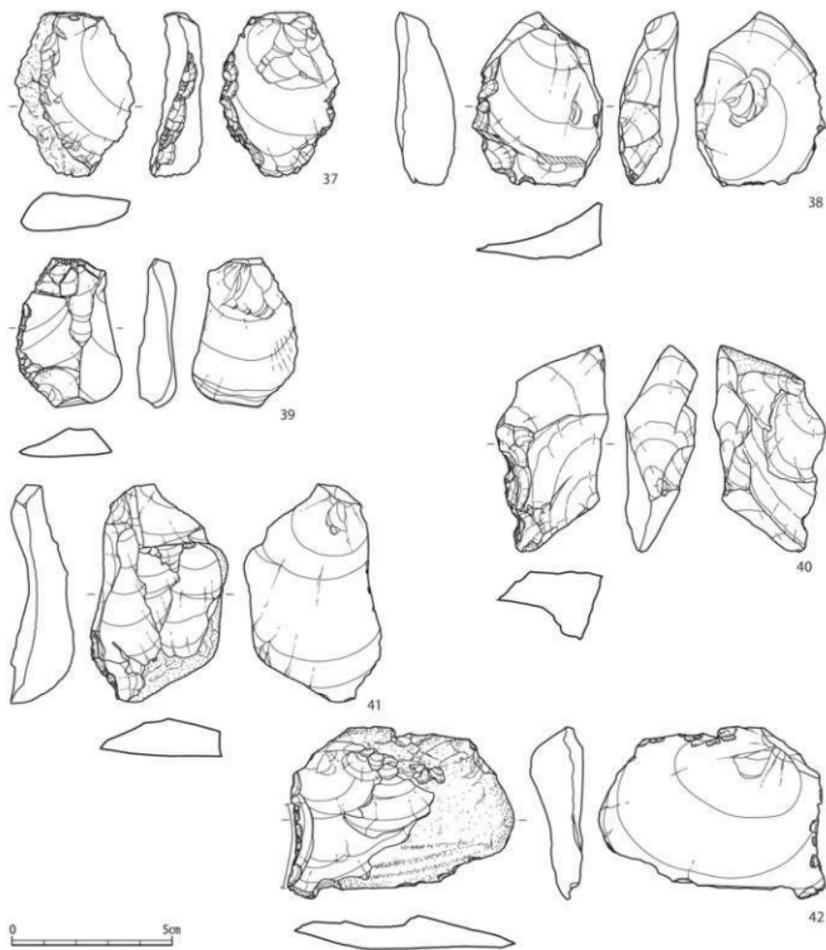
第10圖 A地点 旧石器時代第II期石器実測圖1 (S=2/3)



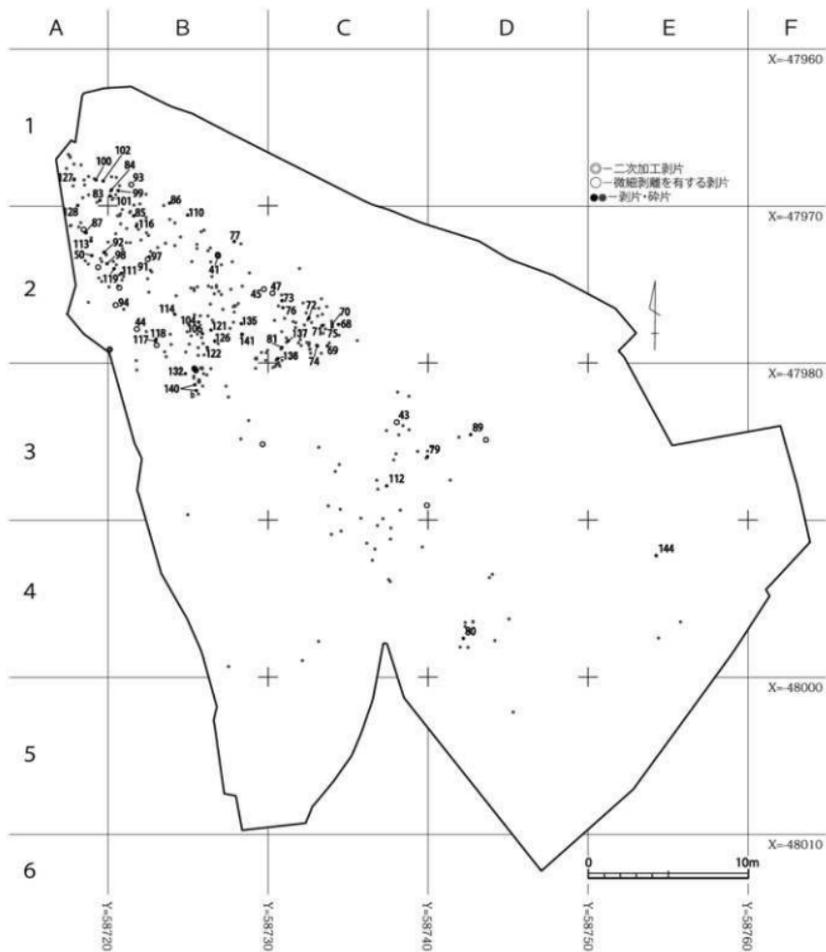
第 11 圖 A 地点 旧石器時代第 II 期石器实测圖 2 (S=2/3)



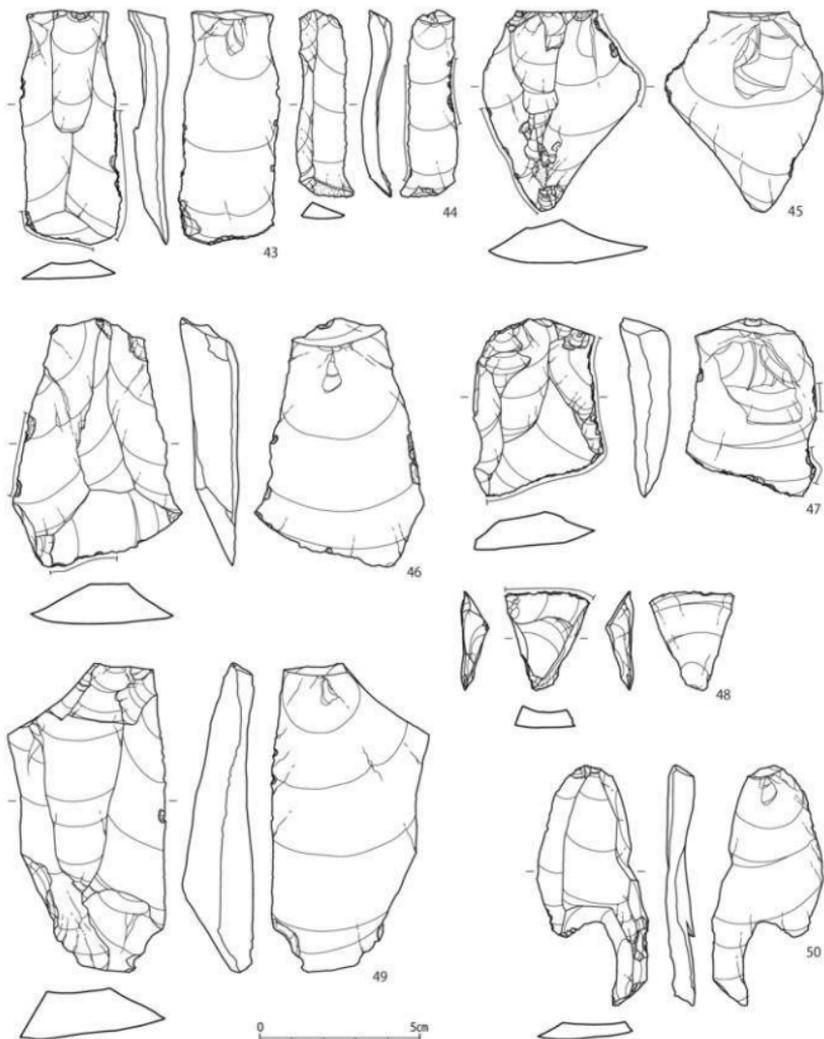
第 12 圖 A 地点 旧石器時代第 II 期石器実測圖 3 (5=2/3)



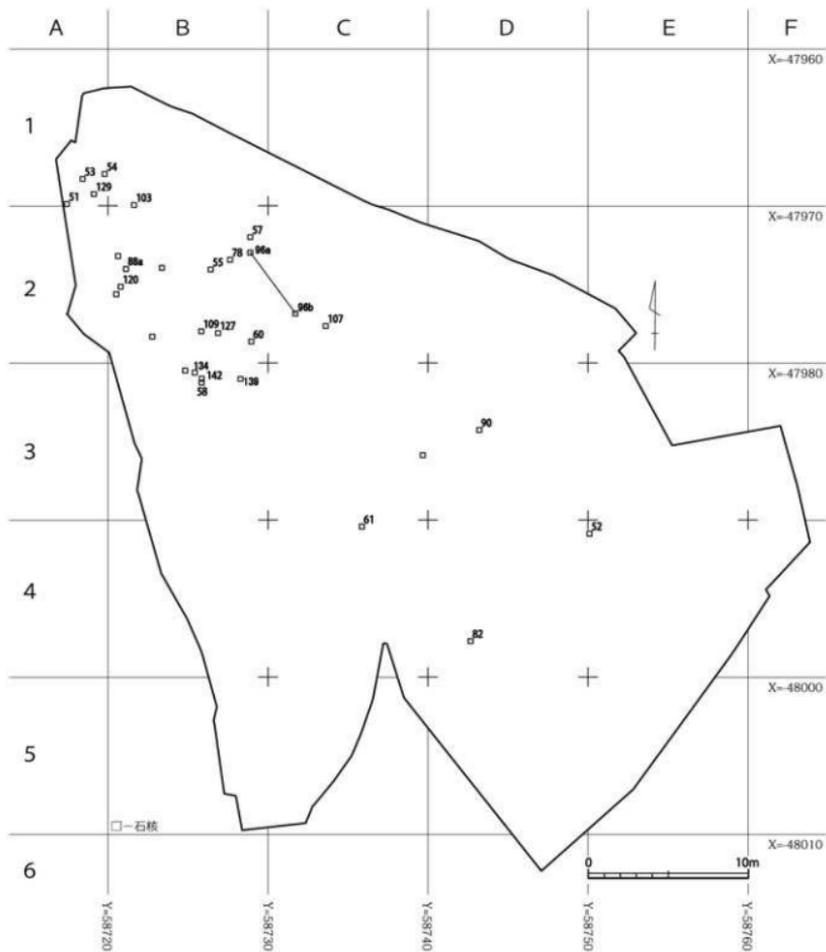
第 13 图 A 地点 旧石器时代第 II 期石器实测图 4 (S=2/3)



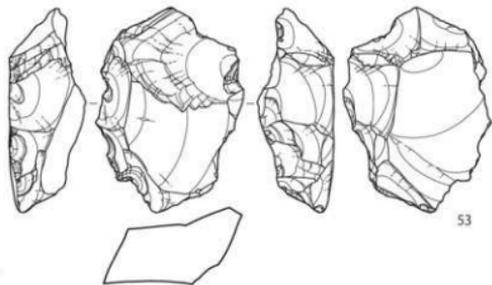
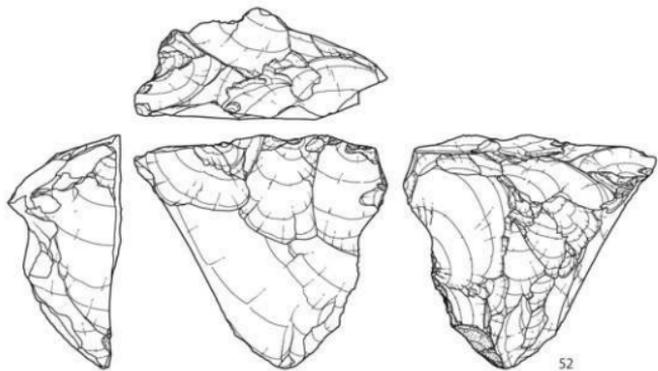
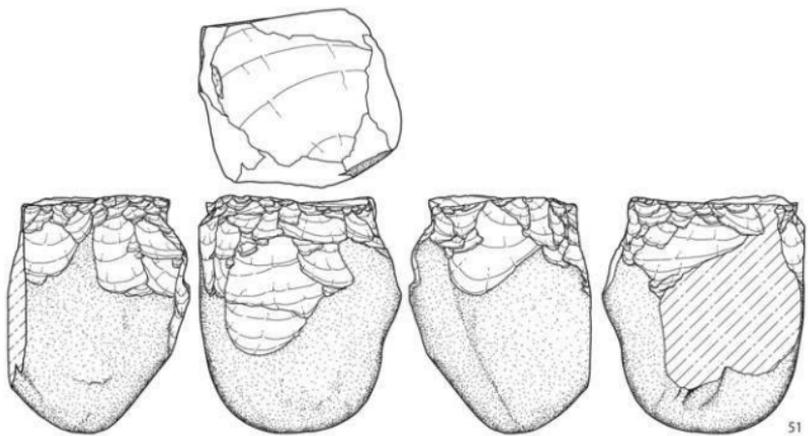
第14図 A地点 旧石器時代第11期遺物分布図2 (S=1/300)



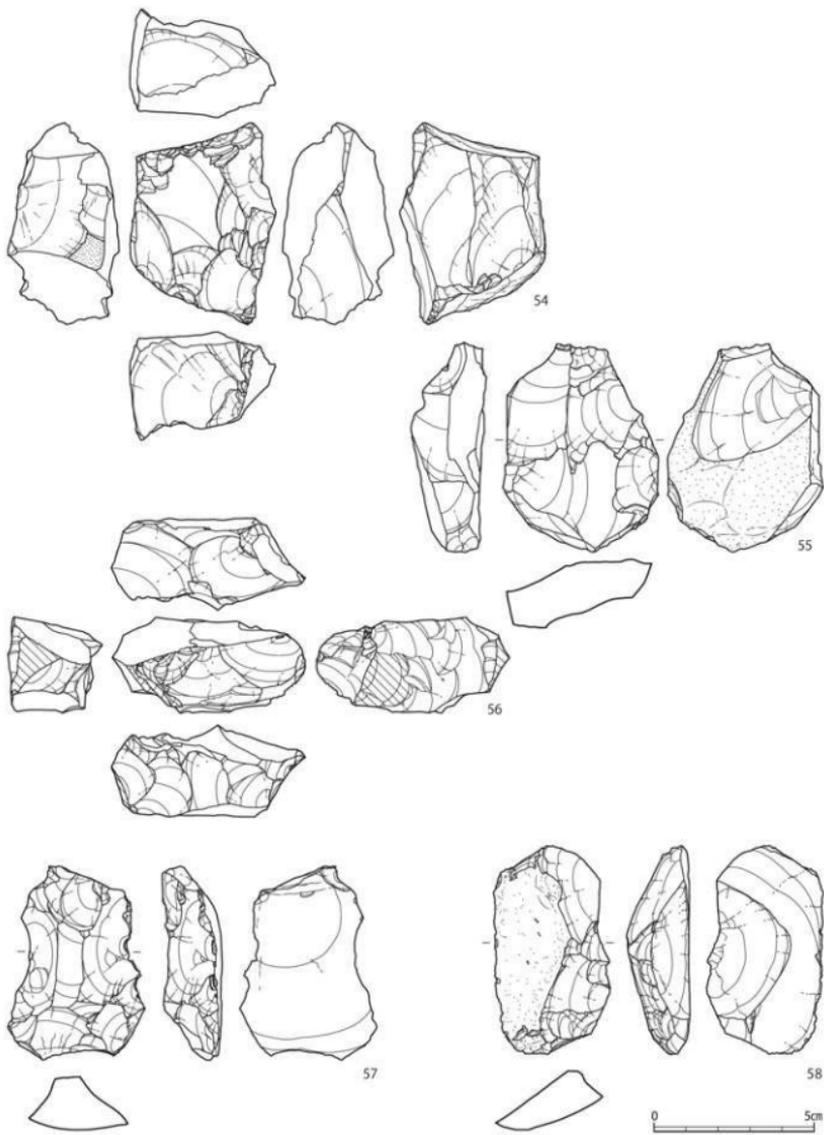
第15图 A地点 旧石器时代第II期石器实测图5 (S=2/3)



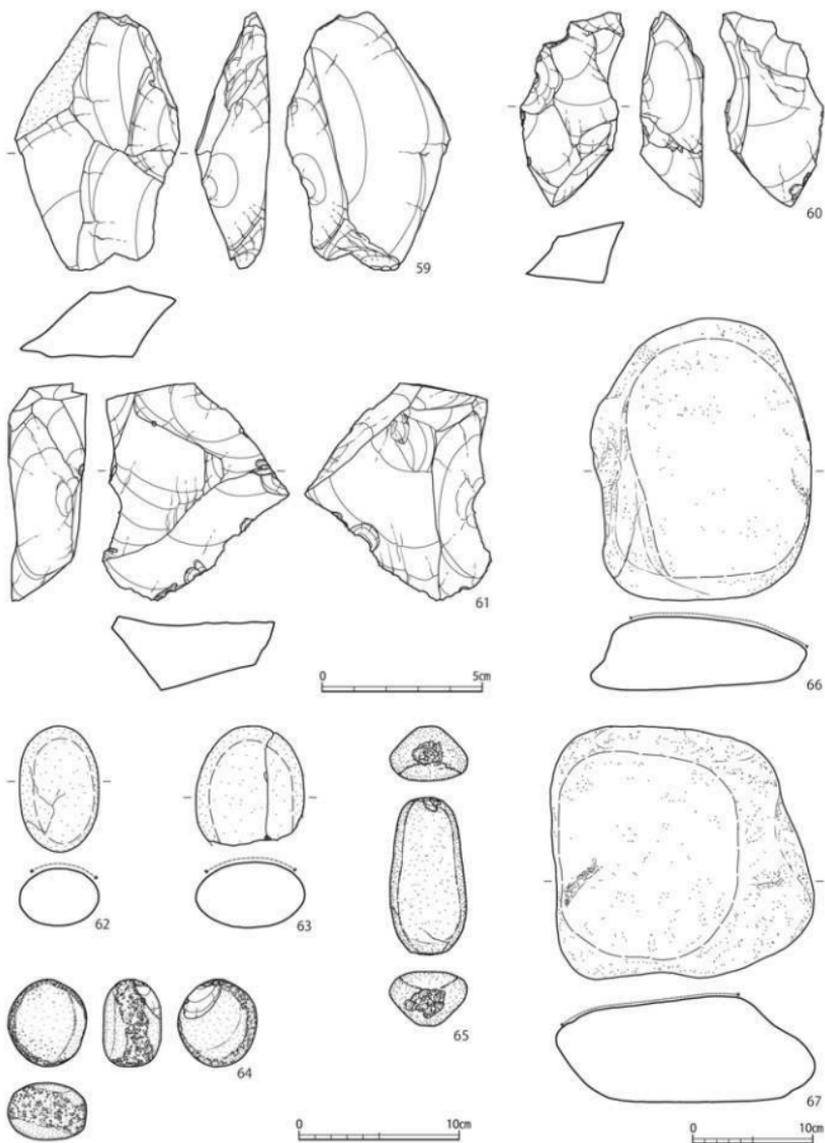
第16圖 A地点 旧石器時代第II期遺物分布図3 (S=1/300)



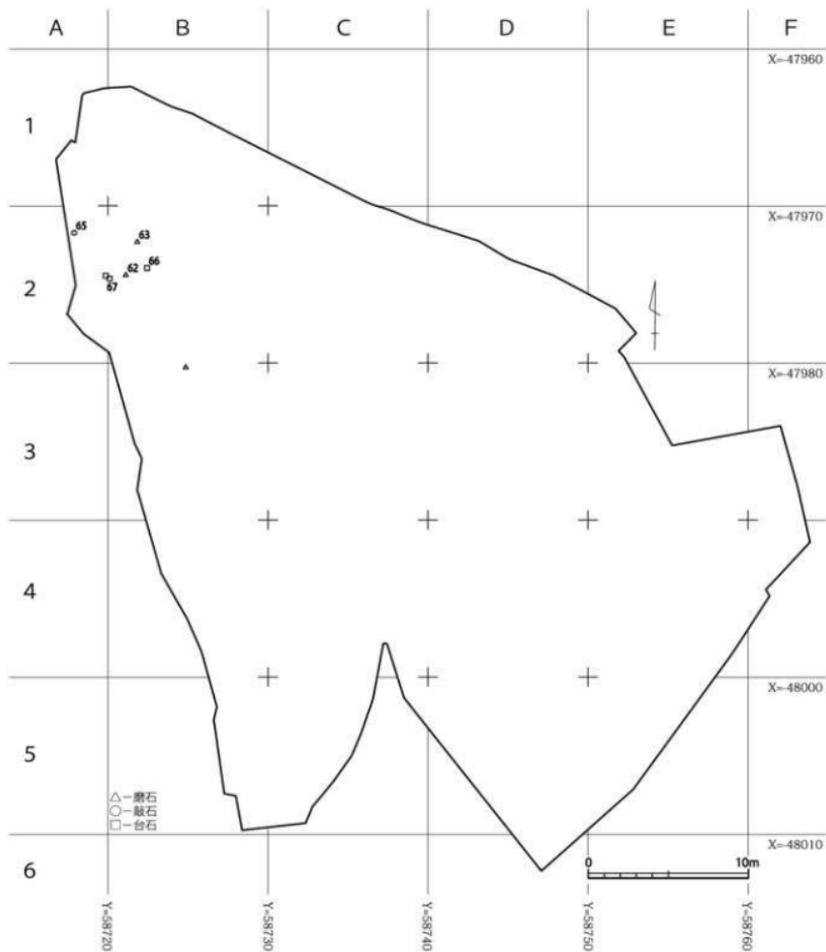
第 17 圖 A 地点 旧石器時代第 II 期石器実測圖 6 (S=2/3)



第18圖 A地点 旧石器時代第II期石器実測圖7 (S=2/3)



第 19 圖 A 地点 旧石器時代第 II 期石器実測圖 B (S=2/3、1/3、1/4)



第 20 图 A 地点 旧石器时代第 II 期遺物分布图 4 (S=1/300)

54～56は打面を頻繁に転移させながら剥片剥離作業を行っている。特に54・55の正面は求心状に剥片を剥離している。

52・53・57～61は剥片素材の石核である。そのうち52は厚みのある剥片を素材に、主に主要剥離面側で剥片剥離作業を行っている。

また53・58～61は有底剥片を目的剥片として作業を行っている。そのうち53は主に表裏面を打面にして、縁周部分で作業を行い、58～61は表面を打面に設定して、58・59は打面側より、60は右側面、61は下部側から、それぞれ剥片を作出している。

礫塊石器（第19図62～67）

62・63は磨石である。いずれも凝灰岩である。楕円形を呈する礫の1面に不明瞭ながら磨面が認められる。

64・65は敲石である。64は流紋岩1類製の楕円形を呈する礫の側面に敲打痕が明瞭に認められる。また65は棒状の砂岩礫を素材とし、両端に敲打痕が認められる。

また台石は3点出土し、調査区北東部・A2グリッド東側～B2グリッド西側にかけて出土している。66・67はいずれも砂岩製でどちらも礫の表面に不明瞭な磨面が認められる。

(3) 石材別資料

A地点の石器群については、接合資料41例あり、ここでは主要なものについて石材ごとに説明を加えたい。なお、石材の特徴については第3表を参照されたい。

流紋岩1a類（第21図～第27図）

流紋岩1a類は他遺構への流れ込み等を含めて219点（ナイフ形石器13点、台形石器1点、角錐状石器1点、スクレイパー7点、二次加工剥片3点、微細剥離を有する剥片11点、剥片166点、石核16点、敲石1点）出土し、その分布は調査区北西部から南東部にかけて出土し、特に北西部に集中する傾向が認められる。そのうち接合資料は14例認められ、その内訳は剥片と石核の接合例が5例（接合資料2・3・6・7等）と剥片同士の接合例が9例（接合資料1・4・5等）である。

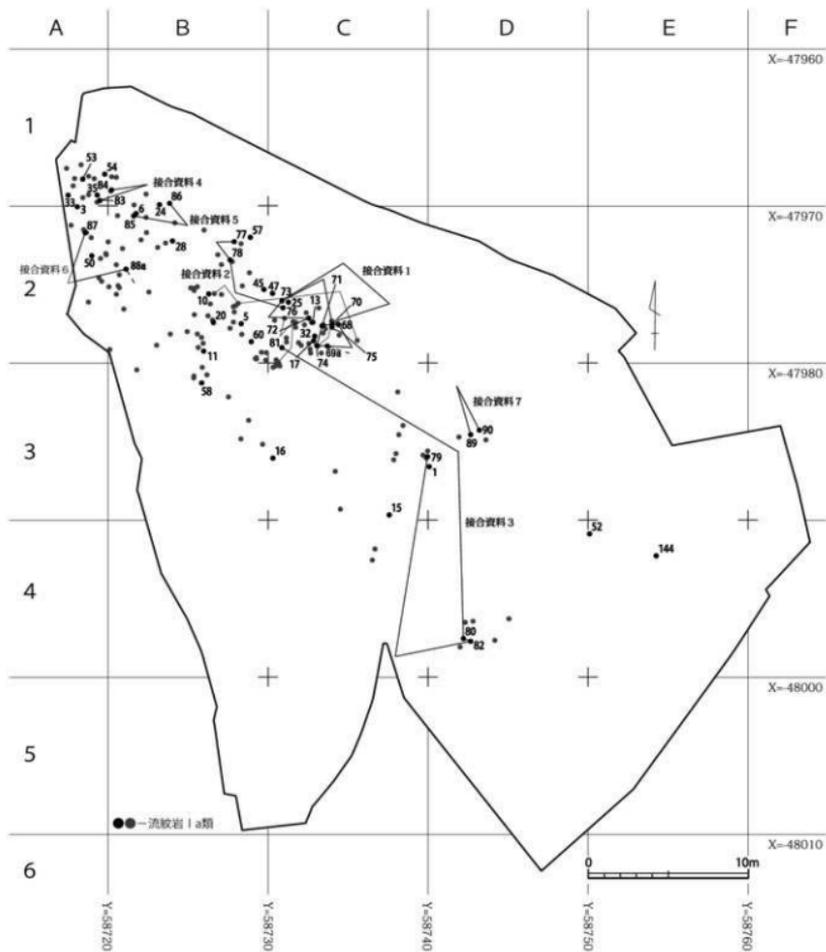
接合資料1（68～75）は、剥片同士の接合例である。B2グリッド南西側でまとまって出土している。基本的には打面調整を行わず、左側面および正面を作業面に設定して剥片剥離作業を行っている。右側面側を打面に設定し、68や69等の剥出作業後、上面を打面に入れ替え、72→○→70を剥出し、打面を正面側に設定し、同作業を行った後、再び作業面を正面に戻し、73や75、71（75との前後関係は不明）→74の剥離を行っている。

接合資料2（76～78）は石核（78）と微細剥離を有する剥片（77）、剥片（76）との接合例である。B2グリッド東側からC2グリッド西側にかけて出土している。打面転移を行いながら剥片剥離作業を行っており、打面を上面に設定して、76と小剥片を連続的に剥出し、その後、右側面側を打面を移して77を剥離している。

接合資料3（79～81）は剥片素材石核の剥離工程を示すものである。C2グリッド南西側からC3グリッド東側、D4グリッド南西側の広範囲での接合例である。大型の剥片を素材に主要剥離面側を作業面として打面側から作業を行った際に、同時に79も剥離してしまう。その後は80を剥離したのち81等の横長剥片を剥出している。

接合資料4（83+84）、接合資料5（85+86）、は剥片素材石核の剥離工程を示すものである。そのうち接合資料4は打面を上方に固定し、剥片剥離作業を行った際、作出された剥片（83+84）である。また接合資料5は打面を90度転移しながら剥片剥離作業を行い、作出された剥片（85+86）である。

接合資料6（87+88）は剥片素材石核の剥離工程を示すものである。縦長剥片素材の石核（88）の



第 21 図 A 地点 旧石器時代第 II 期遺物分布図 5 (S=1/300)

表面右側縁側を打面に設定し、幅広～横長の有底剥片を、連続的に剥出している。

接合資料7 (89 + 90) は石核 (90) と剥片 (89) との接合例である。D 3 グリッドで確認されている。打面を上面に設定し、89 を剥出した後、90 は打面を転移させながら剥片剥離を行っている。なお、89 は剥離の際に下半部を節理により欠損している。

流紋岩 I b 類 (第 29 図・第 30 図)

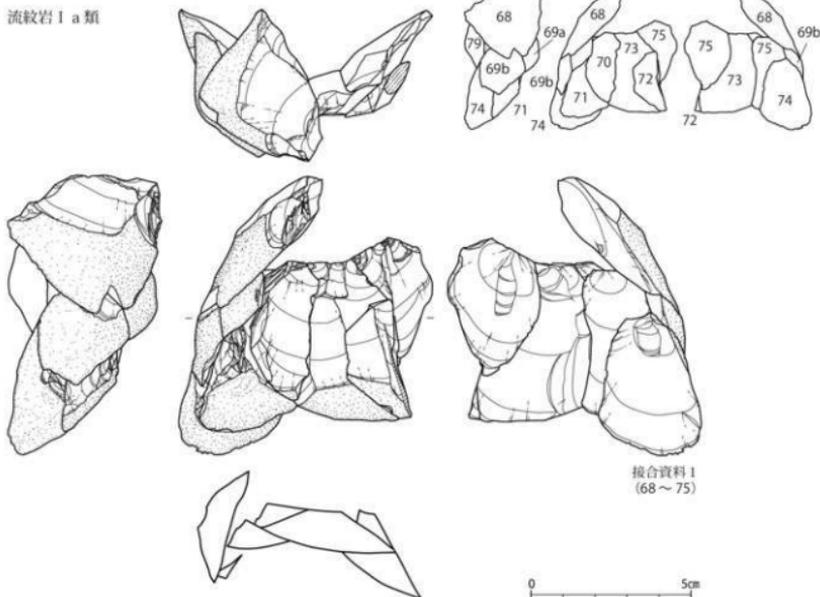
流紋岩 I b 類は他遺構への流れ込み等含めて 19 点 (ナイフ形石器 1 点、スクレイパー 3 点、微細剥離を有する剥片 4 点、剥片 8 点、石核 3 点) 出土し、その分布は A 1 グリッド～C 2 グリッドの南西部で出土している。

そのうち接合資料は 3 例認められ、その内訳は剥片と石核の接合例が 1 例 (接合資料 9) と製品と剥片等の接合例 1 例 (接合資料 8)、剥片同士の接合例が 1 例 (接合資料 10) である。

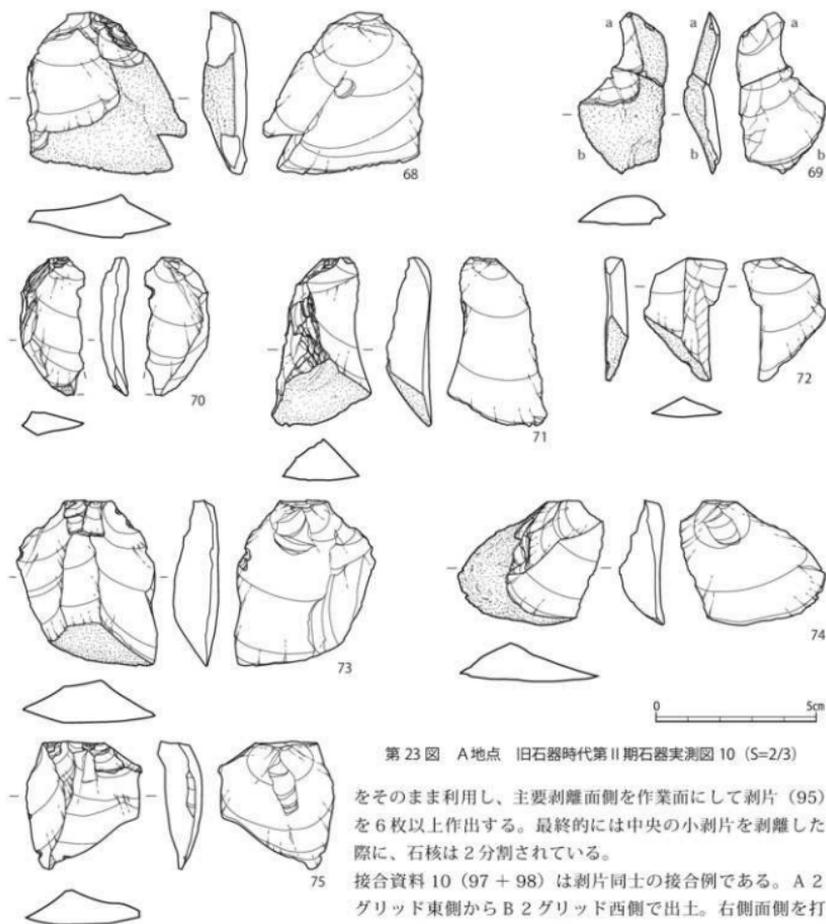
接合資料 8 (39 + 91 ~ 94) は、スクレイパー 1 点 (39) と微細剥離を有する剥片 3 点 (91、93、94) との接合例である。B 1 グリッド南西側から A 2 グリッド東部、B 2 グリッド南西部にかけて確認されている。打面を上面に設定して、91 → 92 → 39 と剥離を行い、上面の打面再生を行った後、93 → 94 と剥出されている。

接合資料 9 (95 + 96) は、剥片素材石核の剥離工程を示すものである。B 1 グリッド北東部～C 2 グリッド西部 (1 点は S A 1 に流れ込む) にかけて出土している。礫面を有する横長の剥片を素材 (96) に、素材の打面

流紋岩 I a 類



第 22 図 A 地点 旧石器時代第 II 期石器実測図 9 (S=2/3)



第23図 A地点 旧石器時代第II期石器実測図10 (S=2/3)

をそのまま利用し、主要剥離面側を作業面にして剥片(95)を6枚以上作出する。最終的には中央の小剥片を剥離した際に、石核は2分割されている。

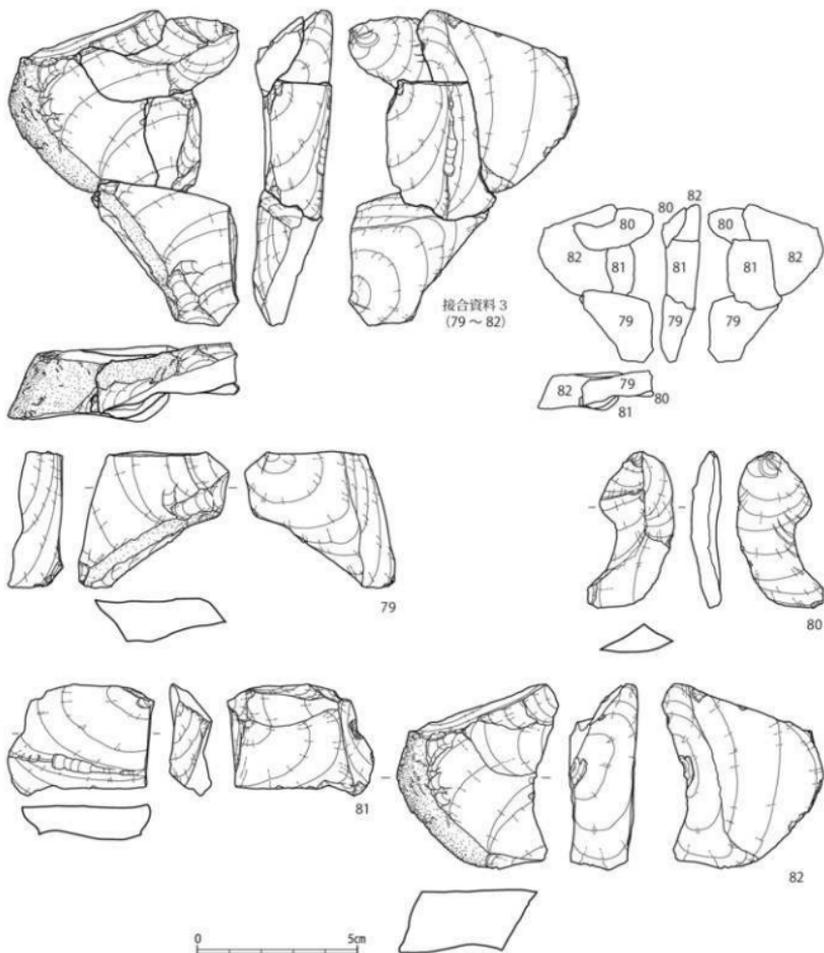
接合資料10(97+98)は剥片同士の接合例である。A2グリッド東側からB2グリッド西側で出土。右側面側を打面に設定し、そこから作業を行った後、打面を上面に設定

して、97→98と剥離を行っている。

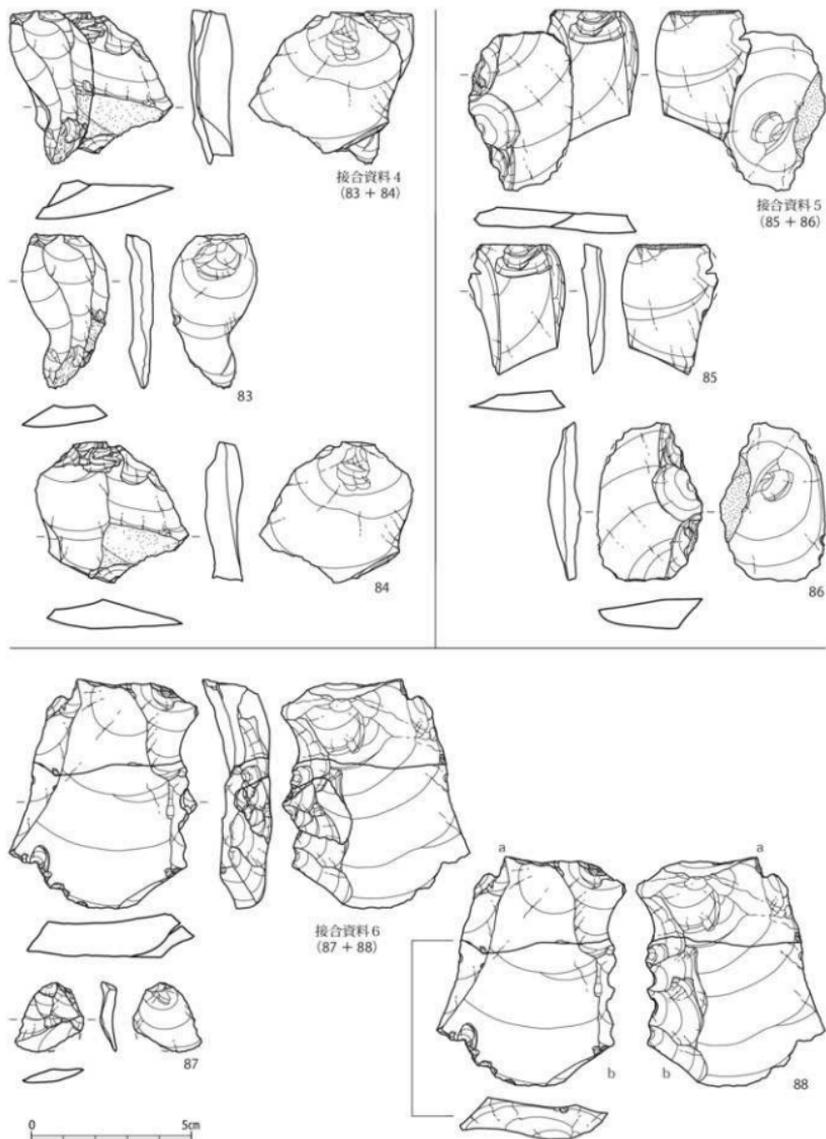
流紋岩Ic類(第31図・第32図)

流紋岩Ic類はA1グリッド南東部からB1グリッド北西部にかけて6点(剥片5点、石核1点)が出土している。そのうち接合資料は2例認められ、その内訳は剥片と石核の接合例が1例(接合資料12)と剥片同士の接合例が1例(接合資料11)である。

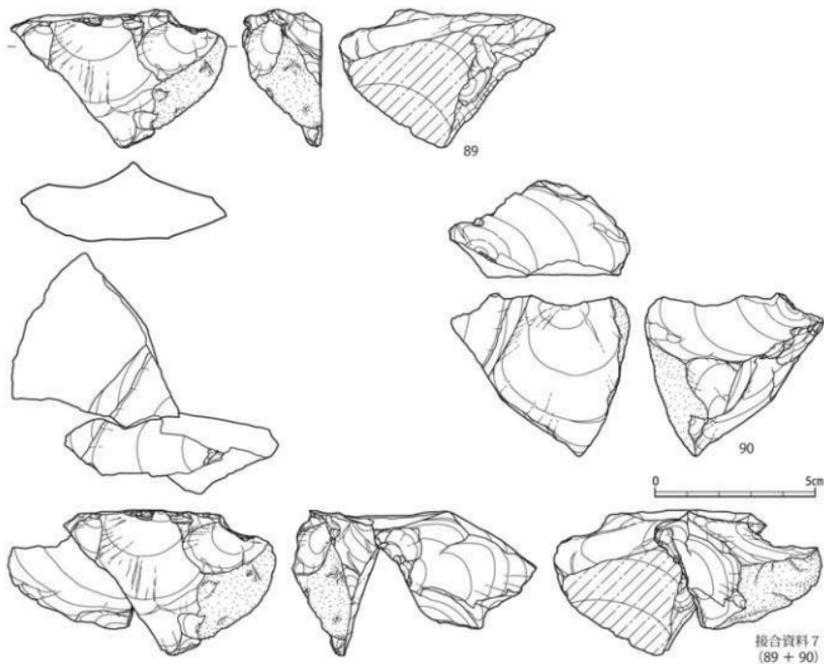
接合資料11(99~101)は、剥片同士の接合例で、上面の剥離面を打面に設定し、99→100→○



第 25 図 A 地点 旧石器時代第 II 期石器実測図 12 (S=2/3)



第 26 圖 A 地点 旧石器時代第 II 期石器実測圖 13 (S=2/3)



第 27 図 A 地点 旧石器時代Ⅱ期石器実測図 14 (S=2/3)

→ 101 と連続的に剥片を作出している。

接合資料 12 (102 ~ 103) は剥片 (102) と石核 (103) の接合例である。正面を打面に設定して、右側面で剥片剥離作業を行い、102 を剥離後は、その面を打面して、正面を作業面として剥離作業を行っている。

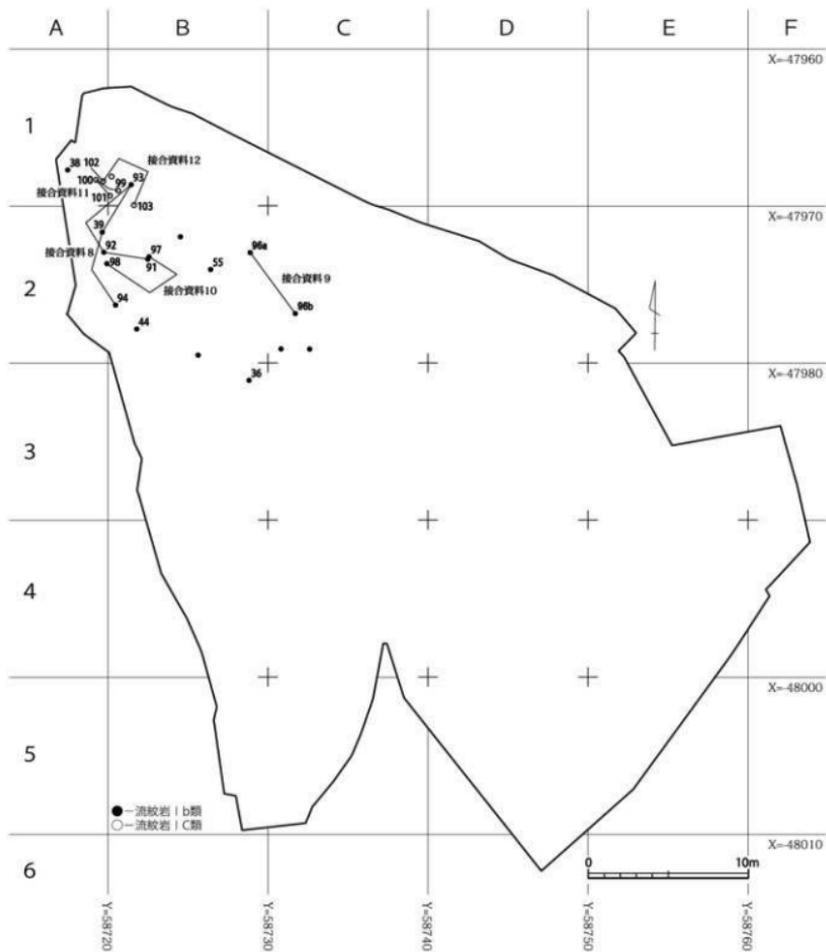
流紋岩Ⅱ a 類 (第 33 図 ~ 第 37 図)

流紋岩Ⅱ a 類は、他遺構への流れ込みや表土中のもの等含めて 8 点 (微細剥離を有する剥片 1 点、剥片 4 点、石核 3 点) 出土し、その分布はその大半が B 2 グリッドの南付近にまとまる。

そのうち接合資料は 3 例認められ、その内訳は剥片と石核の接合例が 1 例 (接合資料 13) と石核同士の接合例 1 例 (接合資料 14)、剥片同士の接合例が 1 例である。なお、接合資料から想定される原石の形状が合わないことから、接合資料 13 と 14 は別個体の可能性がある。

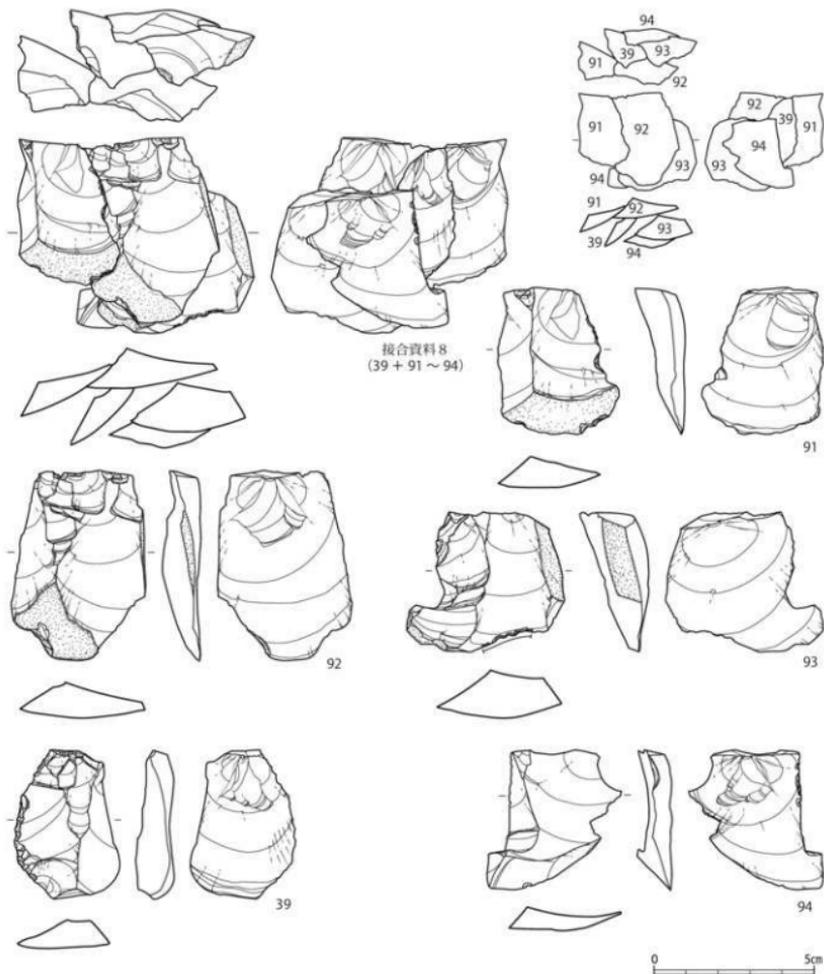
接合資料 13 (104 ~ 107) は、微細剥離を有する剥片 1 点 (106) と剥片 2 点 (104・105)、石核 1 点 (107) で構成されている。104 を保有する個体と 105 ~ 107 を保有する個体とに分割後、105 ~ 107 を保有する個体は分割面を打面に設定して、105 や 106 等の剥離作業を行った後、打面を作業面側に移して、同作業を実施している。

接合資料 14 (108 + 109) は分割面を打面して、剥片剥離作業を行っている。最終的に剥片 (108)

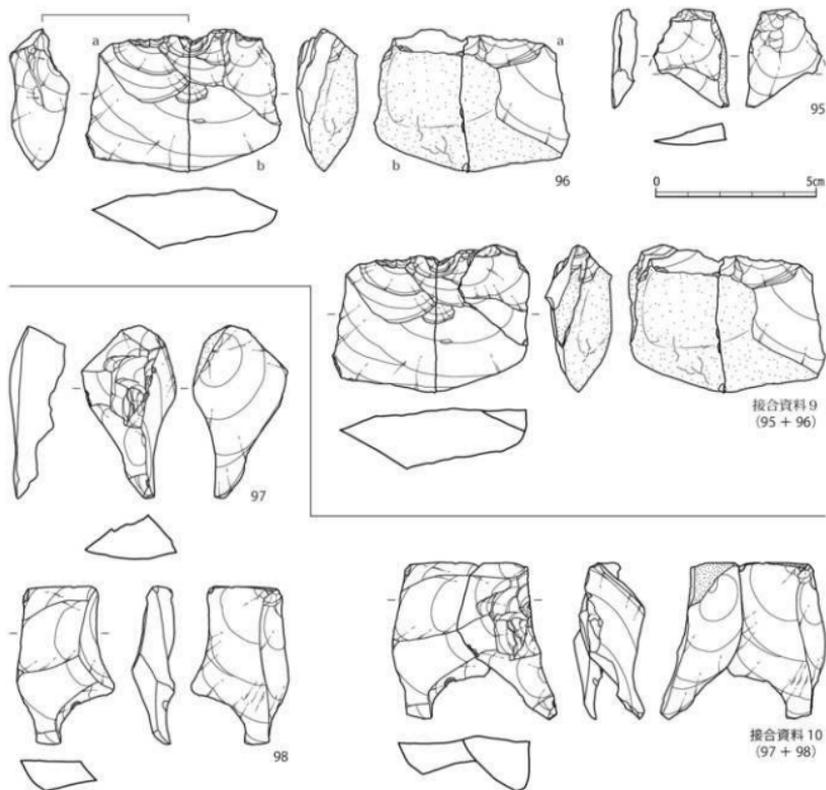


第 28 图 A 地点 旧石器时代第 II 期遺物分布图 6 (S=1/300)

流紋岩 I b 類



第 29 図 A 地点 旧石器時代第 II 期石器実測図 15 (S=2/3)



第30図 A地点 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図16 (5=2/3)

剥出をもって石核(109)の作業を完了するが、108はその後、左側縁を打面に設定して主要剥離面を作業面にして幅広の剥片を剥出している。なお、108の下部には微細剥離が認められる。

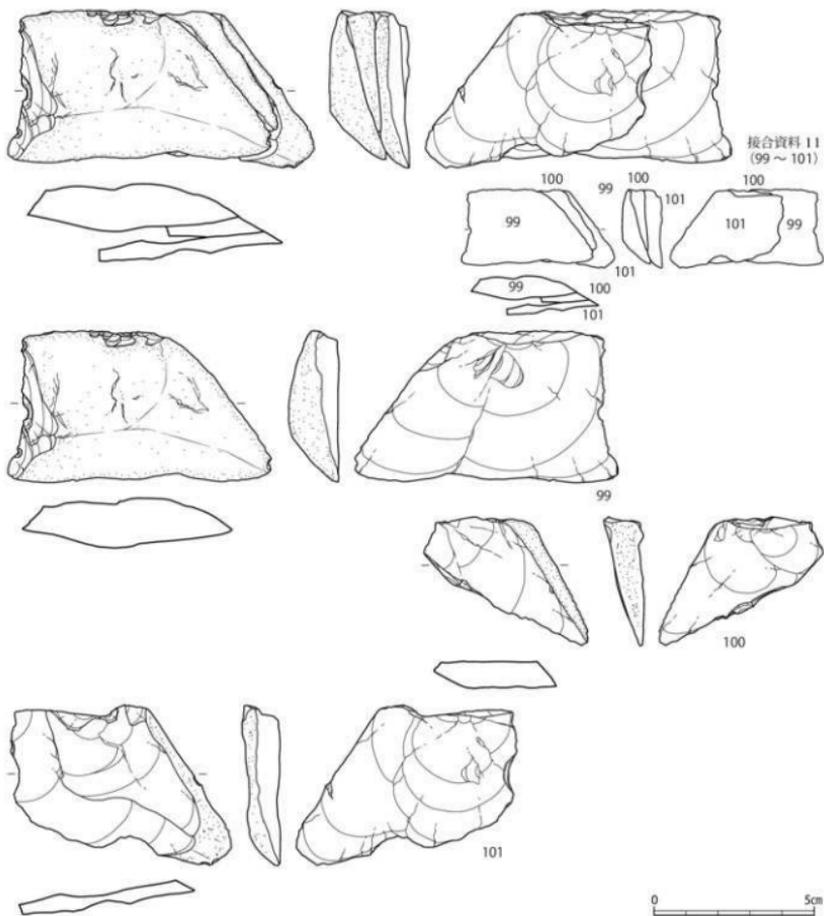
流紋岩Ⅱb類(第33図・第38図～第40図)

流紋岩Ⅱb類は、他遺構への流れ込みや表土中のもの等含めて44点出土し、その分布はB2グリッドの北西付近を中心に10mの範囲にまとまる他、B・C4グリッドにも散発的に出土が認められる。

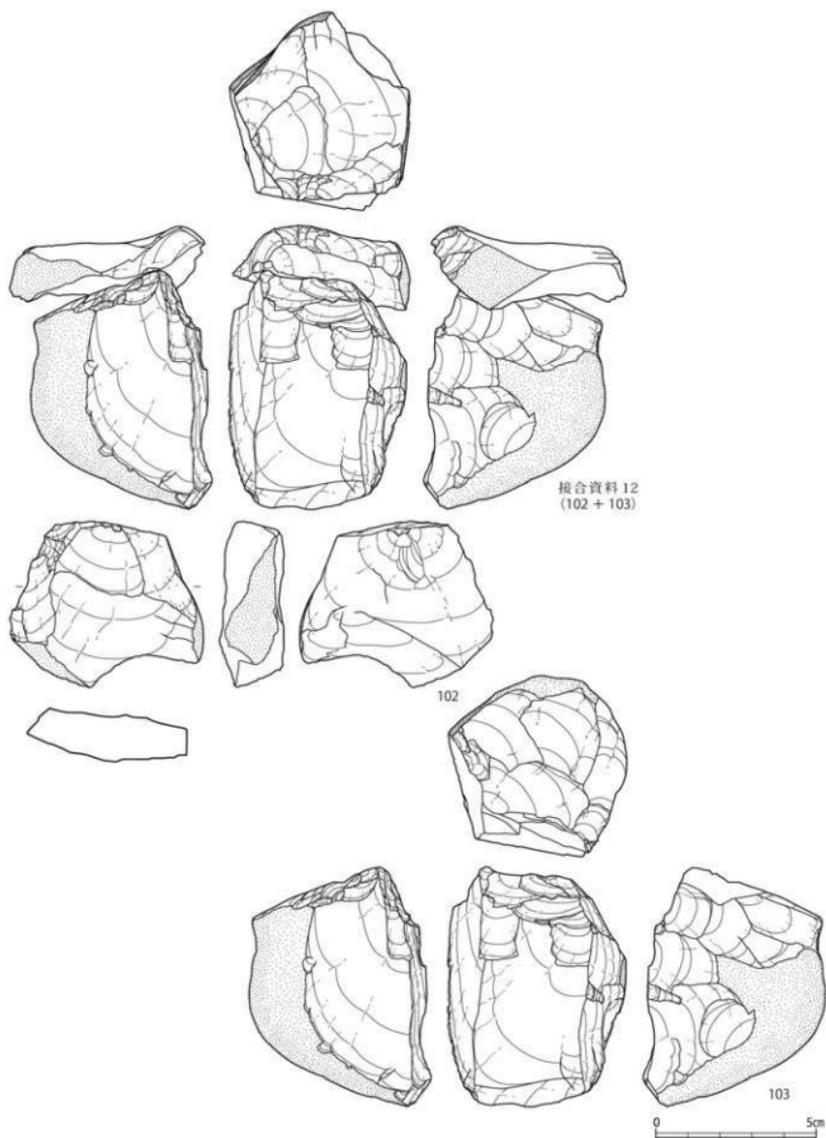
内訳はナイフ形石器1点、二次加工剥片1点、微細剥離を有する剥片2点、剥片39点、石核2点で、そのうち接合資料は5例認められたが、接合資料18の剥片(119)と石核(120)の接合例以外は剥片同士の接合例(接合資料15～17)である。

基本的には縦長剥片剥離を目的としており、打面を上下に設定して、打面調整を行わず、そのまま剥離作業を行っている。

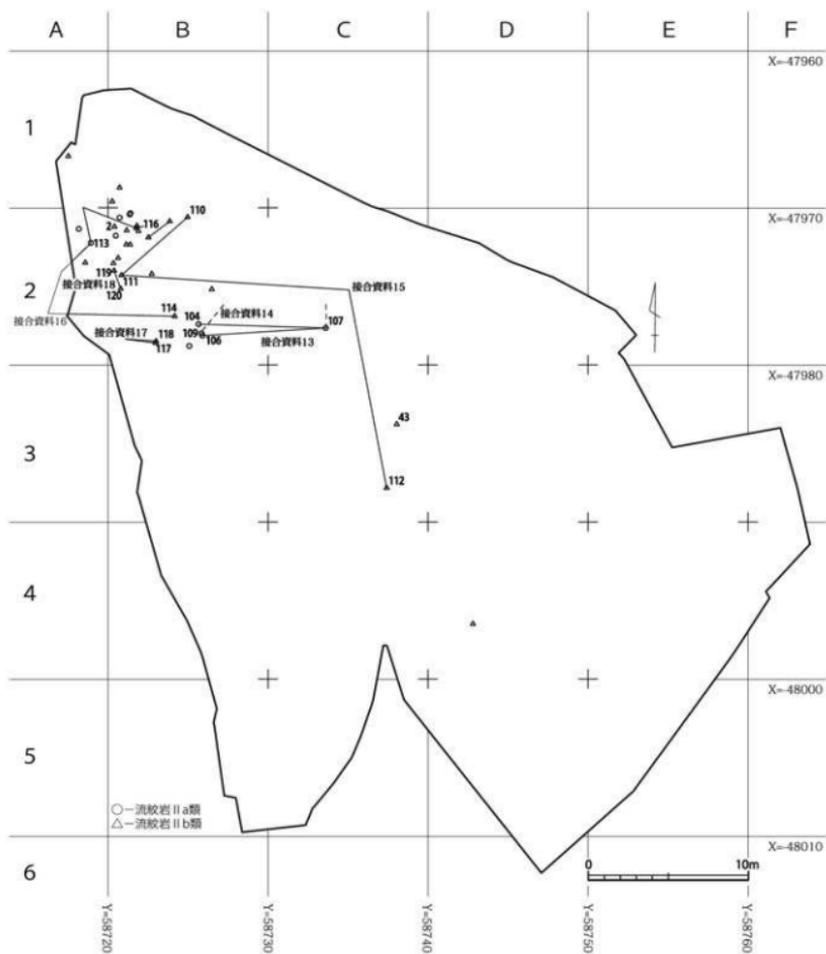
流紋岩 I c 類



第 31 圖 A 地点 旧石器時代第 II 期石器実測圖 17 (S=2/3)



第 32 圖 A 地点 旧石器時代第 II 期石器実測圖 18 (S=2/3)



第33圖 A地点 旧石器時代第II期遺物分布図7 (S=1/300)

安山岩（第41図～第43図）

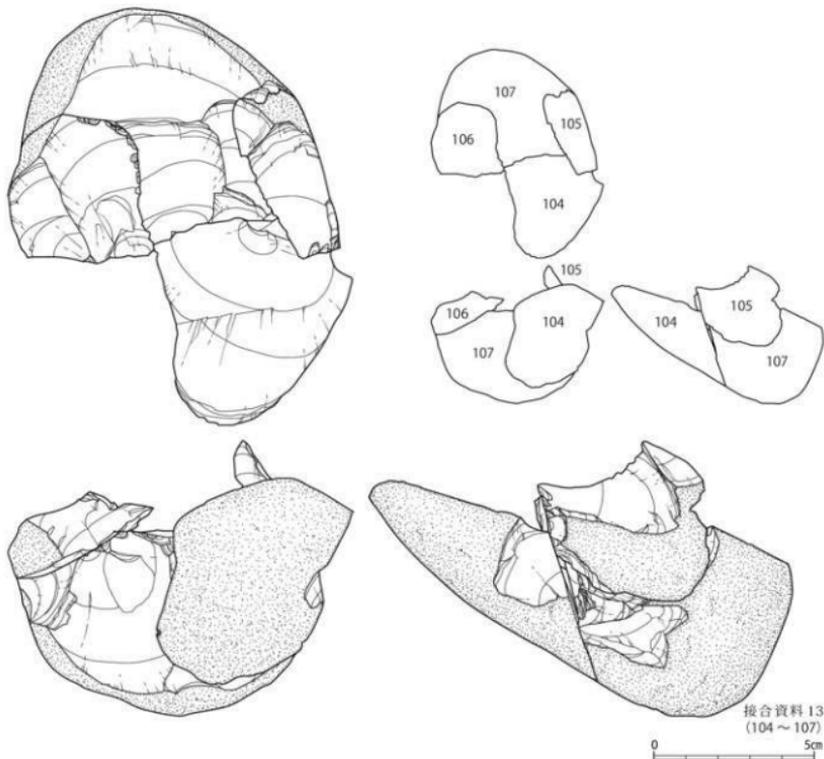
安山岩は9点（剥片6点、石核3点）が出土し、約7割がB2グリッド南東部でまとまるほか、C・E4グリッドでも散発的に認められる。

接合資料は2例（接合資料19・20）が認められ、いずれも剥片素材の石核と剥片との接合例である。そのうち接合資料19は、右側面を作業面として表面より有底剥片の剥離作業を行っている。また接合資料20は打面側を作業面に設定し、同じく表面より同作業を実施している。

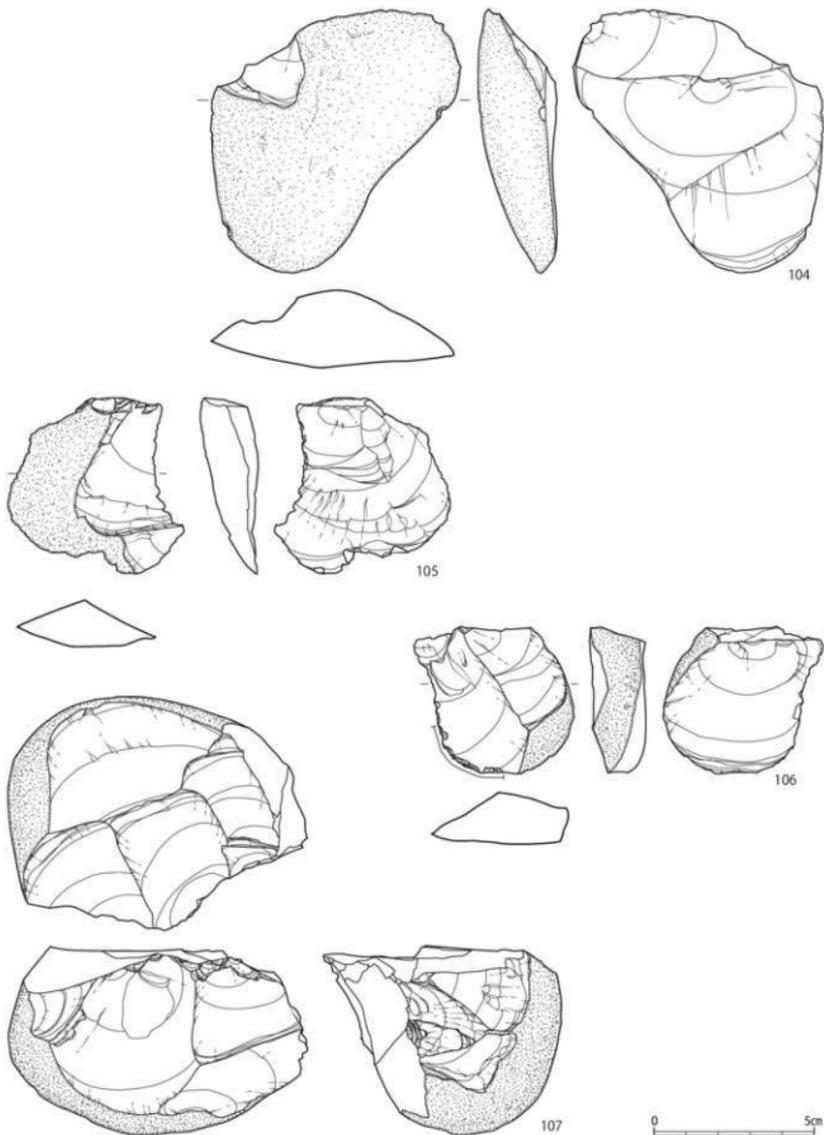
ホルンフェルスI類（第44図・第45図）

ホルンフェルスI類は剥片6点、石核1点の計7点がA1グリッド南東部にまとまって出土している。そのうち接合資料は1例（接合資料21）あり、頻繁に打面転移をしながら剥片剥離作業を行う石核（129）から剥片（127・128）が剥離されている。なお、127と128の前後関係については不明である。

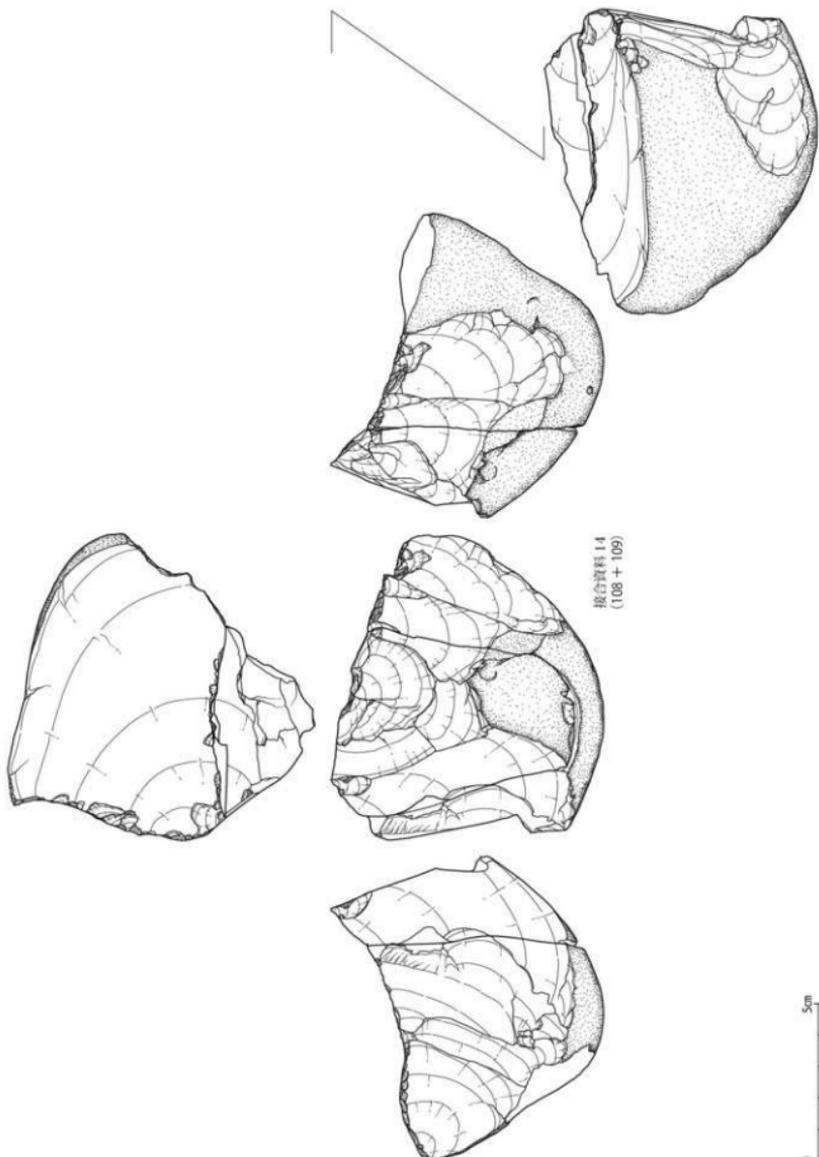
流紋岩IIa類



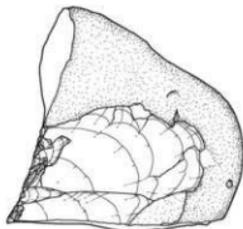
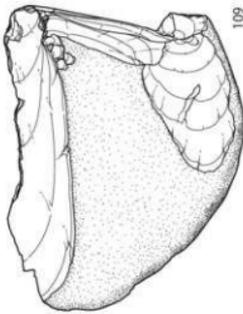
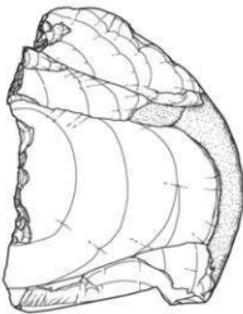
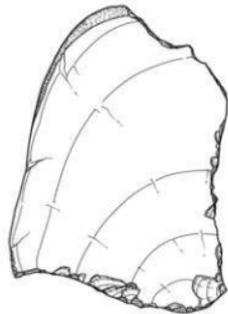
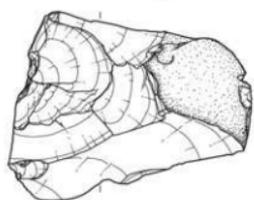
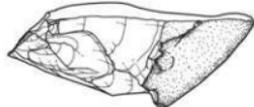
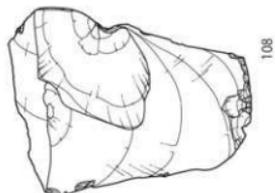
第34図 A地点 旧石器時代第II期石器実測図19 (S=2/3)



第 35 圖 A 地点 旧石器時代第 II 期石器実測圖 20 (S=2/3)

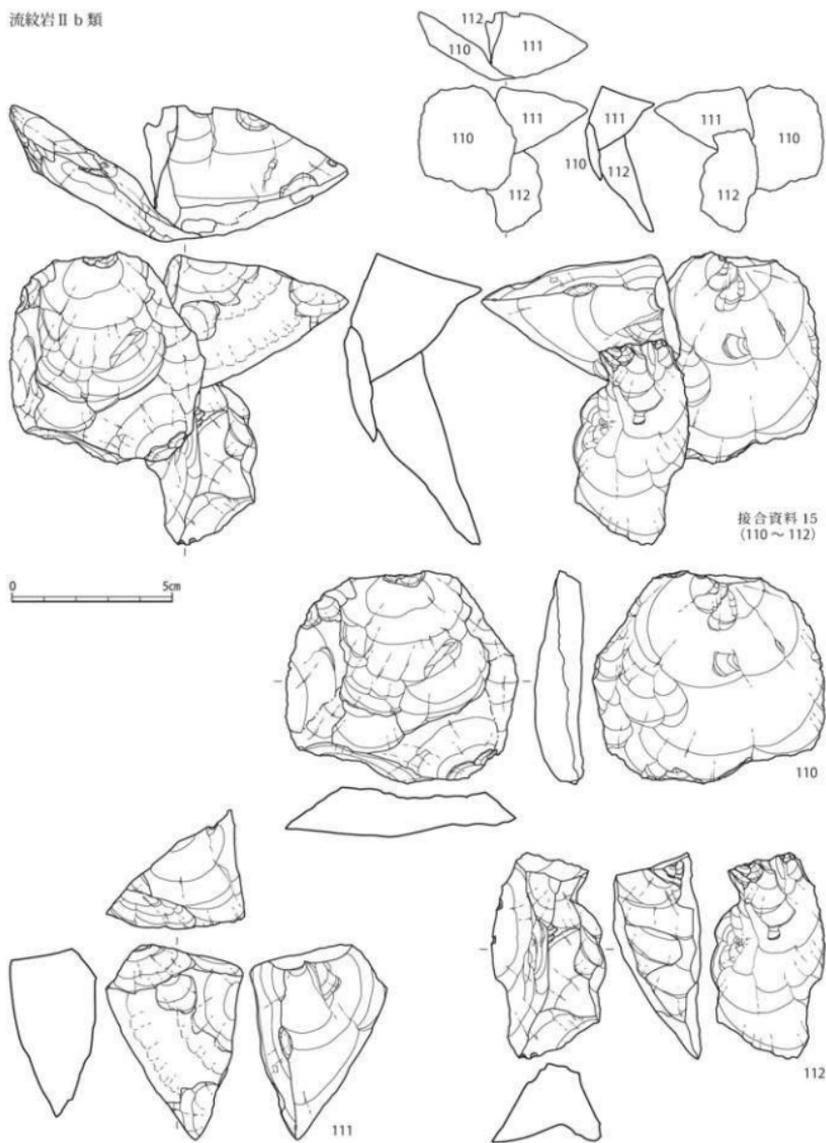


第 36 図 A 地点 旧石器時代第 II 期石器実測図 21 (S=2/3)

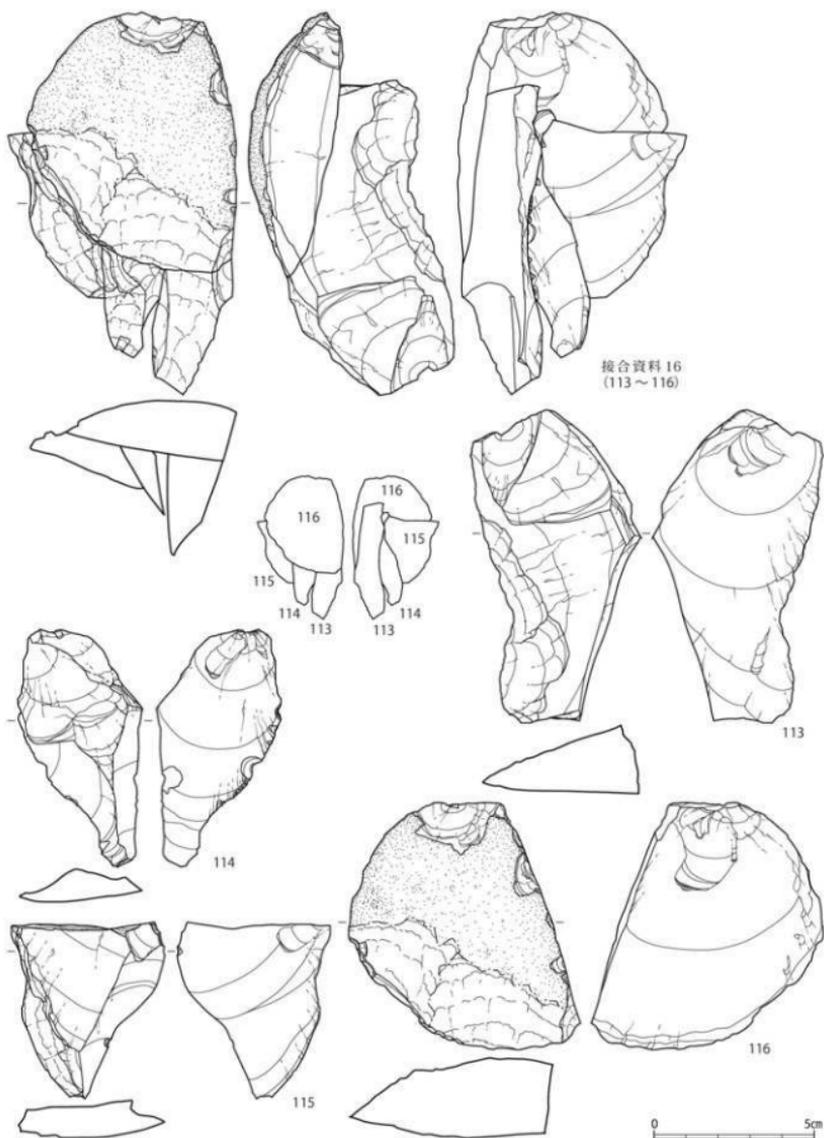


第 37 图 A 地点 旧石器时代第 II 期石器实测图 22 (S=2/3)

流紋岩 II b 類



第 38 圖 A 地点 旧石器時代第 II 期石器実測図 23 (S=2/3)

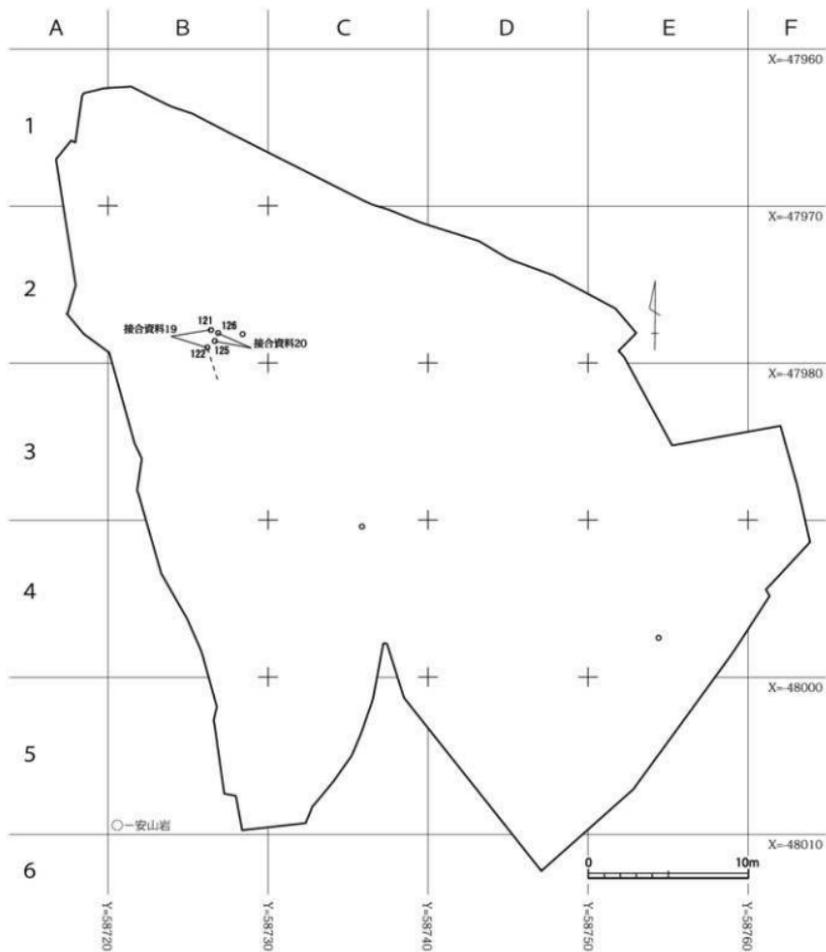


複合資料 16
(113 ~ 116)

第 39 圖 A 地点 旧石器時代第 II 期石器実測圖 24 (S=2/3)

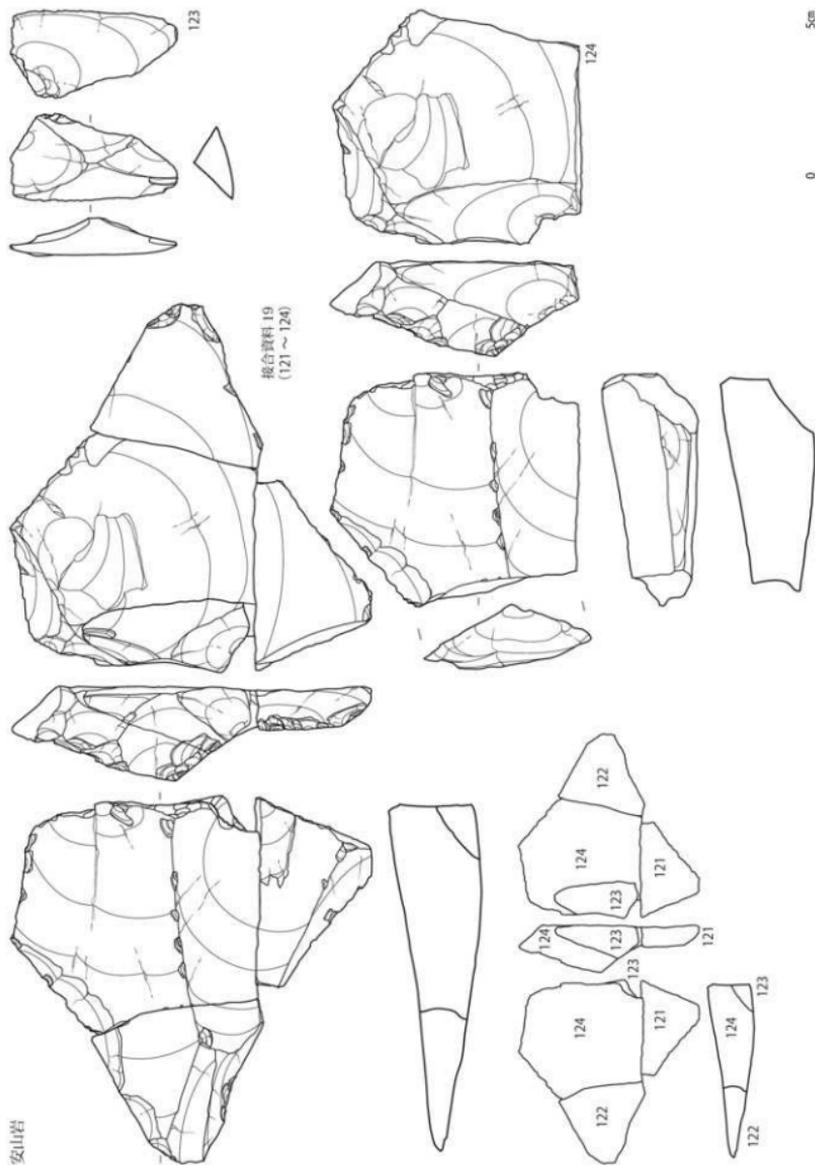


第 40 圖 A 地点 旧石器時代第 II 期石器実測圖 25 (S=2/3)

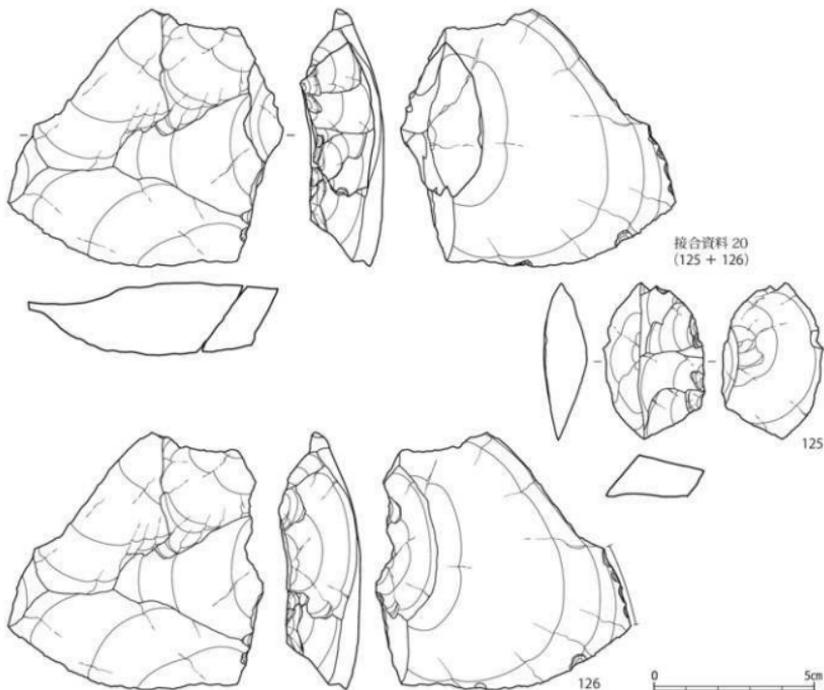


第41圖 A地点 旧石器時代第II期遺物分布図8 (S=1/300)

安山岩



第 42 図 A 地点 旧石器時代第 II 期石器実測図 26 (S=2/3)



第43図 A地点 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図27 (S=2/3)

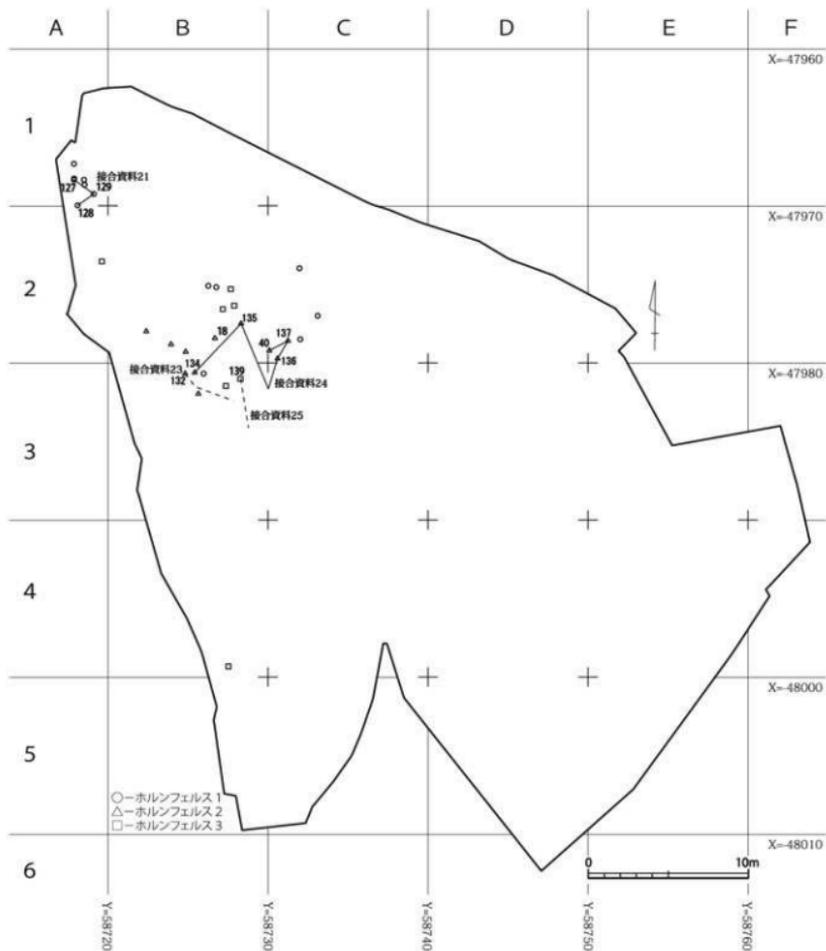
ホルンフェルスⅡ類 (第44図・第46図～第48図 136・137・40)

ホルンフェルスⅡ類は、他遺構への流れ込みやⅡ層出土を含めて17点が確認されており、その内訳はナイフ形石器が2点、スクレイパー1点、剥片10点、石核4点である。これらの分布はB2グリッド南側からB3グリッド北側、C2グリッド南西側にまとまって出土している。確認されている石核はすべて剥片素材であり、確認されている接合資料は3例とも石核と剥片との接合例である。

接合資料22は幅広の縦長剥片を素材に主要剥離面側から剥片(130)を剥出しているが、その際の衝撃で石核(131)は2分割されてしまう。131の左側面には微細剥離が認められるが、130剥離以前か、以後かは不明である。

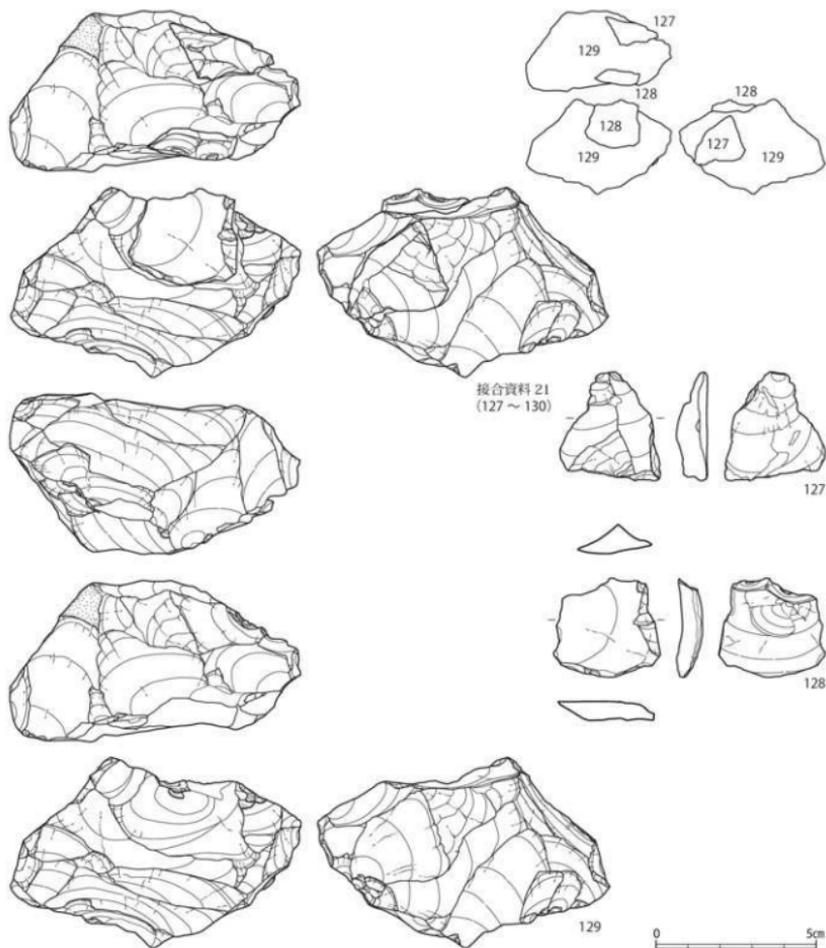
接合資料23(132+133)は厚みのある剥片を素材に主要剥離面側を打面に設定して、131等の横長の有底剥片を作出している。その後、石核(132)は打面を表面に入れ替えて、剥片剥離作業が行われている。

接合資料24(40+134～137)は、厚みのある幅広剥片を素材に、剥片A(40+135～137)を剥離する直前までは表面側もしくは主要剥離面側より剥片剥離作業を行い、その後打面を表面に移した後に剥片Aを剥出する。剥片Aは元素材の表面を打面にして135→136→○→137を連続的に剥出している。40はその後左側縁に二次加工を行い、スクレイパーに転用されている。



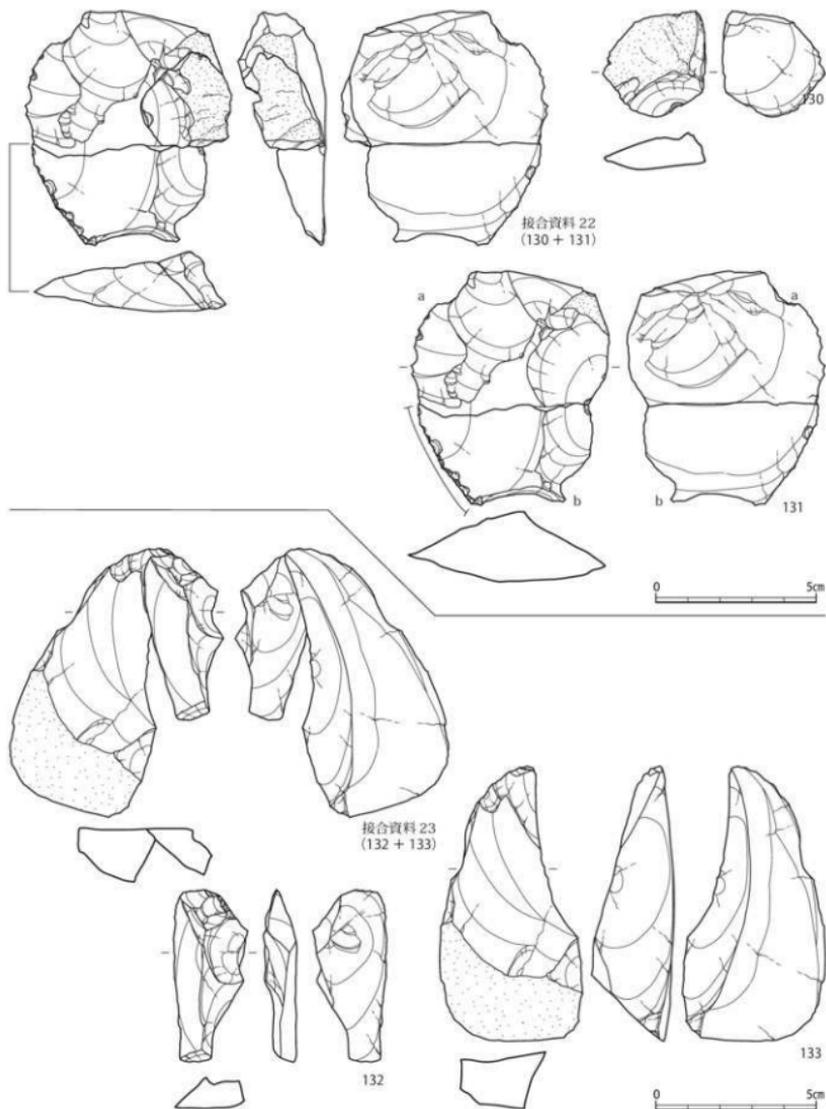
第 44 図 A 地点 旧石器時代Ⅱ期遺物分布図 9 (S=1/300)

ホルンフェルス1類

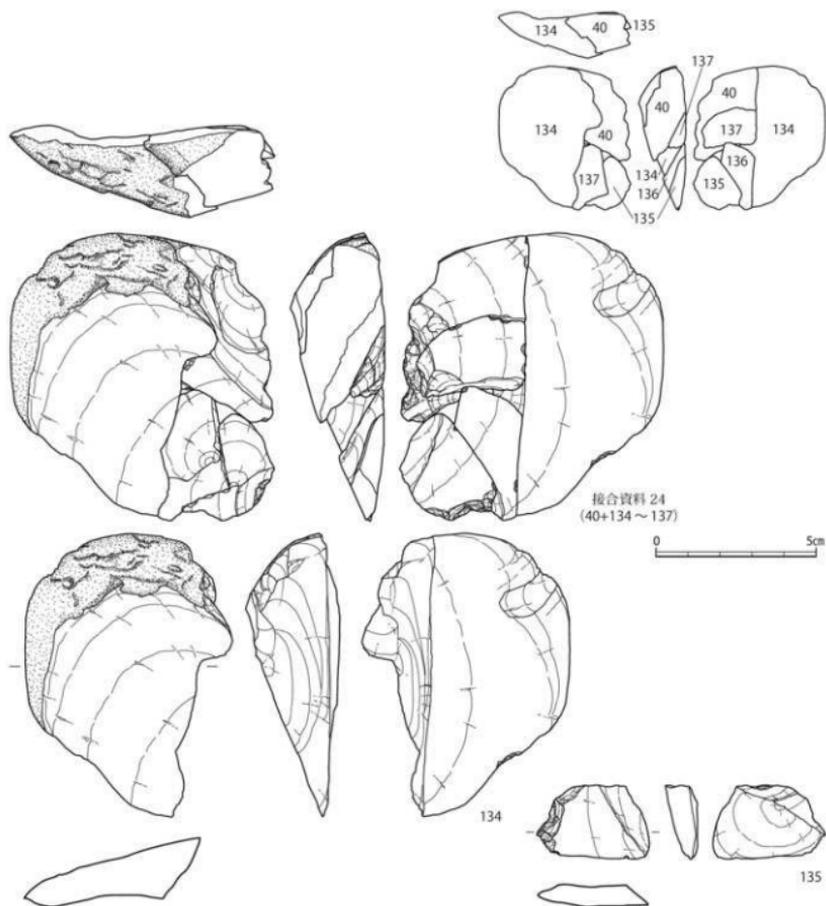


第45図 A地点 旧石器時代第II期石器実測図28 (S=2/3)

ホルンフェルスII類



第46図 A地点 旧石器時代第II期石器実測図29 (S=2/3)



第47図 A地点 旧石器時代Ⅱ期石器実測図30 (S=2/3)

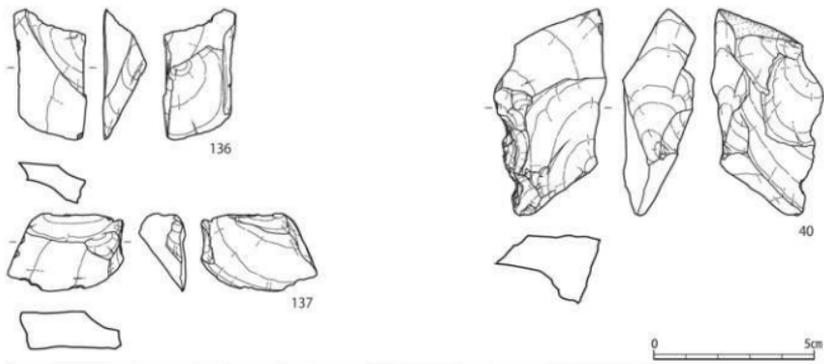
ホルンフェルスⅢ類 (第44図・第48図)

ホルンフェルスⅢ類は、他遺構への流れ込みを含めて18点が確認されており、その内訳は剥片17点、石核1点である。これらの分布はB2グリッド南東側からB3グリッド北側にかけて出土している。

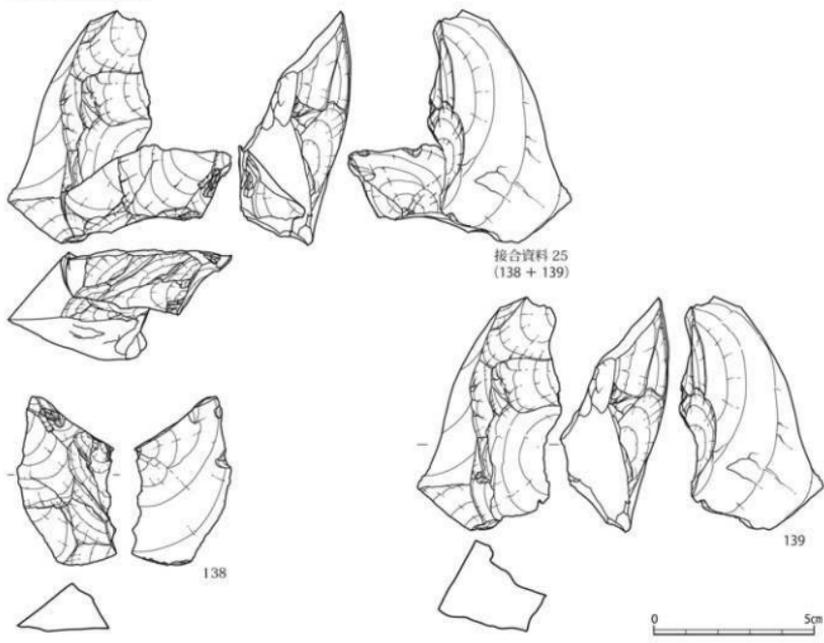
接合資料25(138+139)は剥片(138)と石核(139)の接合例である。138などの剥片を作出した後、139を剥離し、表面より剥片剥離作業を行っている。

頁岩 (第49図・第50図)

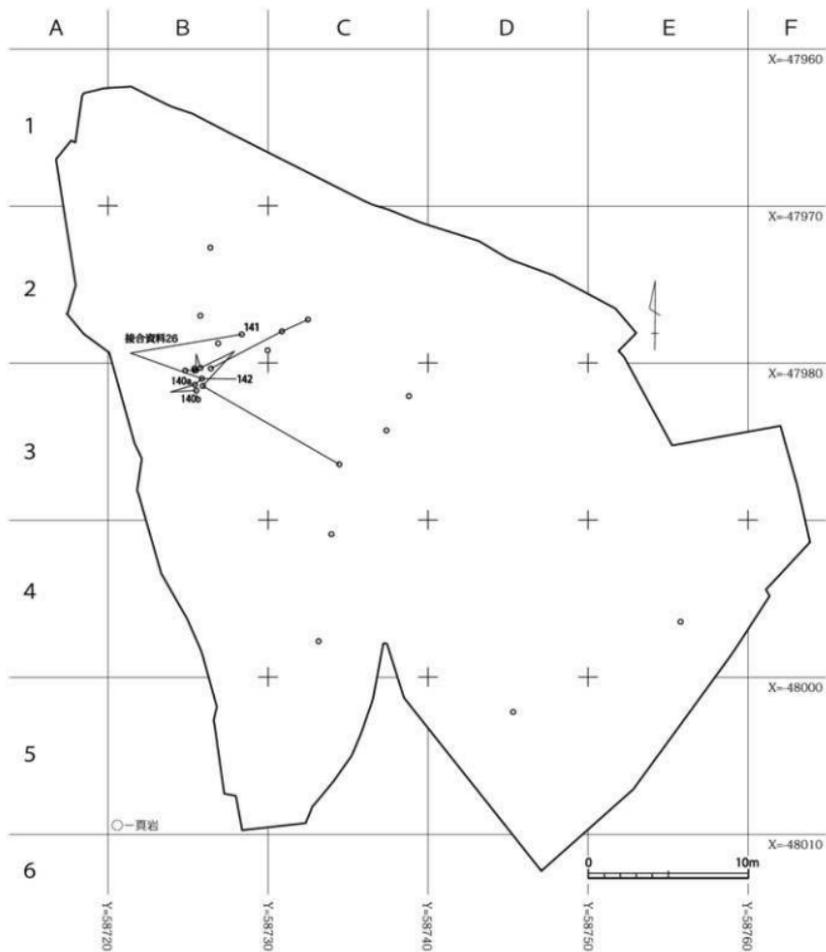
頁岩は他遺構への流れ込みを含めて24点が確認されており、その内訳は二次加工剥片2点、剥片20点、



ホルンフェルスⅢ類

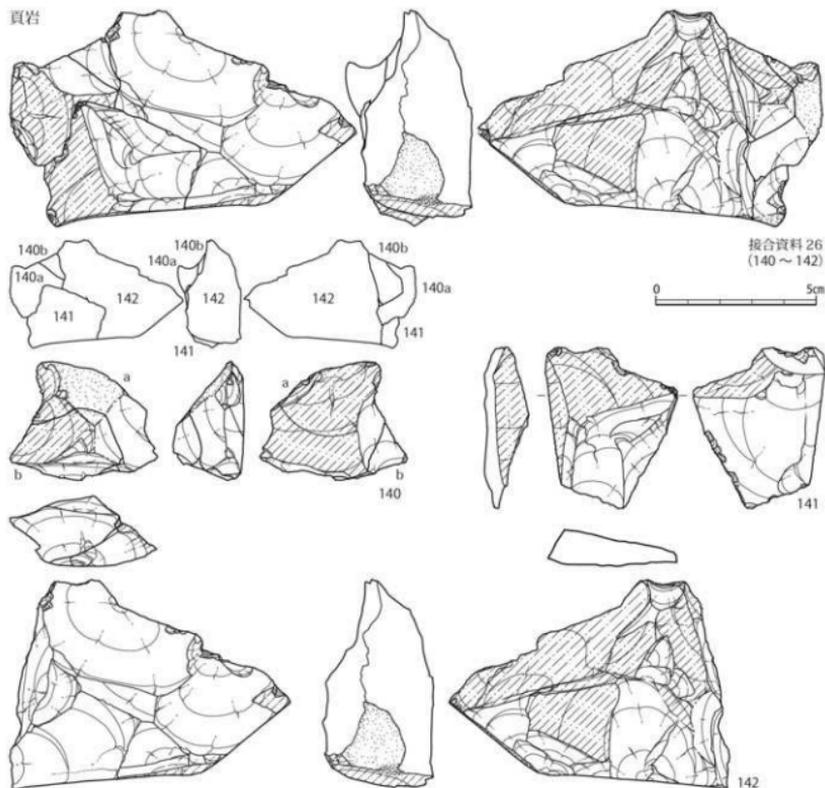


第48図 A地点 旧石器時代第Ⅱ期石器実測図 31 (S=2/3)



第 49 図 A 地点 旧石器時代第 II 期遺物分布図 10 (S=1/300)

頁岩



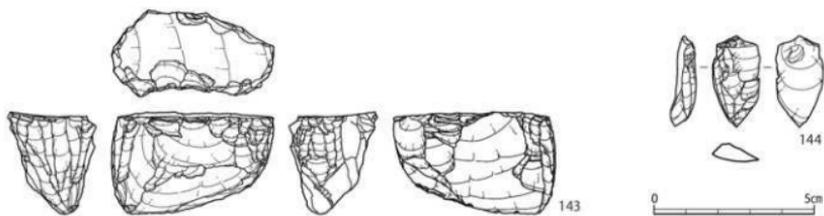
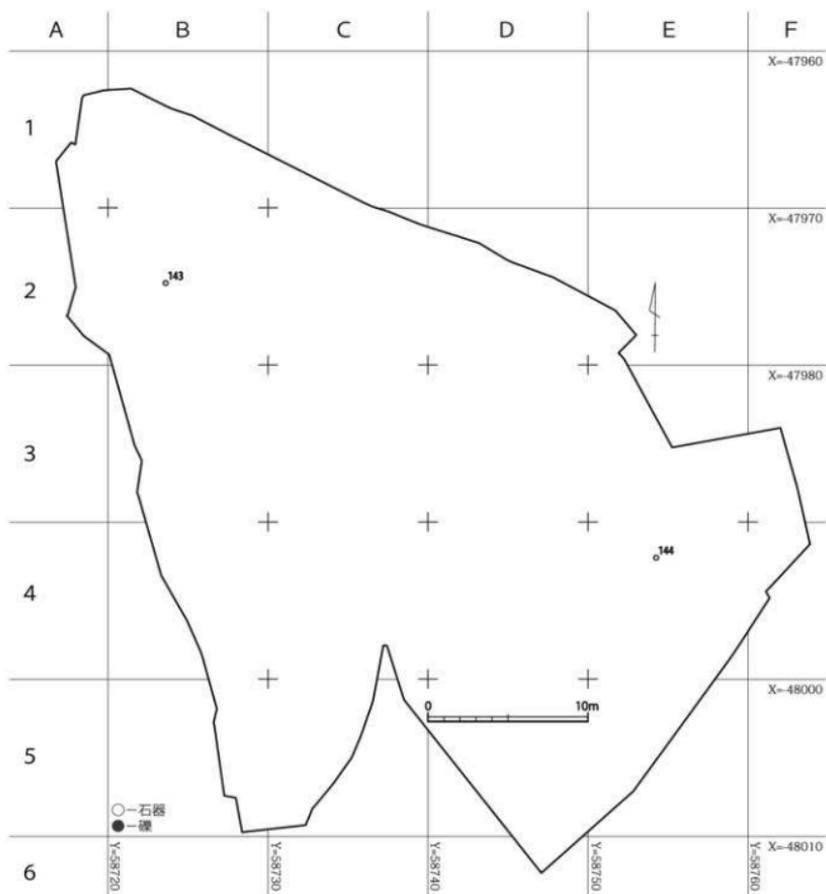
第50図 A地点 旧石器時代第II期石器実測図32 (5=2/3)

石核2点である。これらの分布はB2グリッドからB3グリッド北側を中心にまとめて出土している他、調査区南側まで確認されている。

接合資料26(140~142)は剥片2点(140、141)と石核(142)との接合例である。表面及び裏面を作業面に設定し、求心状に剥片剥離作業を行っている。141、142を剥離する段階では打面を表裏交互に入れ替えながら作業を行っている。

2. 第III期(第51図)

第III期の石器群は細石核(143)と作業面再生剥片(144)の2点がV層で確認されている。利用石材は、143は流紋岩Ic類、144は流紋岩I類である。そのうち143は分割礫の分割面を打面に設定し、打面より側面調整を行い、両端部を作業面として細石刃剥離作業を行っている。なお打面には両側面に剥離痕が認められ、固定痕の可能性が高い。以上の特徴から船野型細石核に相当する。また144は左側面に作業面が認められることや石材等から船野型細石核に伴う作業面再生剥片の可能性が高い。



第 51 図 A 地点 旧石器時代第 III 期遺物分布図 (S=1/300)・石器実測図 (S=2/3)

石材名	特	徴
流紋岩 I	色調が白色～灰色を呈する一部。	
" a	白色～灰色を呈し、なかには明瞭・不明瞭な白色の雲状風化が認められるものや筋が幾度も入るもの等認められる。表面がやや粗いものも多く、複数粒径が認められるもの。風化度の違いにより明瞭さは随分さまざまである。一括した(旧石器時代から縄文時代早期)。	
" b	くすんだ青白色～灰色を呈し、暗褐色影が帯状、斑状に含まれる。礫面は比較的滑らかなのに対し、割断面はざらつきが認められる。新鮮面は黒色を呈している(旧石器時代)。	
" c	白色～黄白色を呈し、明瞭に筋が入るもの(旧石器時代)。	
" d	白色～灰色を呈し、青白色～灰色の筋や筋が入るもの。1cと比べ、光沢がある(旧石器時代から縄文時代早期)。	
" e	白色～灰色を呈し、ゴマ状の筋が多く入るもの(旧石器時代から縄文時代早期)。	
" f	上記の特徴以外のもの(旧石器時代から縄文時代早期)。	
流紋岩 II	色調が暗灰色～黒色を呈する一部。	
" a	暗灰色から黒色を呈し、部分的に白色の筋や灰色の不明瞭な雲状風化が認められる。礫面、礫面には爪状の面が部分的に認められる(旧石器時代)。	
" b	割断面は暗褐色を呈し、部分的に灰白色～灰色の雲状風化や鉄分沈着が認められる。礫面、また礫面には赤い黄褐色をしているが、熱を受けているため、礫面には至る部分に熱線跡が認められる(旧石器時代から縄文時代早期)。	
" c	上記の特徴以外のもの(旧石器時代から縄文時代早期)。	
ホルンフェルス I	割断面は灰白色を呈し、灰色や白色の筋が入る。割断面は粗化が著しく、割面が判別しにくいものも認められる。また他の石材と比べ重量感がない。流紋岩別記類(旧石器時代)。	
ホルンフェルス II	礫面及び割断面は灰オリーブ色からオリーブ黄色を呈し、灰白色の筋が薄く入る。礫面は滑らかなのに対し、割断面は粗化が著しく、ざらつきがあり、粉を吹いた状態の部分も認められる。それに対し、新鮮面は黒色を呈し、緻密である。頁岩起源(旧石器時代)。	
ホルンフェルス III	礫面及び割断面は灰オリーブ色を呈し、部分的に鉄分が沈着する。新鮮面は黒色を呈し、緻密である。頁岩起源(旧石器時代)。	
ホルンフェルス IV	黄色から黄白色を呈し、割断面は粗化が著しく、ざらつきがあり、粉を吹いた状態の部分も認められる。新鮮面は黒色から暗灰色を呈し、緻密である。頁岩起源(旧石器時代から縄文時代早期)。	
ホルンフェルス V	灰色から灰オリーブ色を呈し、割断面は粗化が著しく、ざらつきがあり、粉を吹いた状態の部分も認められる。新鮮面は黒色を呈し、緻密である。頁岩起源(旧石器時代から縄文時代早期)。	
ホルンフェルス VI	上記の特徴以外のもの(旧石器時代から縄文時代早期)。	
チャート I	黒色を基調にしたもので、白色の筋や灰白色の筋等が入るものも認められる(旧石器時代から縄文時代早期)。	
チャート II	青灰色を呈し、なかには暗褐色影が薄く帯状もしくは斑状、白色の筋等に入るものも認められる(縄文時代早期)。	
チャート III	緑灰色を呈し、なかには青灰色が薄く帯状もしくは斑状に入るものが認められる(縄文時代早期)。	
チャート IV	青灰色を呈し、鈍く透ける部分も認められる(縄文時代早期)。	
チャート V	暗青灰色を呈し、白色の筋等に入る(縄文時代早期)。	
チャート VI	青灰色を基調にしたもので、暗色の筋状に入る(縄文時代早期)。	
チャート VII	灰白色を呈し、鈍く透ける部分も認められる(縄文時代早期)。	
チャート VIII	上記の特徴以外のもの(縄文時代早期)。	

第3表 主要石材分類一覧

図面番号	器種	図記番号	出土地点	層位	計測値				石材	備考
					最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)		
1	ナイフ形石器	AM-1970	A・D3	VI	4.65	2.15	0.7	6.15	流紋岩 I a	
2	ナイフ形石器	AM-851	A・R2	VB	4.45	2.2	0.8	5.8	流紋岩 II b	
3	ナイフ形石器	AM-571	A・A2	VI	39	19	1	5.36	流紋岩 I f	
4	ナイフ形石器	AM-2053	A・R2	VI	3.3	1.6	0.45	2.36	流紋岩 I f	
5	ナイフ形石器	AM-1856	A・R2	VI	31.5	21	0.6	3.31	流紋岩 I a	
6	ナイフ形石器	AM-580	A・R2	VI	3.3	1.8	1.85	4.4	流紋岩 I a	
7	ナイフ形石器	A SA-1461	A・SA1	—	3.6	1.95	0.65	3.9	流紋岩 I a	
8	ナイフ形石器	A SC4	A・SC4	—	4.15	2	0.75	4.89	チャート I	
9	ナイフ形石器	AR-2165	A・R2	IX	3	2	0.65	4.02	チャート I	
10	ナイフ形石器	AM-1873	A・R2	VI	3	1.75	0.75	3.6	流紋岩 I a	
11	ナイフ形石器	AM-1865	A・R2	VI	3.2	1.8	0.55	3.5	流紋岩 I a	
12	ナイフ形石器	A 壊断	A	VII	4.8	1.5	0.85	3.8	流紋岩 I a	
13	ナイフ形石器	AM-1818	A・C2	VI	3	1.5	0.45	1.95	流紋岩 I a	
14	ナイフ形石器	AM-1091	A・C4	V	4.1	1.95	0.8	5.4	流紋岩 I a	
15	ナイフ形石器	AM-1712	A・C3	V	3.4	2.35	1.45	6.3	流紋岩 I a	
16	ナイフ形石器	AM-197	A・C3	V	3.3	1.5	1.35	3.6	流紋岩 I a	
17	ナイフ形石器	AM-1917	A・C2	VI	3.1	2.05	0.75	5.4	流紋岩 I a	
18	ナイフ形石器	AM-1863	A・R2	VI	3.2	2.25	0.85	5.2	ホルンフェルス II	
19	ナイフ形石器	A SC4	A・SC4	—	3.35	2.5	1	5.6	ホルンフェルス II	
20	ナイフ形石器	AM-1861	A・R2	VI	3	1.4	1.05	3.9	流紋岩 I a	
21	ナイフ形石器	AM-28	A・R2	V	4.35	1.75	0.95	4.9	流紋岩 I e	
22	ナイフ形石器	AM-1812	A・C2	VI	3.75	1.05	0.85	2.05	流紋岩 I a	
23	ナイフ形石器	A B4 VI 断	A・B4	VI	4.45	3.8	2	24.7	流紋岩 I a	
24	ナイフ形石器	A S3-2	A・S3	VI	3.9	4.8	1.7	25.1	流紋岩 I a	

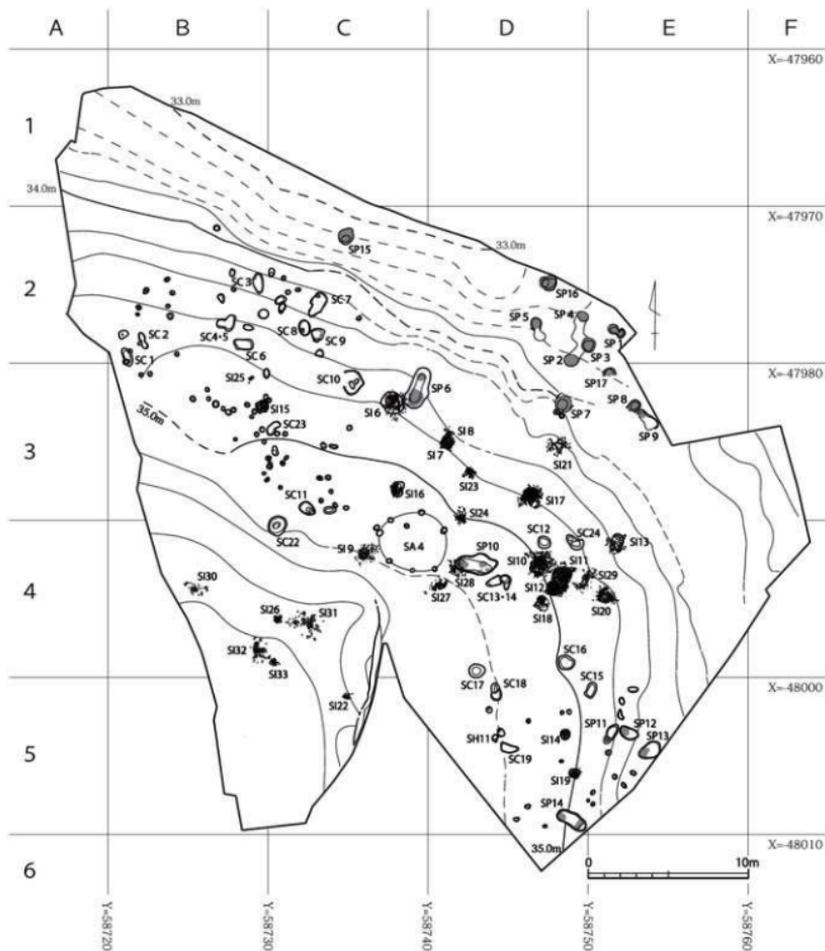
第4表 A地点 旧石器時代石器計測表1

図面 番号	器 種	注記番号	出土 地点	層位	計 測 値				石 材	備 考
					最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)		
25	角礫状石器	A V-258	A・C2	V	6.4	2.5	1.65	25.51	流紋岩 I a	
26	角礫状石器	AⅡ-830	A・B2	ⅡB	9.6	3.1	2	60.475	ホルンフェルスⅡ	
27	スクレイパー	AⅡ-855	A・A1	ⅡB	6.2	5.65	1.95	64.5	流紋岩 I a	
28	スクレイパー	AⅡ-587	A・B2	Ⅱ	4	4.5	1.4	22.6	流紋岩 I a	
29	スクレイパー	AⅡ-2150	A・A2	ⅡC	6.75	6.05	1.2	60.1	流紋岩 I a	
30	スクレイパー	A 東 次層	A	ⅡC	5.5	3.8	1.2	23.4	流紋岩 I a	
31	スクレイパー	A	—	—	6.8	4.4	1.8	47.7	流紋岩 I a	
32	スクレイパー	AⅡ-271	A・C2	Ⅱ	5.9	2.45	0.85	11.4	流紋岩 I a	
33	スクレイパー	AⅡ-874	A・A1	Ⅱ	5.5	2.65	0.85	9.7	流紋岩 I a	
34	スクレイパー	A V-165	A・A1	Ⅱ	5.4	3.95	1.15	18.2	流紋岩 I e	
35	スクレイパー	AⅡ-600	A・A1	Ⅱ	4.3	2.45	0.8	7.2	流紋岩 I a	
36	スクレイパー	AⅡ-2064	A・B3	Ⅱ	5.7	2.18	1.45	12.2	流紋岩 I b	
37	スクレイパー	AⅡ-574	A・B2	Ⅱ	5.25	3.7	1.65	30.7	流紋岩 I e	
38	スクレイパー	AⅡ-610	A・A1	Ⅱ	5.55	4.05	1.85	29.8	流紋岩 I b	
39	スクレイパー	AⅡ-561	A・A2	Ⅱ	4.8	3.1	1.2	16.9	流紋岩 I b	
40	スクレイパー	AⅡ-1850	A・C2	Ⅱ	6.55	3.5	2.3	38.3	ホルンフェルスⅡ	接合資料 24
41	二次加工剥片	AⅡ-a-2170	A・B2	ⅡA	6.95	4.3	1.95	46	流紋岩 I a	
42	磨削調整を有する剥片	A 東 B 次層	A	ⅡC	5.45	6.9	1.65	51.1	流紋岩 I a	
43	磨削調整を有する剥片	A V-1190	A・C3	V	7.45	3.2	1.25	21.5	流紋岩 2 b	
44	磨削調整を有する剥片	AⅡ-879	A・B2	Ⅱ	5.95	1.8	0.7	6.1	流紋岩 I b	
45	磨削調整を有する剥片	AⅡ-1888	A・B2	Ⅱ	6.4	4.95	2.1	37	流紋岩 I a	
46	磨削調整を有する剥片	AⅡ-876	A・A2	Ⅱ	7.9	5.3	1.8	34.1	流紋岩 I a	
47	磨削調整を有する剥片	A V-275	A・C2	V	5.65	4.05	1.1	29.6	流紋岩 I a	
48	磨削調整を有する剥片	A 1 期	A	I	3.15	2.6	0.85	4.7	流紋岩Ⅱb	
49	剥片	A 東 A 次層	A	ⅡC	9.85	4.95	2.2	89	流紋岩 I e	
50	剥片	AⅡ-2148	A・A2	ⅡC	7.65	3.5	0.9	15.3	流紋岩 I a	
51	石核	AⅡ-603	A・A1	Ⅱ	7.6	6.34	5.7	404.01	流紋岩 I e	
52	石核	A V-688	A・E4	Ⅱ	7.5	8	3.6	155.97	流紋岩 I a	
53	石核	AⅡ-883	A・A1	Ⅱ	6.55	4.7	2.45	70.3	流紋岩 I a	
54	石核	AⅡ-867	A・A1	Ⅱ	6.4	4.6	3.5	99.66	流紋岩 I a	
55	石核	AⅡ-1899	A・B2	Ⅱ	6.65	4.89	2.36	69.5	流紋岩 I b	
56	石核	A 次層	A	ⅡC	3.05	6.15	2.95	55.2	流紋岩 I d	
57	石核	AⅡ-1918	A・B2	Ⅱ	6.2	4.25	1.9	42	流紋岩 I a	
58	石核	AⅡ-882	A・B3	Ⅱ	6.65	3.65	2	37.2	流紋岩 I a	
59	石核	A B4 Ⅱ期	A・B4	Ⅱ	8.35	5.2	2.3	82.5	ホルンフェルスⅡ	
60	石核	AⅡ-2071	A・B2	Ⅱ	6.3	3.2	1.95	53.4	流紋岩 I a	
61	石核	AⅡ-2123	A・C4	Ⅱ	6.95	5.85	2.45	80.2	安山岩	
62	磨石	AⅡ-542	A・B2	Ⅱ	7.95	4.9	3.6	207.3	凝灰岩	
63	磨石	AⅡ-631	A・B2	Ⅱ	7.55	6.75	4.15	303.8	凝灰岩	
64	磨石	Ⅱa 層	A	ⅡB	5.5	4.9	3.6	141.8	流紋岩 I a	
65	磨石	AⅡ-566	A・A2	Ⅱ	9.95	4.7	3.4	235.8	砂岩	
66	台石	AⅡ-551	A・B2	Ⅱ	24.05	18.5	6.8	4300	砂岩	
67	台石	AⅡ-541	A・B2	Ⅱ	21.55	22	9.05	5350	砂岩	
68	剥片	AⅡ-1814 A 3C9	A・C2	Ⅱ	5.15	5	1.4	30.7	流紋岩 I a	接合資料 1
69	剥片	A 2037 A 3C9	A・C2	Ⅱ	5.15	2.85	1.2	9.6	流紋岩 I a	接合資料 1
70	剥片	AⅡ-1930	A・C2	Ⅱ	4.4	2.05	0.9	5.9	流紋岩 I a	接合資料 1
71	剥片	AⅡ-2038	A・C2	Ⅱ	5.4	3.1	1.4	18.6	流紋岩 I a	接合資料 1
72	剥片	AⅡ-1820	A・C2	Ⅱ	3.9	2.6	0.7	5.3	流紋岩 I a	接合資料 1
73	剥片	AⅡ-1843	A・C2	Ⅱ	5.3	4.45	1.45	30.2	流紋岩 I a	接合資料 1
74	剥片	AⅡ-1831	A・C2	Ⅱ	4.0	4.55	1.4	18.4	流紋岩 I a	接合資料 1
75	剥片	AⅡ-1835	A・C2	Ⅱ	4.6	3.65	1.4	15.7	流紋岩 I a	接合資料 1
76	剥片	AⅡ-1844	A・C2	Ⅱ	5.2	3.9	1.3	27	流紋岩 I a	接合資料 2
77	剥片	AⅡ-1892	A・B2	Ⅱ	5.2	3.9	1.3	27	流紋岩 I a	接合資料 2
78	石核	AⅡ-1896	A・B2	Ⅱ	4.7	5	5.2	107.6	流紋岩 I a	接合資料 2
79	剥片	AⅡ-2085	A・C3	Ⅱ	4.35	4.7	1.7	26.8	流紋岩 I a	接合資料 3
80	剥片	AⅡ-1997	A・D4	Ⅱ	5.0	2.7	0.95	8.1	流紋岩 I a	接合資料 3
81	剥片	AⅡ-1913	A・C2	Ⅱ	3.55	4.6	1.3	21.5	流紋岩 I a	接合資料 3
82	石核	AⅡ-1998	A・D4	Ⅱ	5.85	5.1	2.1	85.6	流紋岩 I a	接合資料 3
83	剥片	AⅡ-866	A・A1	Ⅱ	4.9	2.75	0.85	8.4	流紋岩 I a	接合資料 4
84	剥片	AⅡ-597	A・B1	Ⅱ	4.55	4.75	1.2	18.8	流紋岩 I a	接合資料 4
85	剥片	AⅡ-581	A・B2	Ⅱ	4.2	3	0.75	8.7	流紋岩 I a	接合資料 5

第 5 表 A 地点 旧石器時代石器計測表 2

図面 番号	器 種	注記番号	出土 層位	層位	計 測 値				石 材	備 考
					最大径 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)		
86	銅片	A M-591	A・B1	Ⅵ	5.05	3.3	1.05	13.7	流紋岩 I a	接合資料 5
87	銅片	A M-567	A・A2	Ⅵ	2.2	2.1	0.5	1.4	流紋岩 I a	接合資料 6
88	石核	A Ⅷ-2177 + A Ⅷ-842	A・B2	Ⅷ	7.3	5.85	1.25	60.6	流紋岩 I a	接合資料 6
89	銅片	A M-1973	A・D3	Ⅵ	4.4	6.75	2.5	55.78	流紋岩 I a	接合資料 7
90	石核	A M-1974	A・D3	Ⅵ	5.2	5.65	3.1	65.27	流紋岩 I a	接合資料 7
91	熊鷹脚鎌先付石銅片	A M-552	A・B2	Ⅵ	4.7	3.85	1.6	16.7	流紋岩 I b	接合資料 8
92	銅片	A M-548	A・A2	Ⅵ	6.05	4.25	1.2	28.8	流紋岩 I b	接合資料 8
93	熊鷹脚鎌先付石銅片	A M-593	A・B1	Ⅵ	4.45	4.95	2.15	16.9	流紋岩 I b	接合資料 8
94	熊鷹脚鎌先付石銅片	A M-534	A・B2	Ⅵ	4.45	4.2	1.1	13.1	流紋岩 I b	接合資料 8
95	銅片	A S A-156 + A M-1822 + A M-1890	A SA1	—	3.15	2.4	0.8	3.7	流紋岩 I b	接合資料 9
96	石核	A・C2・B2	A	Ⅴ	4.55	6.1	1.9	52.8	流紋岩 I b	接合資料 9
97	銅片	A Ⅷ-839	A・B2	Ⅷ	5.5	2.95	1.7	15.9	流紋岩 I b	接合資料 10
98	銅片	A M-549	A・A2	Ⅵ	5.05	3.05	1.3	13.6	流紋岩 I b	接合資料 10
99	銅片	A M-864	A・B1	Ⅵ	4.8	8.25	1.55	61	流紋岩 I c	接合資料 11
100	銅片	A M-891	A・A1	Ⅵ	4.1	5.15	1.25	13.7	流紋岩 I c	接合資料 11
101	銅片	A M-865	A・B1	Ⅵ	5.1	6.9	1.2	22.1	流紋岩 I c	接合資料 11
102	銅片	A Ⅷ-846	A・A1	Ⅷ	5.3	6.05	2.05	65.2	流紋岩 I c	接合資料 12
103	石核	A M-860	A・B1	Ⅵ	7.6	5.6	5.7	216	流紋岩 I c	接合資料 12
104	銅片	A V-111	A・B2	V	8.4	7.85	2.5	140.5	流紋岩 II a	接合資料 13
105	銅片	A I Ⅷ	A	I	5.65	5.5	1.75	37.8	流紋岩 II a	接合資料 13
106	熊鷹脚鎌先付石銅片	A V-113	A・B2	V	4.75	5.05	1.8	45.5	流紋岩 II a	接合資料 13
107	石核	A V-79	A・C2	V	6.05	9.35	7.45	512.5	流紋岩 II a	接合資料 13
108	銅片	A Tr16 Ⅷ類	A	Ⅶ	7.65	6	3.4	113.05	流紋岩 II a	接合資料 14
109	石核	A-112	A・B2	V	8.5	7.3	7.1	599.93	流紋岩 II a	接合資料 14
110	銅片	A V-164	A・B2	V F	6.8	7.3	1.5	76.5	流紋岩 II b	接合資料 15
111	銅片	A V-802	A・C3	V	4.3	6.2	3.8	78.1	流紋岩 II b	接合資料 15
112	銅片	A M-543	A・B2	V F	6.55	3.65	2.75	49.4	流紋岩 II b	接合資料 15
113	銅片	A M-562	A・A2	Ⅵ	11	5.4	2.5	96.2	流紋岩 II b	接合資料 16
114	銅片	A V-185	A・B2	V F	7.55	3.9	1.45	28.3	流紋岩 II b	接合資料 16
115	銅片	A SE2	A・SE2	—	5.65	4.8	1.25	31	流紋岩 II b	接合資料 16
116	銅片	A V-174	A・B2	V F	8	7.3	2.55	149.6	流紋岩 II b	接合資料 16
117	銅片	A M-857	A・B2	V F	5.6	2.55	1.35	17.4	流紋岩 II b	接合資料 17
118	銅片	A V-187	A・B2	V F	6.5	4.3	2	32.8	流紋岩 II b	接合資料 17
119	銅片	A V-175	A・B2	V F	8.05	3.55	4	63.6	流紋岩 II b	接合資料 18
120	石核	A M-633	A・B2	V F	5	5.1	2.95	40.7	流紋岩 II b	接合資料 18
121	銅片	A M-1859	A・B2	Ⅵ	6	3.7	1.3	25.6	安山岩	接合資料 19
122	銅片	A M-1933	A・B2	Ⅵ	5.1	5.38	1.75	37.3	安山岩	接合資料 19
123	銅片	A SC6	A・SC6	—	5.2	2.8	1.2	11.5	安山岩	接合資料 19
124	石核	A C4 Ⅷ類	A・C4	Ⅶ	7.75	7.4	3	166.3	安山岩	接合資料 19
125	銅片	A M-1864	A・B2	Ⅵ	5	3.2	1.35	16.9	安山岩	接合資料 20
126	石核	A M-1858	A・B2	Ⅵ	8.2	8	2.55	147.8	安山岩	接合資料 20
127	銅片	A M-607	A・A1	Ⅵ	4	3.1	0.95	6	ホルンフェルス I	接合資料 21
128	銅片	A M-628	A・A1	Ⅵ	3.15	3.35	0.8	5.3	ホルンフェルス I	接合資料 21
129	石核	A M-622	A・A1	Ⅵ	6.05	9.1	5.15	195.3	ホルンフェルス I	接合資料 21
130	銅片	A Tr3b Ⅷ類	A トロンゾホ	Ⅷ	3.35	3.25	1.25	10.2	ホルンフェルス II	接合資料 22
131	スラレイバー	A Ⅷ B 改類	A Ⅷ	Ⅶ	7.5	6.2	2.75	90	ホルンフェルス II	接合資料 22
132	銅片	A M-630	A・B3	Ⅵ	5.5	2.3	1.05	10.5	ホルンフェルス II	接合資料 23
133	石核	A SG1-4	A・SG1	—	8.8	4.5	2.6	86.8	ホルンフェルス II	接合資料 23
134	石核	A M F-128	A・B3	Ⅶ F	9.05	6.45	2.95	96.6	ホルンフェルス II	接合資料 24
135	銅片	A M-1857	A・B2	Ⅵ	2.35	3.5	1	6.9	ホルンフェルス II	接合資料 24
136	銅片	A M-2045	A・C2	Ⅵ	4.15	2.3	1.35	7.7	ホルンフェルス II	接合資料 24
137	銅片	A M-1848	A・C2	Ⅵ	2.5	3.6	1.45	10	ホルンフェルス II	接合資料 24
138	銅片	A SH2	A・SH2	—	5.4	3.1	1.5	20.72	ホルンフェルス II	接合資料 25
139	石核	A M-1935	A・B3	Ⅵ	7.4	4.5	3.4	61.12	ホルンフェルス II	接合資料 25
140	銅片	A M-134+ A M-135	A・B3	Ⅵ	3.8	4.6	2.25	30.6	頁岩	接合資料 26
141	銅片	A M-1854	A・B2	Ⅵ	5.15	4.15	1.4	20	頁岩	接合資料 26
142	石核	A M-881	A・B3	Ⅵ	6.6	8.65	3.45	113.2	頁岩	接合資料 26
143	曜石核	A V-181	A・B2	V	3.25	5.1	2.75	99.67	流紋岩 I d	
144	打面両面銅片	A V-472	A・E4	V	2.9	1.55	0.7	2.6	流紋岩 I a	

第 6 表 A 地点 旧石器時代石器計測表 3



第52図 A地点 縄文時代早期遺構分布図(S=1/300)

第2節 縄文時代～弥生時代

1. 縄文時代早期の遺構と遺物

(1) 遺構

遺構は平地式住居跡1軒、集石遺構28基、炉穴16基、土坑22基が確認されている。集石遺構は主にV層中で検出し、その他の遺構はVI層上面にて確認した。

平地式住居跡（S A）（第53図）

確認された柱穴は70基を及び、A地点の北西部から南東部にかけて分布する。これら柱穴群はI群（B2グリッドからC3グリッド西半分）、2群（C3グリッド南東部からD4グリッド北西部）3群（D5グリッドからE5グリッド）の3群に分けることができ、そのうち2群では柱穴が楕円形に一定の間隔で巡ることから平地式住居跡と認定した。ただし、この周辺は散礫や遺物等がかなり密な状態で確認されており、散礫形成時に堅穴自体が削平・もしくは消失した可能性等も考えられる。また1群では柱穴が弧状に巡る部分も認められ、平地住居跡の可能性も考えられる。

S A 4は、長軸4.27 m、短軸3.25 mを測り、平面積は12.654㎡である。柱穴は、1.36 m～2.52 m間隔（平均1.75 m）に7基が楕円形状に配置されている。各柱穴は0.27 m～0.42 mの円形から楕円形プランを呈し、深さ0.28 m～0.47 mを測る。なお、柱穴列内部北側には柱穴が30cm規模の柱穴が認められ、支柱穴の可能性が考えられるが対になる柱穴は確認できていない。

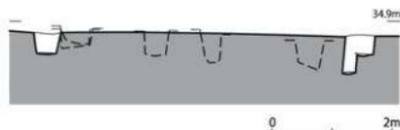
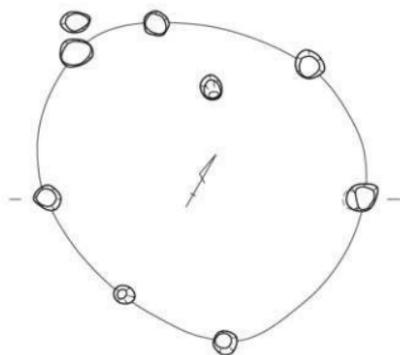
散礫（第54図）

A地点で確認された礫は18,619点、総重量2,365kgにも及ぶ。これらの礫にはV層上位～下位近くまで出土し、その分布は大きく2群（23号集石遺構（S I 23）を中心とする約17 mの範囲とB4グリッドを中心とする約8 mの範囲）に分かれるものの、後世の削平等を考えると、おそらくは調査区全体にまで散礫が及んでいた可能性も十分想定できる。

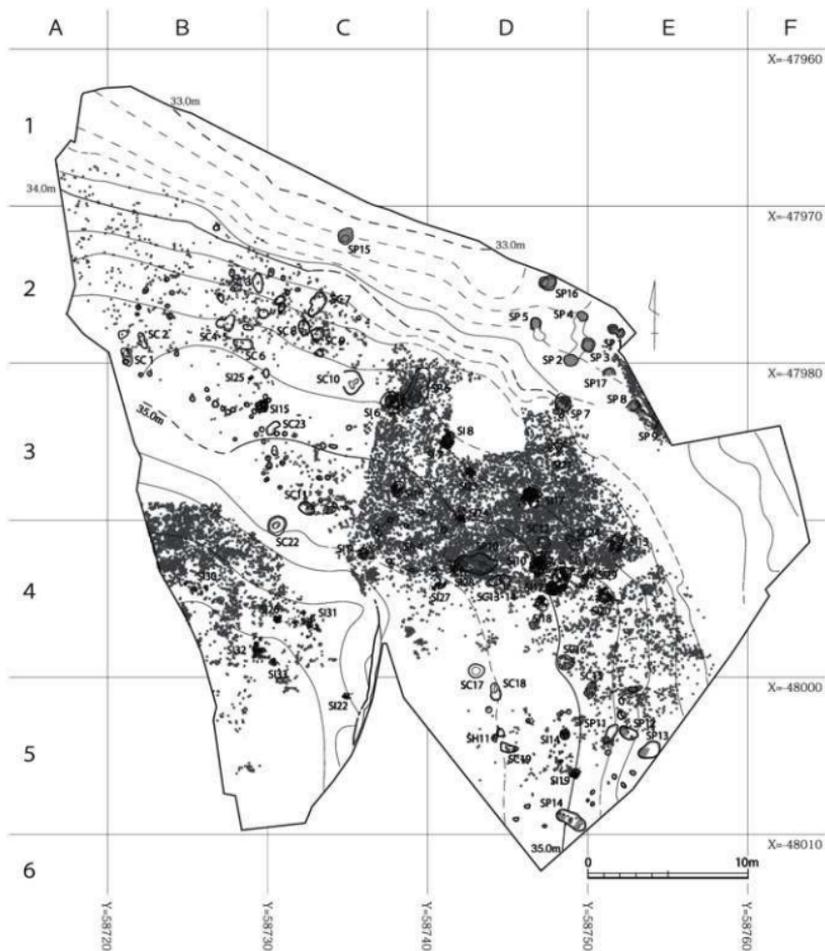
利用石材は砂岩やホルンフェルス、溶結凝灰岩、凝灰岩、チャート、流紋岩、頁岩等があり、多くが非熱し、赤化している状態で確認されている。なお、旧A地点（平成12・13年度調査）での利用石材の重量比率では砂岩70%、ホルンフェルス9%、溶結凝灰岩9%、凝灰岩4%、チャート3%、流紋岩2%、頁岩1%、その他2%であり、おそらく全体をみても比率的には変わらないものと考えられる。

集石遺構（S I）（第55図～第59図、第7表）

今回の調査では集石遺構28基が確認されている。その分布は調査区南側の標高35.6 m～35.8 mのラインに沿って分布するもの（S I 22、S I 26、S I 30～S I 33）と緩やかに傾斜する部分（標高35.6 m～35.4 mのライン）に分布するもの（S I 6～S I 21、S I 23・S I 24、S I 27～



第53図 A地点 平地住居跡（S A 4）実測図（S=1/40）

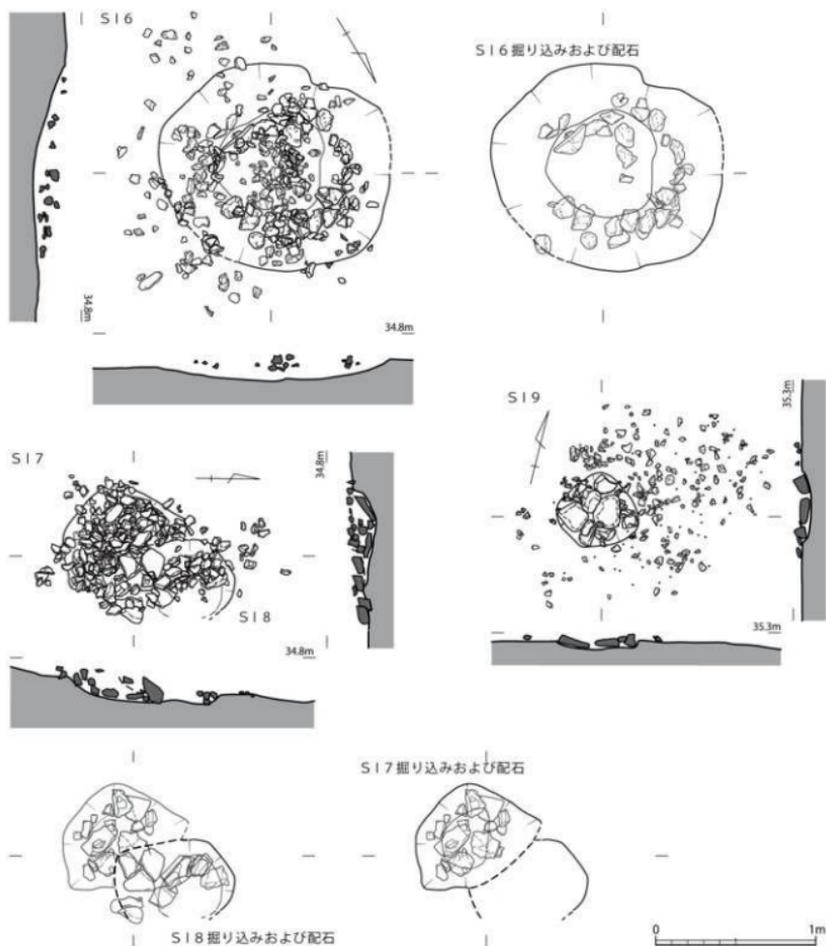


第54図 A地点 散磔分布図 (S=1/300)

SI 29)に分かれる。そのうち前者については、SI 26、SI 31～SI 33、後者ではSI 10～SI 13、SI 18、SI 20、SI 29がそれぞれまとまって確認されている。それ以外はある程度の間隔(1.5m～3.6m)をもって分布している。

また、SI 9、SI 16、SI 24、SI 27、SI 28は平地住居跡を取り囲むように分布している。なお、SI 28はSP 10と切り合うが、SP 10が埋没後、その上で構築されている。

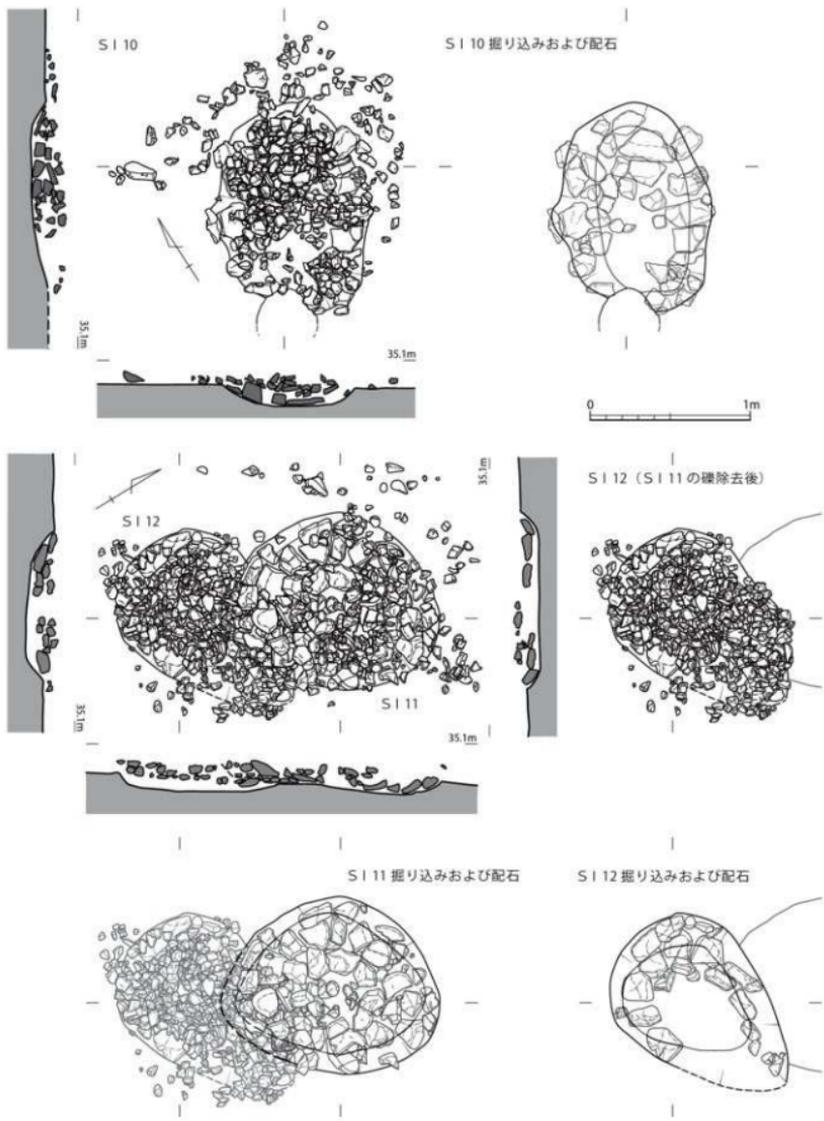
集石遺構は掘り込みの有無により大別でき、磔の配置及び密集度等から以下のように分類できる。



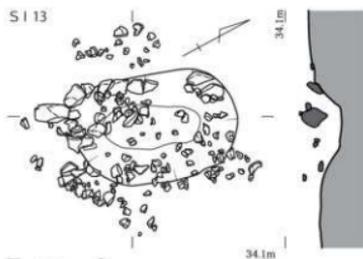
第55図 A地点 集石遺構(SI)実測図1(S=1/30)

I類は掘り込みを有し、掘り込み内に配石が認められるもので、S I 6～S I 15の10基が該当する。掘り込みは、いずれも楕円形を呈し、規模では長軸が0.45m～0.76m規模(S I 7～S I 9)のものと1mを超えるもの(S I 6、S I 10～S I 13)に分かれる。また深さは6cm～18cmであり、S I 9とS I 14の2基のみ10cm以下である。

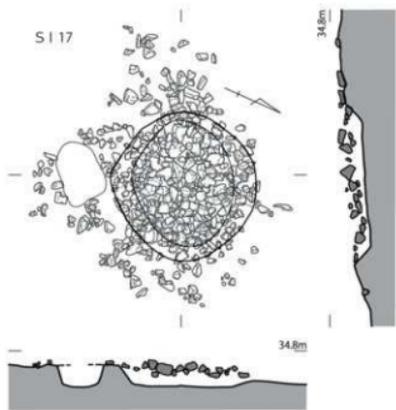
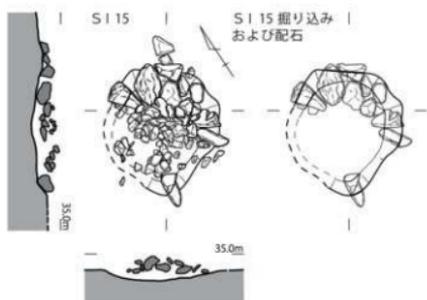
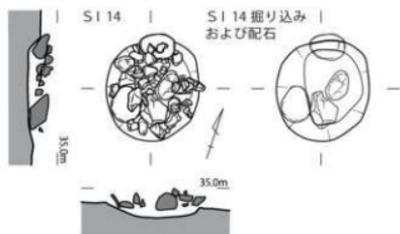
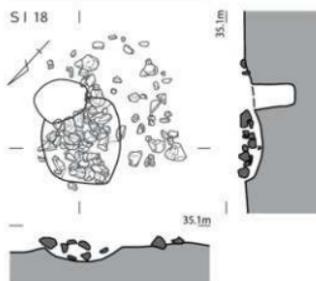
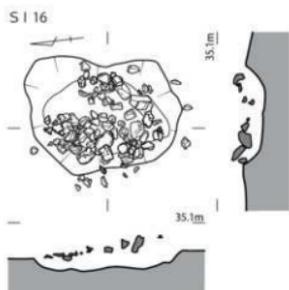
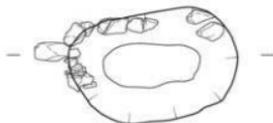
配石は主に扁平な砂岩や板状の凝灰岩を利用しており、S I 9やS I 7、S I 12のように掘り込み全体に配置されるものやS I 6やS I 10、S I 11、S I 13、S I 15のようにU字形に配置されて



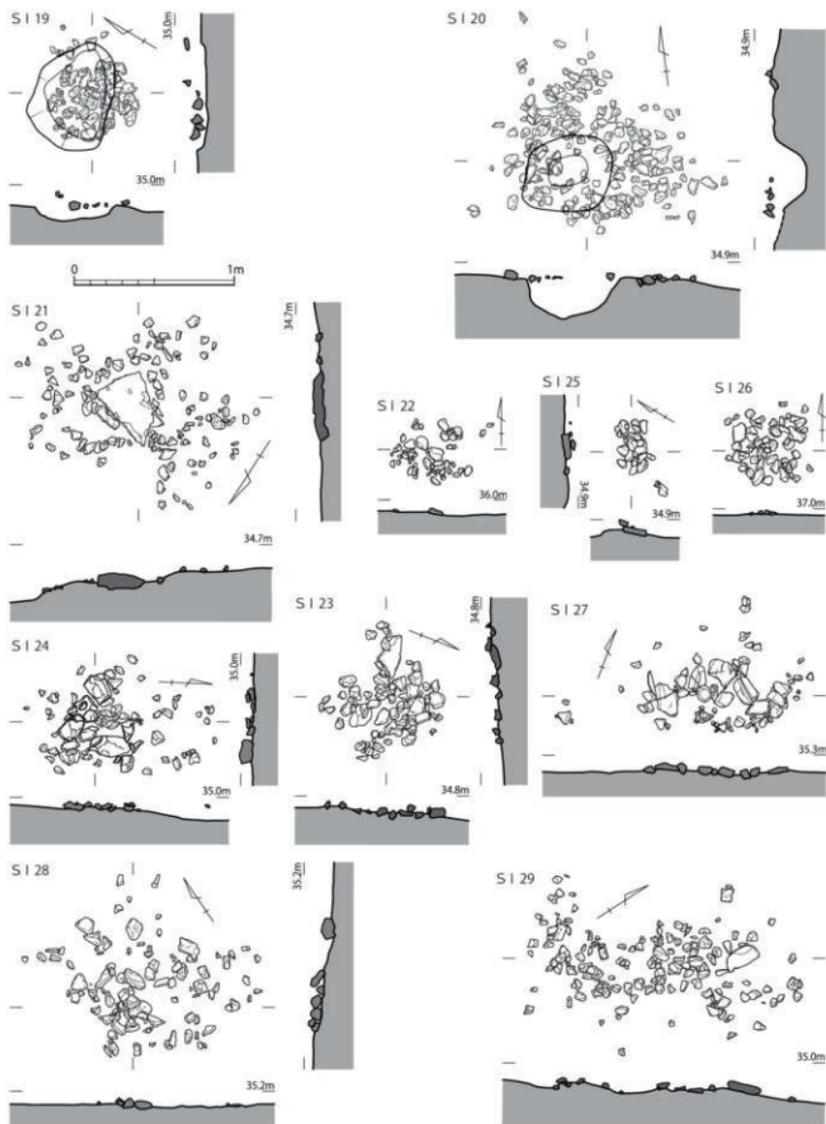
第56図 A地点 集石遺構 (S1) 実測図2(S=1/30)



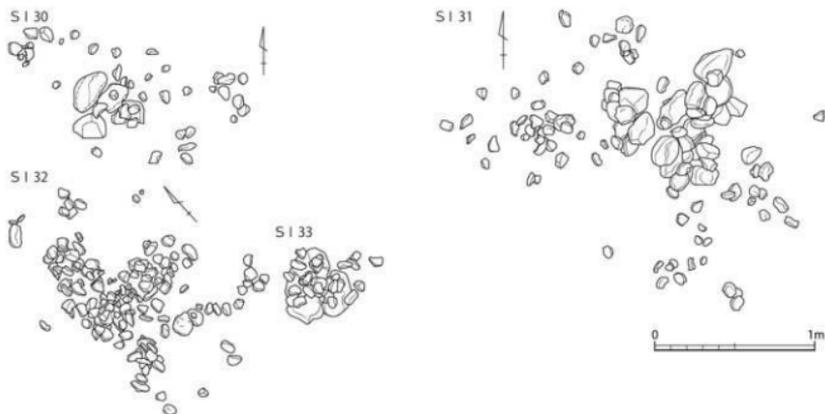
S113 掘り込みおよび配石



第57図 A地点 集石遺構(S1)実測図3(S=1/30)



第58图 A地点 集石遺構 (S1) 実測図4(S=1/30)



第59図 A地点 集石遺構 (S1) 実測図5(S=1/30)

いるもの等がある。そのうち、U字形のものについては、S111以外は上部礫が散漫なものが多く、意識的に抜き取り、他の集石遺構に使用された可能性も考えられる。

利用石材は砂岩やホルンフェルス、溶結凝灰岩、凝灰岩、チャート、流紋岩 (S110、S115のみ)、頁岩、泥岩 (S116、S115のみ) 等が認められ、そのうち砂岩についてはS115が9割近くを占めるのに対し、その他は5割~7割の範囲に入る。以下、溶結凝灰岩、凝灰岩、ホルンフェルス、頁岩、チャートの順番となる。

Ⅱ類は掘り込みを有し、掘り込み内に配石が認められないものの、礫が密集するもので、S116~S120が5基該当する。掘り込みの平面形はすべて楕円形を呈し、長軸が0.56m~0.96m、短軸は0.5m~0.91mとばらつきが認められる。深さは9cm~12cmと浅いものが多いが、S120のように26cmと他と比べ深いものもある。礫はS118やS119のように底面近くまで入る以外は、掘り込みの上方から掘り込み外に広がるものが多い。

利用石材は砂岩、ホルンフェルス、溶結凝灰岩、凝灰岩、チャート、流紋岩 (S119のみ)、泥岩 (S117、S118以外)、頁岩等が認められ、そのうち砂岩についてはS120以外のものは6割~8割を占める。S120は凝灰岩が約4割を占め、砂岩は1割半と割合が逆転する。

Ⅲ類は掘り込みを持たないものの、配石が認められるものでS121、S124、S127、S130、S133の5基が含まれる。S133の礫の範囲が0.6m規模に対して、他は1mを超える。配石以外の礫は大半が破碎礫で構成されている。石材は砂岩、ホルンフェルス、溶結凝灰岩、凝灰岩、チャート、流紋岩、泥岩、頁岩等が利用されている。

Ⅳ類は掘り込みを持たず、構成される礫が密集するもの。S122、S123、S125、S126、S128、S129、S131、S132の8基が該当する。礫の範囲は0.5m~0.66m規模のもの (S122、S125、S126) と0.9m規模のもの (S123)、1.5m以上 (S128、S129、S131、S132) に分かれる。石材は砂岩、ホルンフェルス、溶結凝灰岩、凝灰岩、チャート、流紋岩、泥岩、頁岩等が利用されている。

遺構内出土遺物は、約3割の遺構で確認されている。土器は無文土器が多く、石器の多くが剥片類が出土しているが、S19で打製石鎌が出土している。

No	遺構 番号	層 位	調査区 (方位)	分類	出土遺物	礎の範囲 長さ×幅 (m)	掘り込み規模 長さ×幅×深さ (m)	礎礎 個数	礎重量 (kg)	礎の 密度	配石 有無	炭化物 有無	備考
1	S86	V	A C3	I	-	2.03 × 1.79	1.47 × 1.37 × 0.12	268	45.4	疎	○	○	礎は赤化が著しく、9割が破砕礎。配石は7～26cmの砂岩や凝灰岩が状況に依存。炭化物を少量含む。
2	S17	V	A D3	I	土器・石器	0.76 × 0.6	0.76 × 0.6 × 0.18	259	65.9	密	○	○	2基の切り合い。前後階層については、石の配置等からS18(五)→S17(新)となる。定から土層炭化物が若干認められ、炭化物を少量含む。
3	S18	V	A D3	I	-	0.57 × 0.53	0.64 × a × 0.47 × a × 0.12	-	-	密	○	○	礎は赤化が著しく、9割が破砕礎。配石は主に15～25cmの凝灰岩を利用している。なお、S18はS A 2 (古墳時代)に切られている。
4	S89	V	A C4	I	土器・石器 (掘り込み外)	1.55 × 1.17	0.45 × 0.45 × 0.06	129	35.3	疎	○	○	掘り込みは浅く、若干凹凸程度。配石は主に砂岩(7点:15～30cm)で構成。炭化物を少量含む。掘り込み外に散見される礎はすべて破砕礎である。
5	S110	V	A D4	I	-	1.86 × 1.84	1.35 × 0.99 × 0.12	490	152	密	○	○	礎は赤化が著しく、9割が破砕礎。配石は8～38cmの凝灰岩の凝灰岩が主に利用されている(前期に空白部あり)。前期は時期不明の柱穴に切られる。
6	S111	V	A D4	I	-	1.67 × 1.53	1.28 × 1.13 × 0.1	757	143.5	密	○	○	2基の切り合い。前後階層については、石の配置等からS12(五)→S11(新)となる。配石は主に15～30cmの凝灰岩や砂岩等の扁平な礎を利用している。S12の配石は掘り込み内全体に配置されている。S11の礎は掘り込み外に配置されている。またS11の礎の1点がS12の礎と接合する。
7	S112	V	A D4	I	-	1.54 × 1.14	1.31 × 0.93 × 0.14	-	-	密	○	○	礎は赤化が著しく、9割が破砕礎。配石は8～20cmの凝灰岩の凝灰岩が主に利用されている。掘り込みに対し、礎が浮いた状態で確認されている。
8	S113	V	A E4	I	-	1.54 × 1.18	1.05 × 0.69 × 0.18	125	22	疎	○	○	礎はすべて破砕礎。赤化は全体的に弱い。配石は凝灰岩の凝灰岩(7点)を収め、赤化に依拠。また掘り込みに対し、礎が浮いた状態で確認されている。
9	S114	V	A D5	I	-	1.8 × 0.99	0.63 × 0.58 × 0.08	45	29.8	密	○	○	掘り込みは浅く、若干凹凸程度。礎の9割が破砕礎。20～25cmの礎を配石に使用している。礎はすべて赤化し、特に赤化が著しい。炭化物を若干含む。掘り込みの埋土は1層(短期土)。
10	S115	V	A B3-C3	I	-	0.84 × 0.71	0.5 × 0.47 × a × 0.12	107	41.55	密	○	○	破砕礎の多くは比較的上の層が多い。全体的に赤化が強い。木部により掘り込みの一部が消失している。配石は北側の残りが多い。
11	S116	V	A C3	II	-	0.94 × 0.85	0.96 × 0.75 × 0.11	109	13.1	密	-	○	礎は全体的に赤化が強い。多くが破砕礎で構成されている。また礎の大半が掘り込みの上部で出土している。掘り込みの埋土は黒色土の1層。
12	S117	V	A D3	II	土器	1.75 × 1.62	0.95 × 0.91 × 0.12	99	47.8	密	-	○	礎の9割が破砕礎。赤化は全体的に弱い。炭化物を若干含む。
13	S118	V	A D4	II	石器	0.95 × 0.98	0.56 × 0.49 × 0.11	142	18	密	-	-	時期不明の柱穴に一部切られる。すべて破砕礎(赤化)で構成されている。
14	S119	V	A D5	II	石器	0.71 × 0.66	0.69 × 0.5 × 0.09	119	24.3	密	-	○	掘り込みは浅く、若干凹凸程度。礎の9割が破砕礎。掘り込みより若干深い状態で礎を確認。埋土は黒色土。赤化が著しく、9割が破砕礎。炭化物を少量含む。
15	S120	V	A E3	II	-	1.24 × 1.22	0.63 × 0.5 × 0.26	334	27	密	-	○	礎はほとんど赤化。破砕礎で構成。掘り込みには礎があまり認められず、炭化物は底面付近で多く含まれる。
16	S121	V	A D3	III	石器	1.5 × 1.22	-	175	23.74	密	○	○	45cm幅程度の凝灰岩の層間に破砕礎が確認できる。破砕礎は赤化が著しい。炭化物は若干認められる。
17	S122	V	A C5	IV	-	0.66 × 0.42	-	49	-	密	-	?	礎はすべて赤化した破砕礎(1～8m)で構成されている。
18	S123	V	A D3	IV	土器	0.9 × 0.79	-	84	12.7	密	-	-	礎の9割が破砕礎で構成されている。礎は全体的に赤化している。
19	S124	V	A D3-D4	III	-	1.2 × 0.75	-	116	22.2	密	○	○	礎は破砕礎で構成。全体的に赤化が強い。配石は凝灰岩が利用されており、赤化に依拠している。
20	S125	V	A B3	IV	-	0.95 × 0.27	-	23	4.77	密	-	-	礎の9割が破砕礎で構成。全体的によく赤化しているが、そのうちの約2割は赤化が弱い。
21	S126	V	A C4	IV	-	0.64 × 0.6	-	44	-	密	-	?	礎はすべて赤化している。大半は破砕礎で3～10cmの礎を使用している。
22	S127	V	A C4-D4	III	-	1.22 × 0.87	-	64	11.0	密	○	○	10～20cmの平たい礎(主に凝灰岩)が状況に依拠配置されている。炭化物を少量含む。
23	S128	V	A D4	IV	土器・石器	1.51 × 1.17	-	104	13.6	疎	-	○	完形礎 10 点。他は破砕礎で構成されている。すべての礎が赤化している。
24	S129	V	A D4-E4	IV	-	1.69 × 0.96	-	103	5.4	疎	-	○	礎は赤化が著しく、すべて破砕礎。炭化物を少量含む。礎の1点がS11の礎と接合
25	S130	V	A B4	III	-	1.52 × 0.78	-	46	-	密	○	?	礎はすべて赤化している。配石は10～30cmの扁平な礎で構成されている。その上半周の礎は破砕礎が多い。
26	S131	V	A C4	IV	-	2.03 × 1.58	-	105	-	密	-	?	礎はすべて赤化している。北西部に20cmの完形もしくはそれに近い礎がまとまるのに対し、その周辺は破砕礎が多い。
27	S132	V	A B4-C4	IV	-	1.54 × 1.44	-	137	-	密	-	?	5～15cmの礎を使用している。礎の大半は破砕礎。礎はすべて赤化している。
28	S133	V	A C4	III	-	0.5 × 0.6	-	31	-	密	○	?	礎はすべて赤化。配石は扁平な礎を利用している。上の礎はすべて破砕礎。

第7表 A地点 集石遺構一覧表

炉穴（SP）（第60図・第61図、第8表）

A地点では、炉穴が17基確認されている。そのうち9基は調査区北東部（D2・D3・E2・E3グリッド）で、4基は調査区南東部（D5・E5グリッド）でそれぞれまとまって確認されている。そのうち、約半数が中世の道路状遺構や後世の削平により、炉部のみのもや底面近くまで消失しているものが認められる。

また地形に対し、SP2やSP6、SP10、SP12～SP14は、等高線に対して直交し、地形の高い方に炉部を設定しているが、SP4やSP5のように低い方に炉部を設定しているものやSP1やSP3、SP11、SP9のように等高線に対して並行するものも認められる。

炉穴は、単独で確認されたものが多く、重複しているものがわずかに1群（SP2～SP4）のみである。ただし、SP2～SP4の周辺は他にも炉穴がまとまっていることから、多くは重複していた可能性が考えられる。

炉穴の規模については、1.2m～1.5mのもの（SP9、SP11～SP13）と2mを超えるもの（SP6、SP10、SP14）とがあり、2mを超えるものについては、足場側に焼土掻き出しが認められる。

遺構内出土遺物は、多くの炉穴は遺物が認められず、わずかに焼礫を含む程度である。その中でSP6では貝殻条痕文土器や凹石が確認されている。

土坑（SC）（第62図・第63図、第9表）

A地点では、土坑が22基確認されている。そのうち11基（SC1～SC10、SC23）は調査区北西部、調査区中央で2基（SC11・SC22）、調査区東側で4基（SC12～SC14、SC24）、調査区南東部で5基（SC15～SC19）まとまって分布している。

土坑の形態は、多くが楕円形を呈するがSC2のように中程でくびれ瓢箪形を呈するものや一端に柱穴を有するもの（SC9、SC11）、隅丸長方形（SC6、SC15）等が認められる。遺構同士の切り合いはSC1やSC2、SC7、SC8、SC24が柱穴と、SC4とSC5、SC13とSC14が土坑同士で認められる。

遺構内出土遺物は約6割で認められ、特徴的なものでは、土器ではSC15の燃系文土器の胴部片やSC19の尖底が出土し、石器では、スクレイパーがSC6で確認されている。

これら土坑の性格については、不明瞭であるが、そのうちの一端に柱穴を有するもの（SC9、SC11）については、東和幸氏の言う地下茎植物の採掘の痕跡と考えられる（東2002）。

遺構内出土遺物（第64図145-156）

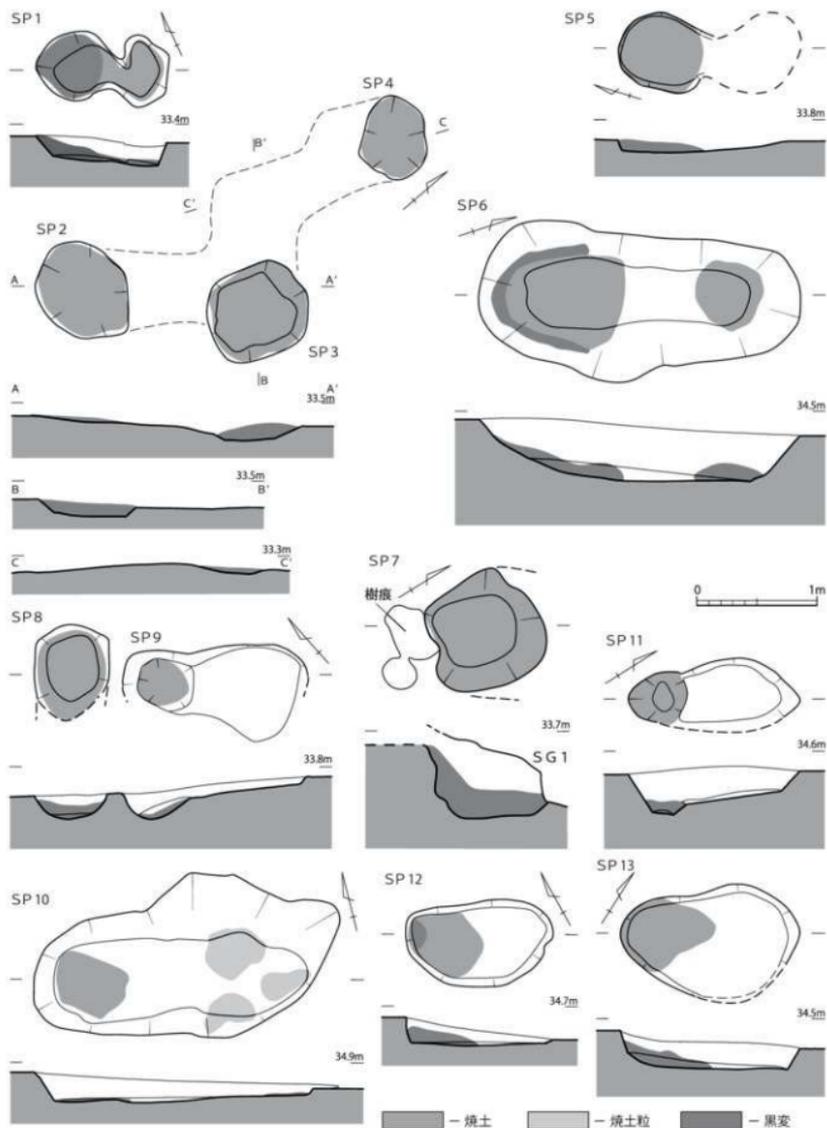
遺構から出土している遺物は全遺構の4割にも満たない。ここでは、特徴的な遺物について、説明していききたい。

145～148は集石遺構内の出土遺物である。いずれも無文土器（VIc類）で、147は底部付近、他は胴部片の資料である。そのうち148はSI28とSC19と接合している。

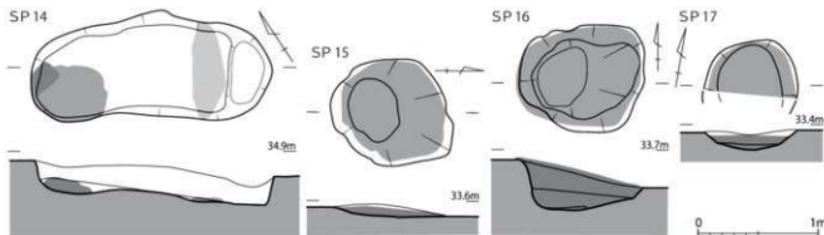
149・150はSP6出土である。そのうち149は口縁部が直口し、器面には貝殻による条痕調整が斜位に施されている。後述するIIc類土器である。

150は凹石である。凝灰岩製、棒状を呈する礫の中央2箇所に敲打による凹みが認められる。また全体的に赤化しており、凹み周辺にはタールが付着している。151はSC6出土のスクレイパーである。頁岩製で、縦長剥片を素材にして左側縁に表面側から連続的に加工を施し、刃部を作出している。

152～154は土坑内出土遺物である。そのうち152はSC15出土である。比較的厚みがあり、器面には燃系文が斜位に施されている。また至るところに二次焼成における剥落が認められる。後述するIIIa類土器である。



第60图 A地点 炉穴(SP)实测图1(S=1/40)



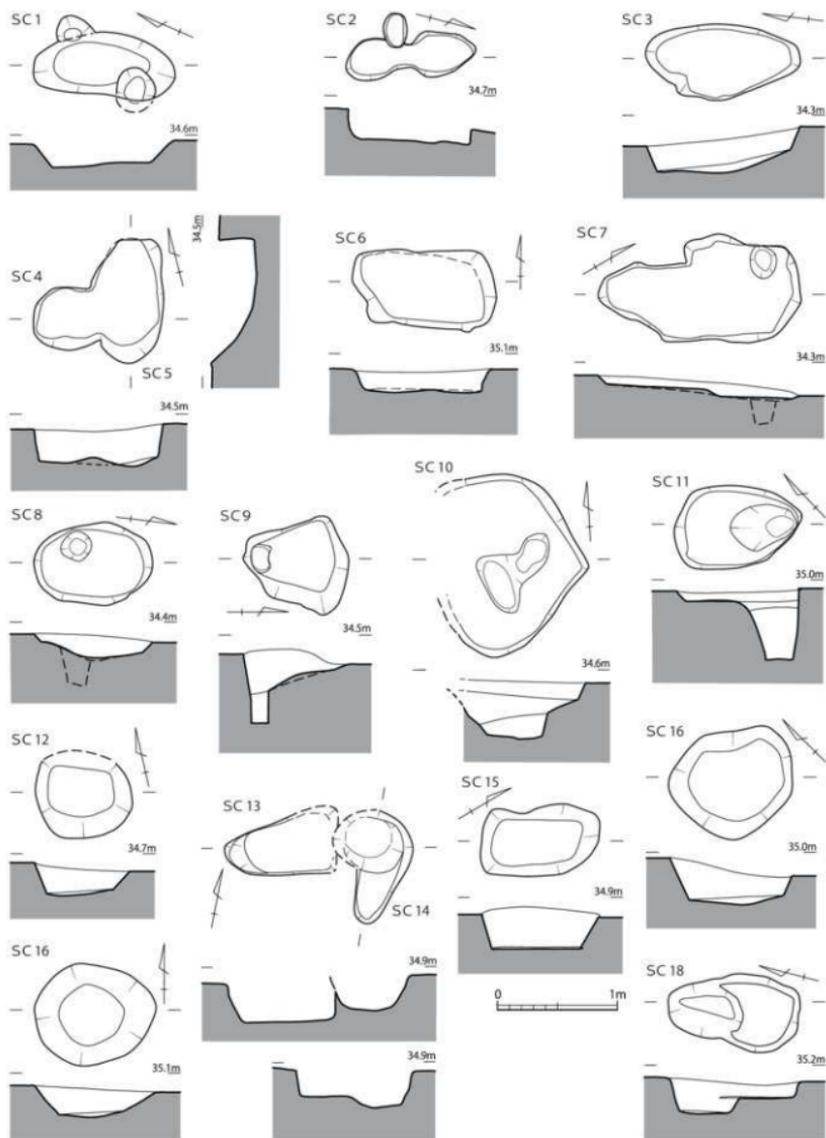
第61図 A地点 炉穴 (SP) 実測図2(S=1/40)

153はSC17出土の無文土器(Vic類)の胴部片である。上部には接合痕が認められる。154は尖頭状石器の未製品である。チャート製。155はSC19出土の底部の資料である。下部が欠損するが形状により尖底になるものと考えられる。内面は二次焼成における剥落が著しい。

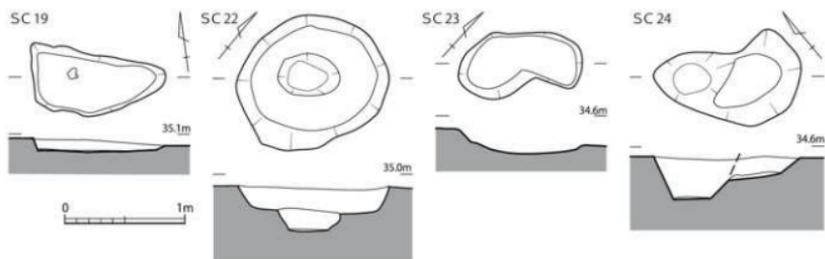
155はSH11(柱穴)出土の胴部片で、外面はナデ調整、内面は風化により調整が不明である。

No.	遺構番号	層位	調査区 (グリッド)	規模		深さ (m)	出土遺物	備考
				長軸×短軸 (m)				
1	SP1	K	A E2	1.1+α×0.6	0.19	—	—	瓢箪形プランを呈する。上部は削平を受けている。炭化物を含む。床面積0.26㎡。
2	SP2	K	A D2・D3	1.46+α×0.11	0.05	—	—	中世の道路状遺構のため、底面近くまで削平を受けている。SP3・SP4との切り合い関係は不明。炭化物を含む。
3	SP3	K	A D2・E2	1.64+α×0.84	0.12	—	—	中世の道路状遺構のため、底面近くまで削平を受けている。SP2・SP4との切り合い関係は不明。炭化物を含む。
4	SP4	K	A D2	1.95+α×0.72	0.06	—	—	中世の道路状遺構のため、底面近くまで削平を受けている。SP3・SP5との切り合い関係は不明。炭化物を含む。
5	SP5	K	A D2	1.52+α×0.69	0.1	—	—	瓢箪形プランを呈する。中世の道路状遺構のため、底面近くまで削平を受けている。炭化物を含む。
6	SP6	VI	A C2・C3	2.69×1.27	0.46	土器・石器	—	楕円形を呈する。ブリッジは確認できず。南壁に焼結による黒変が認められる。北側の焼土が認められるが、掻き出しによるものか。炭化物を含む。床面積0.89㎡。
7	SP7	VI	A D3	1.01+α×1.042	0.58	—	—	南側は中世の道路状遺構のため、削平を受け、外部のみ確認。炭化物を含む。
8	SP8	VI	A E3	0.82+α×0.62	0.21	—	—	南西側は中世の道路状遺構のため、削平を受け、外部のみ確認。炭化物を含む。
9	SP9	VI	A E3	1.54×0.82	0.22	—	—	楕円形プランを呈し、外部と足場の境界付近がくむれる。南西側は中世の道路状遺構のため、削平を受け、上部の約半分が消失。炭化物を含む。床面積0.72㎡
10	SP10	VI	A D4	2.66×1.42	0.23	土器	—	楕円形プランを呈する。ブリッジは確認できず。西側焼土は比較的しっかりしている。東側の焼土は掻き出しによるものと考えられる。炭化物を含む。床面積1.25㎡。
11	SP11	VI	A E5	1.43×0.63+α	0.37	—	—	楕円形プランを呈し、外部と足場の境界付近がくむれる。ブリッジは確認できず。外部には焼土があまり認められないが、全体的に黒変している。炭化物を含む。床面積0.347㎡
12	SP12	VI	A E5	1.23×0.73	0.22	—	—	楕円形プランを呈する。ブリッジは確認できず。西壁の一部は焼結による黒変が認められる。炭化物を含む。床面積0.54㎡
13	SP13	VI	A E5	1.50×1.01+α	0.24	—	—	楕円形プランを呈する。ブリッジは確認できず。楕円形プランを呈する。炭化物を含む。床面積0.89㎡
14	SP14	VI	A D5	2.02×0.89	0.25	—	—	楕円形プランを呈する。ブリッジは確認できず。足場の東側を一段低い。西壁の一部は焼結による黒変が認められる。東側の焼土は掻き出しによるものと考えられる。炭化物を含む。床面積1.13㎡
15	SP15	K	A C2	1.04+α×0.9	0.1	—	—	削平のため、外部のみ確認。炭化物を含む。
16	SP16	K	A D2	1.04+α×0.91	0.41	—	—	削平のため、外部のみ確認。炭化物を含む。
17	SP17	K	A E3	0.43+α×0.78	0.15	—	—	中世の道路状遺構のため、外部の一部のみ残存。炭化物を含む。

第8表 A地点 炉穴一覧表



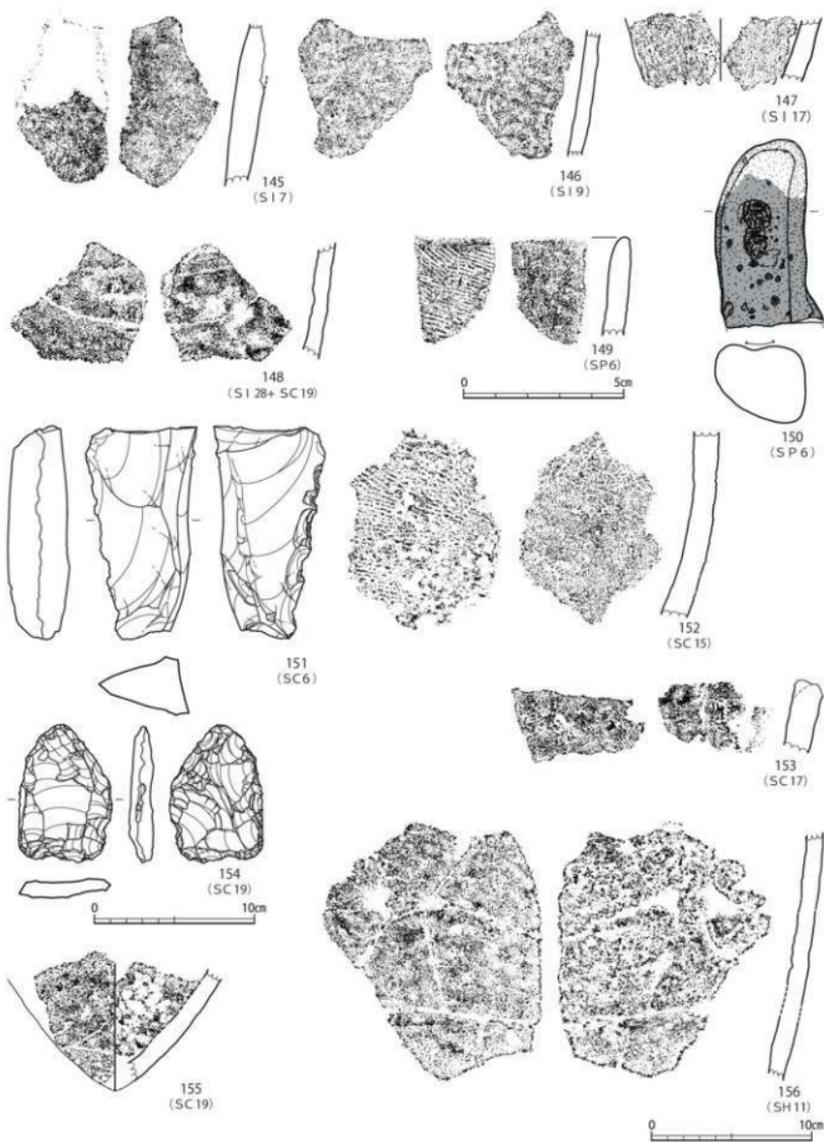
第62图 A地点 土坑 (SC) 实测图1 (S=1/40)



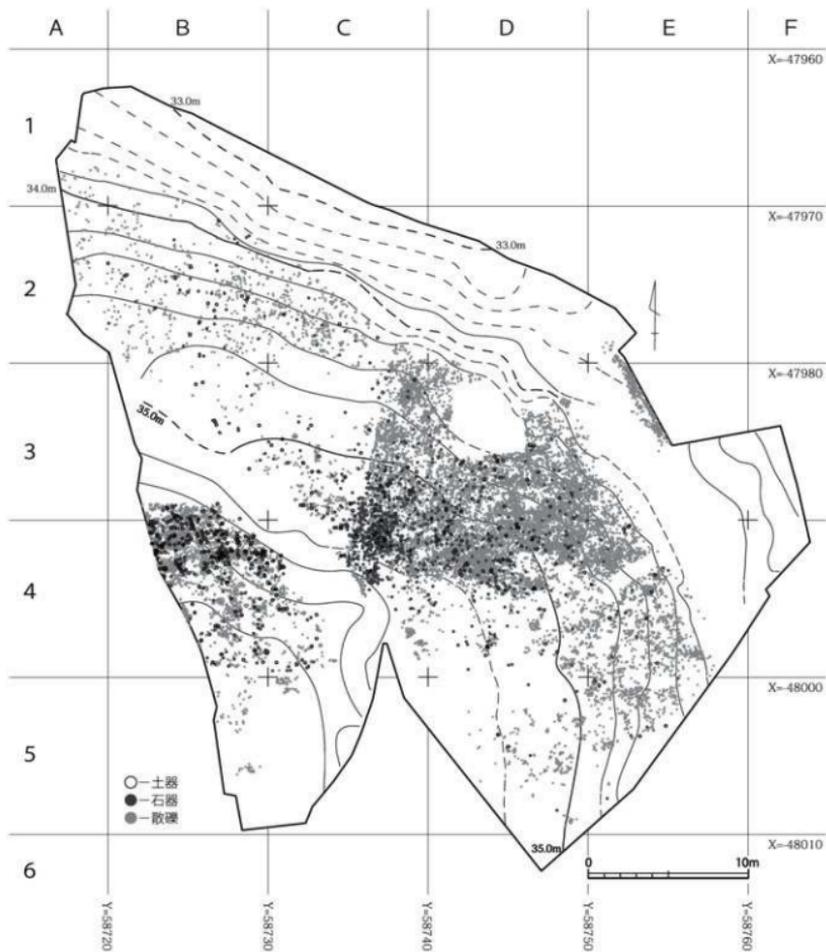
第63図 A地点 土坑 (SC) 実測図2(S=1/40)

No.	遺構番号	層位	調査区 (グリッド)	規模 長軸×短軸 (m)	深さ (m)	床面積 (㎡)	出土遺物	備考
1	SC1	VI	A B2・B3	1.17×0.54	0.19	0.22	—	楕円形プランを呈する。柱穴2基に切られる。
2	SC2	VI	A B2	1.01×0.39	0.23	0.24	土器	瓢箪形プランを呈する。柱穴1基に切られる。
3	SC3	VI	A B2	1.29×0.65	0.29	0.29	石器	楕円形プランを呈する。
4	SC4	VI	A B2	0.57+ a × 0.53	0.28	0.19	石器	楕円形プラン? SC5と切り合うが前後関係は不明。
5	SC5	VI	A B2	1.053×0.59	0.3	0.38	石器	楕円形プランを呈する。SC4と切り合うが前後関係は不明。
6	SC6	VI	A B2	1.21×0.66	0.18	0.5	石器	隅丸長方形プランを呈する。
7	SC7	VI	A C2	1.69×0.9	0.12	0.91	—	不整な楕円形を呈する。北側に柱穴が認められるが、遺構に伴うものかは不明。
8	SC8	VI	A C2	0.99×0.71	0.21	0.41	—	楕円形プランを呈する。南西側に柱穴が認められるが、遺構に伴うかは不明である。
9	SC9	VI	A C2	0.88×0.84	0.61	0.29	石器	卵形プランを呈し、南側に柱穴を有する。底面は柱穴に向かって傾斜する。
10	SC10	VI	A C10	1.54×1.31+ a	0.48	1.18+ a	土器・石器	楕円形プランを呈する。西側は古墳時代の惣穴住居跡(SA1)に切られる。中央に柱穴を有する。
11	SC11	VI	A C10	1.08×0.7	0.58	0.47	石器	楕円形プランを呈し、南東端に柱穴を有する。底面はほぼ水平である。
12	SC12	VI	A D4	0.82×0.74+ a	0.23	0.2	石器	上場は円形プラン、底面は隅丸長方形プランを呈する。
13	SC13	VI	A D4	0.95+ a × 0.518+ a	0.34	0.29+ a	—	楕円形プランを呈する。東側はSC14に切られる。
14	SC14	VI	A D4	0.96×0.67+ a	0.28	0.29+ a	—	L字形プランを呈する。北側は南側に比べ、底面が深くなる。西側はSC13を切る。プランが歪なため、土坑2基が切り合っている可能性も考えられる。
15	SC15	VI	A D5・D6	0.98×0.61	0.37	0.26	土器・石器	隅丸長方形プランを呈する。窪み出土している。
16	SC16	VI	A D4	1.03×0.94	0.34	0.40	—	楕円形プランを呈する。底面中央がやや凹む。
17	SC17	VI	A D4	1.01×0.88	0.24	0.21	土器	楕円形プランを呈する。
18	SC18	VI	A D5	1.09×0.65	0.29	0.26	—	楕円形プランを呈し、北側が一段深くなる。
19	SC19	VI	A D5	1.12×0.55	0.01	0.35	土器・石器	不整な楕円形プランを呈する。
20	SC22	VI	A C3・C4	1.27×1.12	0.37	0.71	土器	楕円形プランを呈し、中央が周りよりも一段深い。
21	SC23	VI	A B3・C3	1.05×0.56	0.15	0.31	土器	不整な楕円形プランを呈する。
22	SC24	VI	A D4	0.59+ a × 0.82	0.17	0.17+ a	—	北西部を柱穴に切られる。

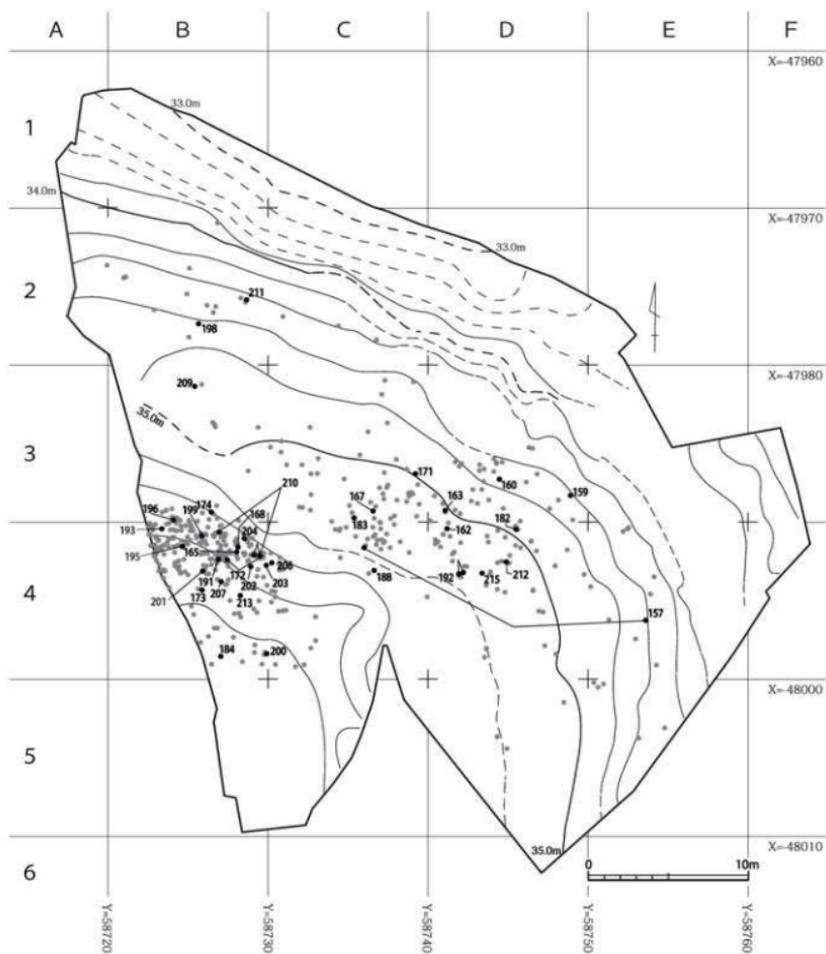
第9表 A地点 土坑一覧表



第64図 A地点 遺構内遺物実測図 (S=1/3、2/3)



第65图 A地点 遗物分布图(S=1/300)



第 66 图 A 地点 土器分布图 (S=1/300)

(2) 土器

A地点では、500点以上の土器が確認されている。B3グリッド南側からB4グリッド北側を中心とするまとまりとC3グリッド南側からD4グリッド北側を中心とするまとまりの2箇所が認められる。そのうち前者のまとまりについては密度が高い。また一部はVI層でも認められるが、V層上位～中位にかけて散陳中より出土している。土器は文様の特徴等によりVI類に分類される。

I類 (第67図157～159、161)

I類は口縁部に文様帯をもち、その下位が無文で構成される一群で、文様構成により、さらに3類に細分される。

I a類は口唇部に押圧による刻み、その下位に貝殻腹縁による横位6ないし7段の連続刺突文を巡らせるもので157が該当する。口縁部は直口し、口唇部は丸く仕上げられている。内外面ともナデ調整が施されている。いわゆる岩本土器に相当すると考えられるが、口唇部が内側に傾斜しない等の相違点も認められ、むしろ、後述するI b類との関連性が想定できる。

I b類は貝殻腹縁による縦位の連続刺突文を数段に施す一群で、158・159が該当する。そのうち158は口縁部が直口し、2段の連続刺突文を巡らせている。外面及び口唇部、内面には丁寧なナデ調整が認められ、口唇部は丸く仕上げられている。また159は口縁端部と口縁部に2種類の施文具を用い、上部に押し引き状の刺突を巡らし、その下位に3段の連続刺突文を巡らせている。口唇部から内面にかけて丁寧なナデ調整が施されている。これらの一群は、政所式土器(中原Ⅱ式)に相当する。

I c類は貝殻条痕を施すもので、161が該当する。161の口縁部については不明だが、長さ1.5cm前後と短い間隔で条痕を巡らせている。器面調整は文様下位や内面は丁寧なナデ調整が施されている。また図化していないが、貝殻条痕文を波状に巡らす中原Ⅲ式の胴部片も出土している。

II類 (第64図149、第67図160、162～164)

II類は器面に貝殻条痕を有する一群である。文様構成により3類に分類される。ただし、本地点の土器については風化しているものが多く、風化の度合いにより、後述するIII類の燃系文と区別できないものも認められる。

II a類は口唇部に貝殻腹縁による連続刺突文を巡らし、その下位は貝殻条痕を横位に施されているもので、160が該当する。160は中央右側には貝殻腹縁による刺突文が認められるが、故意に施文されたものかどうかは不明である。内面調整はI類同様、丁寧なナデ調整が認められる。

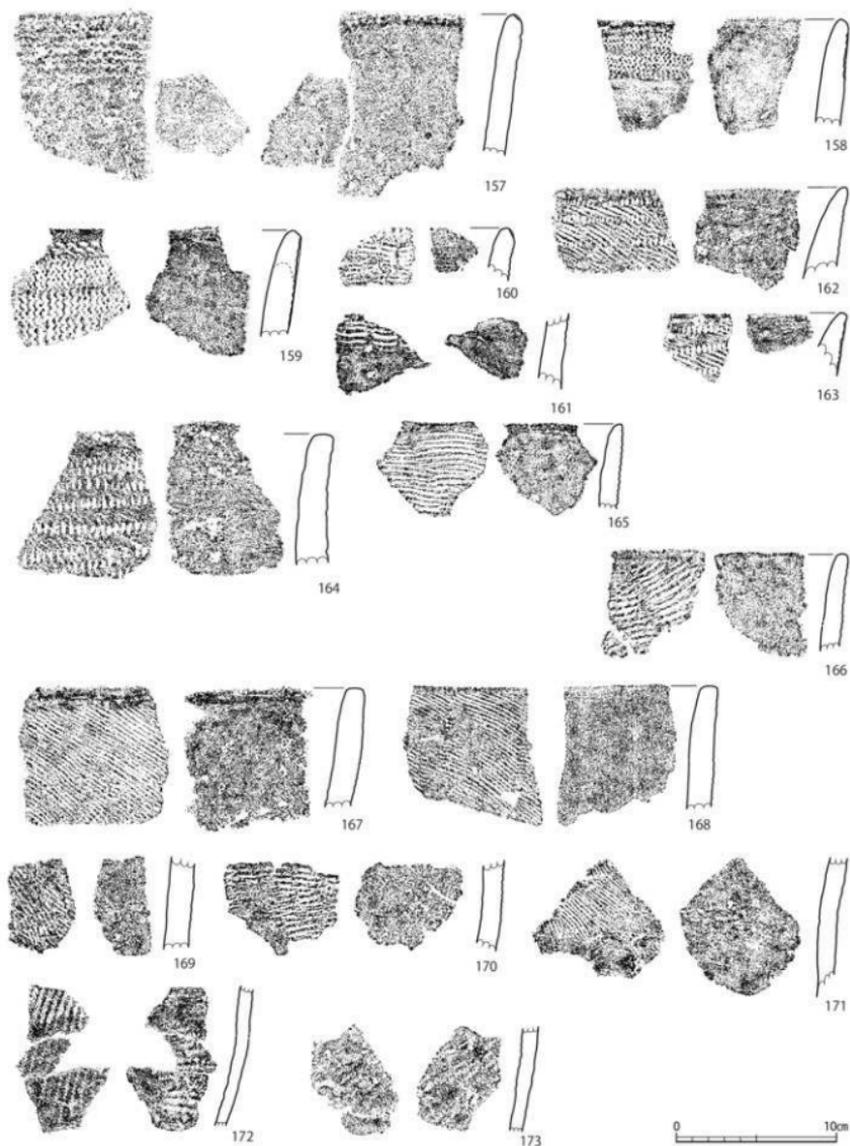
II b類は外面に斜位の貝殻条痕を施した後に、連続刺突文を等間隔に複数段、巡らせるもので、5点(2個体)が出土している。そのうち162、163は同一個体であり、162はD4グリッド北西側、163はD3グリッド南西側と近い範囲で出土している。164は表土中の出土であるが同一個体がE2グリッドで出土している。どちらも共通して口唇部から内面にかけて丁寧なナデ調整が施されている。口縁部は外反ぎみに開き、162・163の口唇部は尖り気味なのに対し、164は平らに仕上げられている。

II c類は貝殻条痕のみで構成されているもので、149が該当する。149は貝殻条痕を斜位に施し、口唇部から内面にかけては風化しているものの、丁寧なナデ調整が施されている。別府原式土器に相当する。

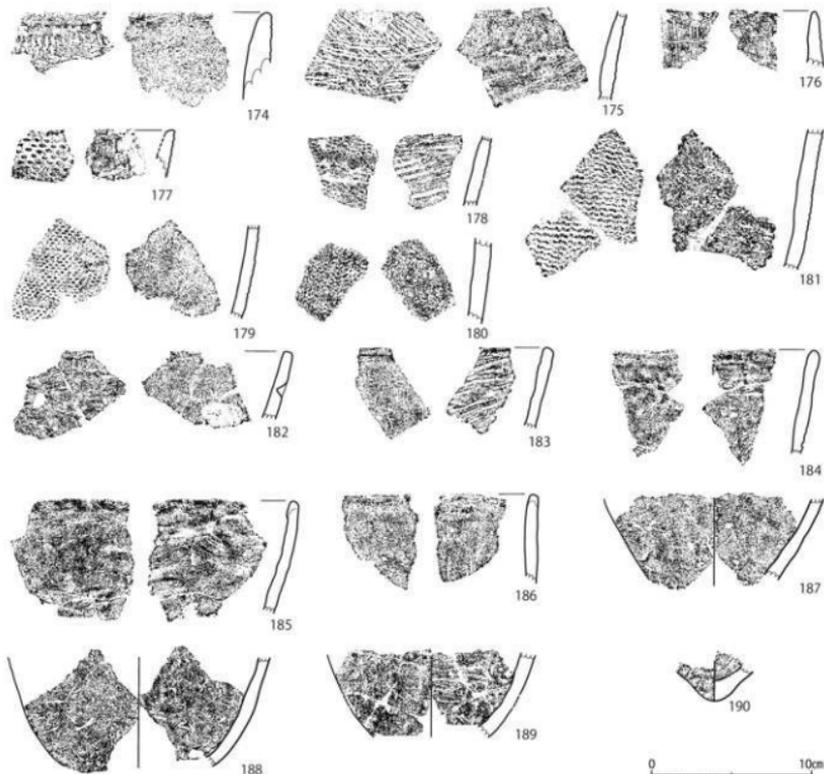
III類 (第64図152、第67図165～171、第68図174、第71図215)

III類は器面に燃系文を有する一群で、文様構成により、さらに2類に細分される。

III a類は、文様が燃系文のみで構成される一群であり、152、165～171・215(167・168は同一個体)が該当する。器形は直口もしくは外反ぎみに開き、口唇部を平らに仕上げられるものや先細り状に丸く



第 67 图 A地点 繩文時代早期土器実測圖 1 (S=1/3)



第68図 A地点 縄文時代早期土器実測図2 (S=1/3)

整形するものが認められる。襷糸文は、基本的に左から右下への斜位に施されるもの(152・167～169・171・215)が多い他、右から左下へ、逆方向に施文するもの(166)や横位に施文するもの(165)、横や斜位に施文するもの(170)が認められる。

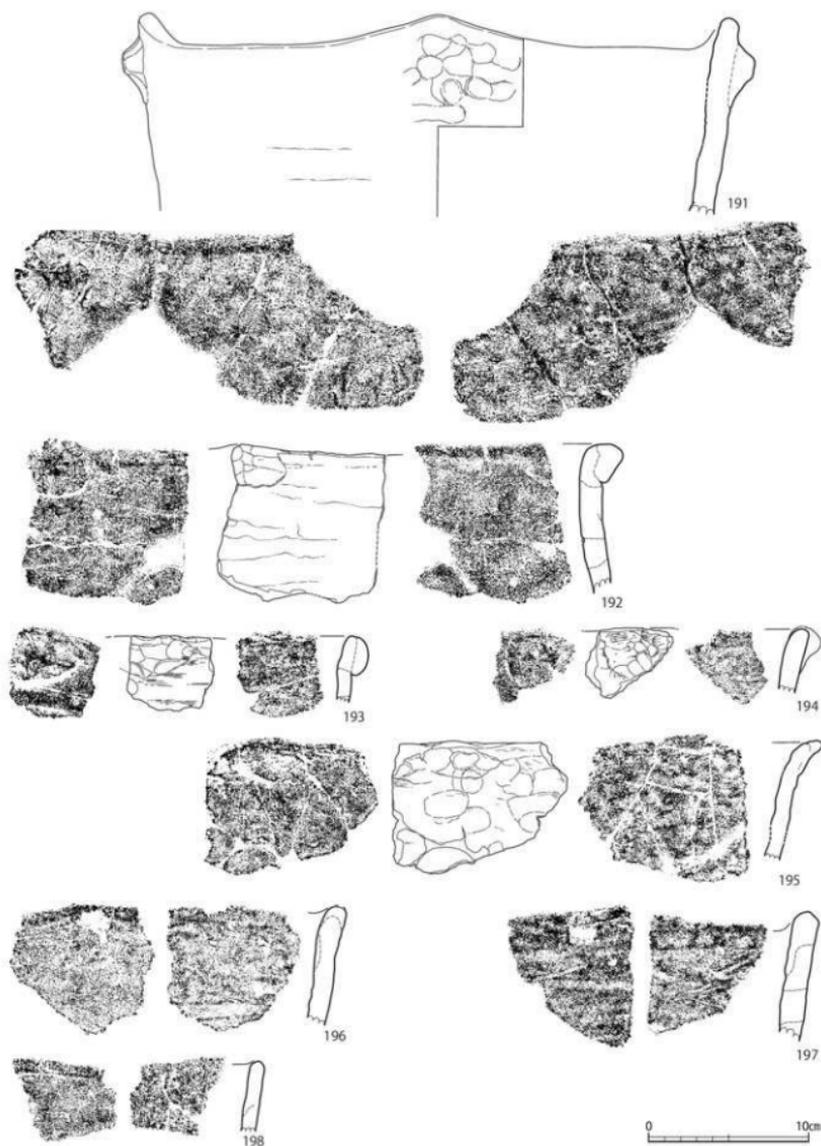
Ⅲ b類は、口縁部に2段の連続刺突文を施し、その下位に横位、縦位の襷糸文を施されるもので174が該当する。174は口唇部から内面にかけてナデ調整が認められる。

Ⅳ類 (第67図172・173、第68図175)

Ⅳ類は器面に縄文を施文するもので、文様構成により2類に細分される。

Ⅳ a類は内外面に縄文が認められるもので、172・173が該当する。172は外面に横に近い斜位、内面に縦位の縄文を施文している。また173は内外とも斜位に施文されている。

Ⅳ b類は縄文を斜位もしくは横位に施文し、棒状工具のより沈線文を曲線状に施すもので175が該当する。



第69図 A地点 縄文時代早期土器実測図3 (S=1/3)